

穴江塚田遺跡

福岡県嘉穂郡嘉穂町所在住居跡群の調査

嘉穂町文化財調査報告書

第 4 集

1984

嘉穂町教育委員会

穴江塚田遺跡

福岡県嘉穂郡嘉穂町所在住居跡群の調査

序

嘉穂町は、福岡県のほぼ中央部嘉穂郡の南端に位置し、馬見、屏、古処の三連峰に囲まれた地域であり、地味豊かで古くから穀倉地帯として栄えてきました。

ここ嘉穂町大字大隈字穴江・塚田が県営圃場整備事業（嘉穂地区）により、整地工事が行われることになり、遺跡の有無を把握するため、試掘調査を実施致しましたところ、多数の弥生、古墳、奈良時代の土器や遺構が確認されたため、地元の皆様に工事前発掘調査を申し入れましたところ、心よく承諾して頂き発掘調査を致しました。

発掘調査にあたりましては、福岡県教育庁筑豊教育事務所技術主査、井上裕弘先生はじめ、福岡県教育庁管理部文化課技術主査、柳田康雄先生、主任技師、新原正典先生の御指導を仰ぎ嘉穂土地改良区理事長、原田孝行氏を初め地元各関係者の方々の御協力を頂き、数々の出土品と共に、無事発掘調査が完了致しましたことを心から感謝申し上げます。

この報告書が本町の古代文化の研究はもとより郷土文化財の研究と保存を大切にしていく契機となれば幸いです。

昭和59年 3月31日

嘉穂町教育委員会

教育長職務代理者

教育課長 齊 藤 栄

例 言

1. 本書は、県営嘉穂地区圃場整備事業に伴う事前調査として実施した緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査は、嘉穂町教育委員会が昭和58年度に国・県の補助を受けて、福岡県教育委員会の援助を得て実施した。
3. 遺構の実測は柳田康雄・新原正典・井上裕弘・日高正幸があたった。遺物の実測は井上と木下修・林真理子両氏の協力を得た。製図は豊福弥生氏が行った。遺構写真は井上が、遺物写真は平島美代子氏の協力を得た。遺物整理は県文化課岩瀬正信氏の指導のもとに九州歴史資料館で実施された。
4. 題字は嘉穂町教育委員会大里富美雄氏による。
5. 本書の執筆は玉類・石器・土製品を木下が、他は井上が行い、編集は井上があたった。

本文目次

I	はじめに	1
II	位置と環境	3
III	穴江・塚田遺跡の調査	3
	1. 縄文・弥生・古墳時代の遺構と遺物	4
	2. 歴史時代の遺構と遺物	51
IV	柿木遺跡の調査	64
	1. 柿木A地区の遺構と遺物	64
	2. 柿木B地区の遺構と遺物	66
V	乙井手地区の調査	70
VI	おわりに	71
	1. 調査の成果と問題点	71
	2. 嘉穂地方における弥生後期から古墳前期の土器群について	76

I はじめに

本調査は、圃場整備事業に伴う事前の緊急発掘調査として、町が国及び県の補助を受け実施したものである。遺跡は福岡県嘉穂郡嘉穂町大字上大隈字穴江・塚田・柿木・乙井手に所在する。

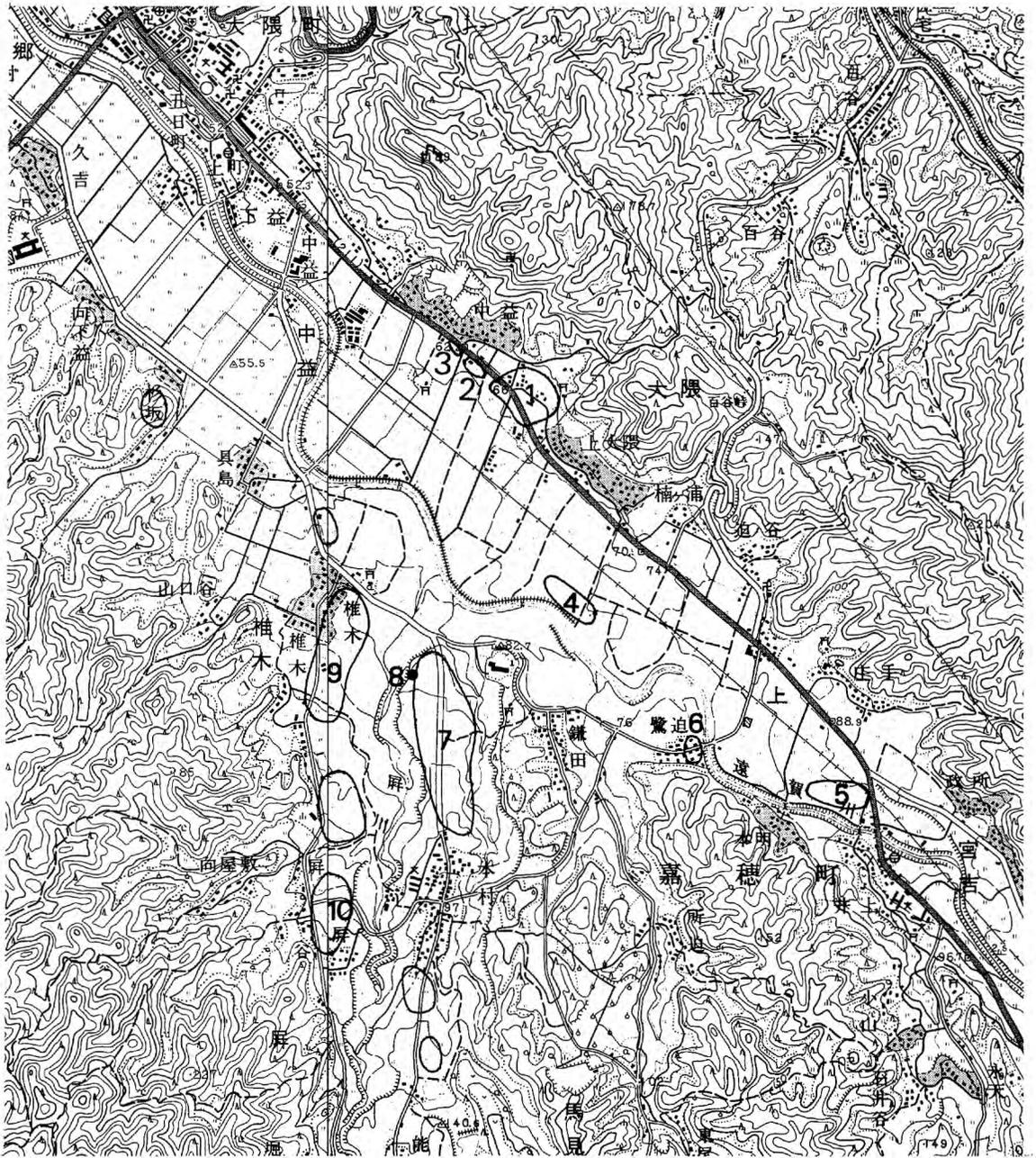
昭和56年3月、嘉穂町経済課より県教育委員会文化課あてに、嘉穂地区圃場整備事業予定地内の埋蔵文化財の有無について文書による協議がなされた。これを受けて県文化課では早速、現地に赴き分布調査を実施した。その結果、数ヶ所にもものぼる多数の遺跡群が平野に面した丘陵や低位段丘上に分布していることが明らかになった。従って、実施計画の段階で充分協議することとなった。

昭和57年2月、文化財の所在する上大隈地区の実施が決定されたため、事業地内の文化財の所在ならびに内容・深度を知るべく試掘調査を行った。その結果をもとに、県文化課・町経済課・町教委・土地改良区の四者で切り盛り計画の変更も含め調整・協議した。その結果、やむなく削平が遺構面に及ぶ約12,000㎡の地区について発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、町が調査主体となり昭和58年7月1日から10月11日の間で実施した。調査関係者は下記のとおりである。

調査責任者	嘉穂町教育委員会	教育長	梅木 止
	同	教育長職務代理	斉藤 栄
	同	社会教育課長（前任）	城 吉也
	同	同（後任）	大谷 清人
	同	同係長	大塚 三男
	同	同主事	大塚 正則
		同社会教育係	岡田 弘子
	同	同指導員	大里富美雄
調査担当者	福岡県教育庁文化課	技術主査	柳田 康雄
	同	主任技師	新原 正典
	福岡県教育庁筑豊教育事務所	技術主査	井上 裕弘
調査補助員			日高 正幸

この他に、教育庁筑豊教育事務所社会教育課長鎌田俊浩氏、町臨時職員筒井敏博氏、町経済課、工事者安川組をはじめ、発掘作業に従事していただいた地元の方々、並びに整理作業にあたっては九州歴史資料館の方々の御協力を得た。記して謝意を表します。



- 1 穴江・塚田遺跡 2 柿木遺跡 3 乙井手地区 4 檜町遺跡 5 勘高遺跡
 6 鷺迫遺跡 7 足白遺跡群 8 足白大塚古墳 9 上権遺跡 10 屏遺跡群

第 1 図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第 2 図 調査地点地形実測図 (1/2,000)



第3図 穴江・塚田遺跡遺構配置図(1/200)

II 位置と環境

嘉穂町は福岡県のほぼ中央部嘉穂郡の南端に位置している。馬見・屏・古処山といった連峰に囲まれ、町の中央には遠賀川（嘉麻川）が蛇行しながら北流し、肥沃な沖積平野を形成している。

これら山麓には、幾多の低平な丘陵や河岸段丘・自然堤防が発達していて、その上には多数の遺跡群が形成されている。桑野・宮吉といった狭い山間をぬって流れてきた遠賀川が上大隈付近で広い平野部に出る。本遺跡は、その右岸に形成された河岸段丘の先端部に位置している。

周辺で知られる遺跡としては、右岸の自然堤防にある弥生時代中期から後期の集落遺跡と思われる上大隈・榎町遺跡、中世の集落と思われる勘高遺跡などがある。対岸の馬見山北麓に派生した低位な丘陵上には、昭和56年11月、圃場整備事業に伴う事前調査として実施された縄文弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉時代と長期間にわたる遺構・遺物が発見された広大な上椎遺跡をはじめ、その南方につづく屏遺跡群、谷を挟んだ東側の丘陵上には弥生時代から古墳時代に続く広範な足白遺跡群が形成されている。また、丘陵先端部に位置する古式古墳と思われる足白大塚古墳、弥生から中世にわたる遺構・遺物が発見された鷺迫遺跡など多数の遺跡が分布している。とりわけ馬見北麓に形成された遺跡群は、右岸の遺跡群に比べ広大かつ密集している。

それは圃場整備計画時に行なわれた土壌調査の結果でも、遠賀川の氾濫が右岸に多発していたのに対し、左岸の沖積地は安定した耕地を確保していたことがわかる。そこにはこれら広大な遺跡群を支え得た強大な生産基盤が存在したことを物語っているといえるだろう。

また、これら遺跡群についても圃場整備事業が計画されているので、今後の調査の進展によっては嘉穂町の歴史は大きく塗り変わる可能性を秘めている。

III 穴江・塚田遺跡の調査

遺跡は水田の開削や耕作等によりかなり削平されていたが、弥生時代中期の袋状堅穴24基、土壇5基、堅穴住居跡8軒、弥生後期後半から終末の堅穴住居跡21軒、古墳時代前期の堅穴住居跡1軒、方形環濠状遺構1条、奈良時代の掘立柱建物跡5棟以上、堅穴遺構1基、土壇2基が発見された。他に、多数のピット群が検出されているが遺構としてのまとまりを把握できなかった。遺存した各遺構が極めて浅いことから判断しても本来は多数の遺構が存在していた可能性が高い。

今回、発掘した地区は遺跡の西端部の実態を知り得ただけで、遺跡はさらに東側に拡がって

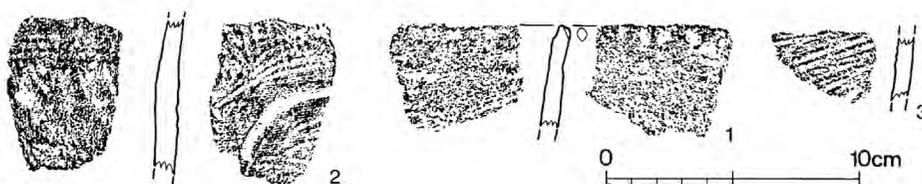
いて、その範囲は広大のようである。

発掘区は農道を挟んで北側が小字穴江、南側が小字塚田に属している。地形的には塚田地区から南東に高くなっていたようで、穴江地区南東部から塚田地区の遺構は完全に近い状態で削平されていた。

1. 縄文・弥生・古墳時代の遺構と遺物

(1) 縄文土器 (第4図)

いずれも風化した破片資料ではあるが、条痕文系の土器である。1は口縁部付近の破片で、口縁端部外面に篋状工具による刻目が施されている。色調は茶褐色ないしは暗茶褐色を呈している。縄文後期に比定できよう。他に、縄文時代の石器と思われる石斧(第11図)などが出土している。



第4図 縄文土器実測図(1/3)

(2) 袋状竪穴

1号袋状竪穴 (第5図) 穴江地区の南西端部から検出された底面楕円形プランを呈す竪穴で、径 138×142cmを測る。深さは中央で60cmを測る。出土遺物としては弥生土器小片が出土したのみで時期は不明。

2号袋状竪穴 (第5図) 1号袋状竪穴の北側から検出された底面プラン円形を呈す竪穴である。底面径約 150cm、深さ33cmを測る。出土遺物としては埋土中から円筒状の器台と小片が若干出土した。時期は中期前葉でも古期に属するものと思われる。

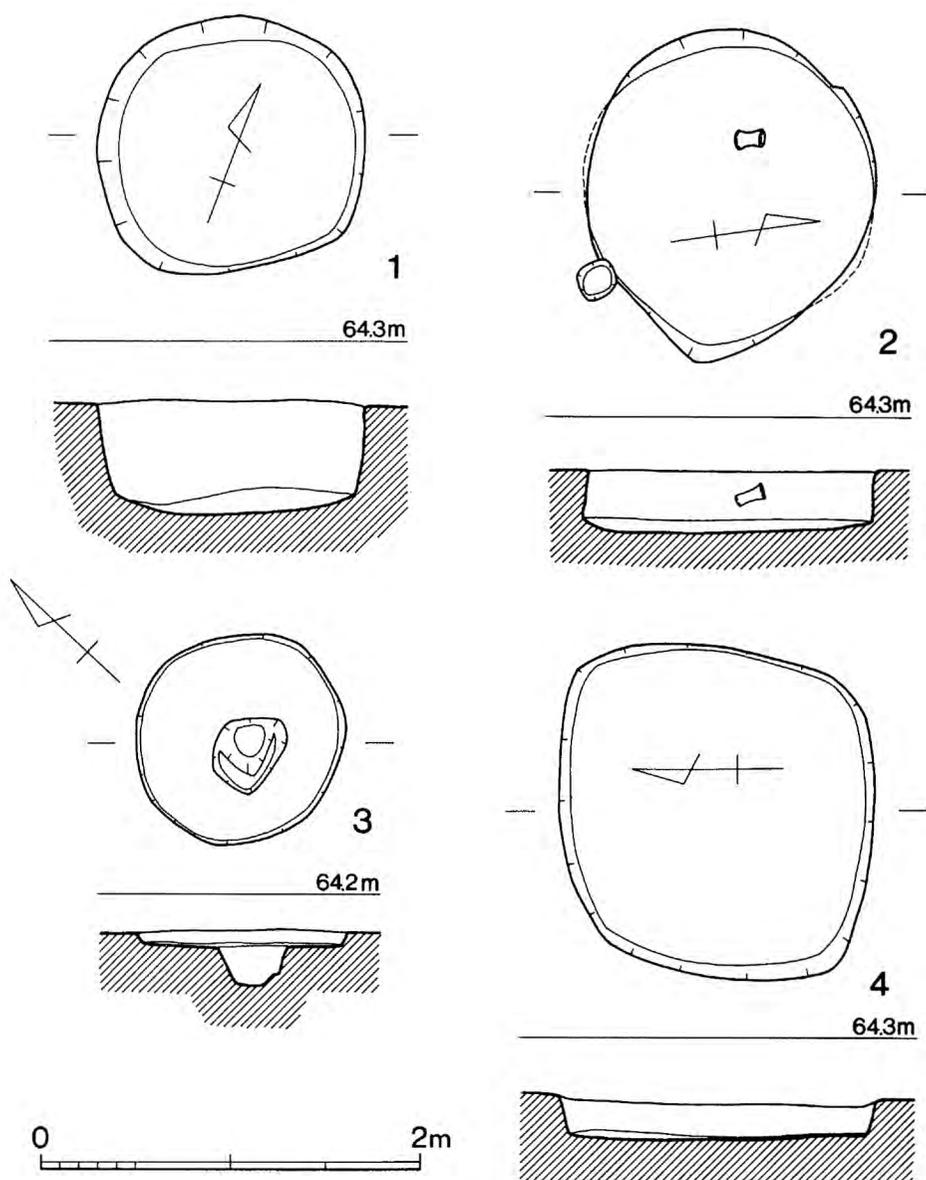
出土遺物

器台 (図版15、第6図1) 器受部・裾部径ともほぼ同じ筒形の器台である。器受部径 8.5cm、裾部径 8.8cm、器高14.5cmを測る。調整は器面の風化が著しく不明で、色調は黄褐色を呈す。

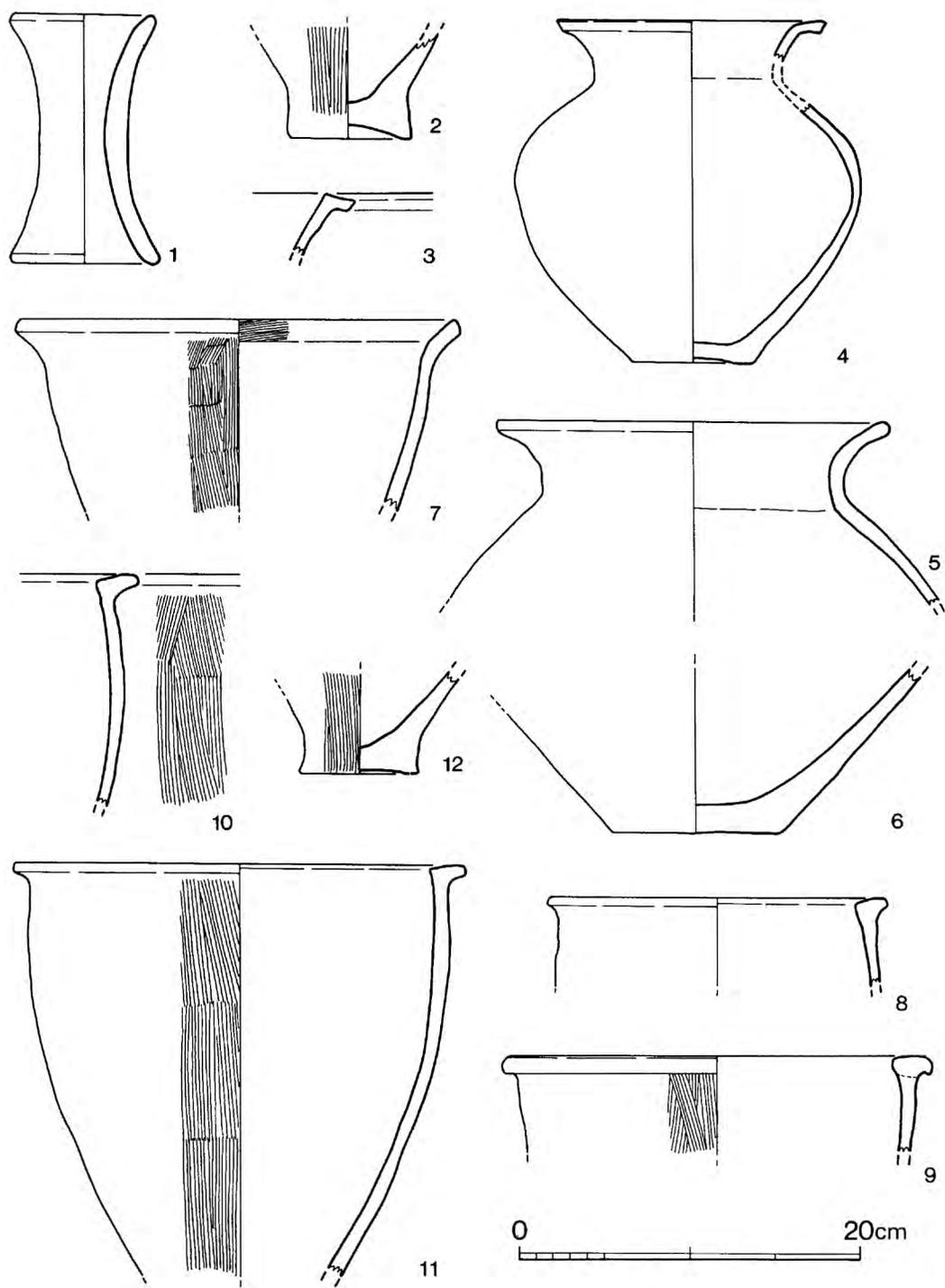
3号袋状竪穴 (第5図) 2号袋状竪穴の東側から検出された底面プラン円形を呈す浅い竪穴で、底面中央にピットが掘られている。底面径 103cmを測る。出土遺物は土器小片のみで時期は不明。

4号袋状竖穴（第5図） 3号の東側から検出された胴張りの隅丸方形プランを呈す竖穴で、3号と同様浅い。底面の規模は 157× 166cmを測る。出土遺物としては若干の弥生土器片が出土したのみである。時期は中期前葉でも古期に属するであろう。

出土遺物



第5図 袋状竖穴実測図1(1/40)



第6图 袋状竖穴出土土器实测图1(1/4)

甕（第6図2） 凹み底の破片資料である。胴部外面刷毛、内面と底部付近外面及び外底はナデで仕上げている。色調は外面明茶褐色、内面暗茶褐色を呈す。底径 7.2cmを測る。

5号袋状竪穴（第3図） 後世の攪乱でその半分を欠失したほぼ円形プランを呈す竪穴である。出土遺物は弥生中期の土器片が若干出土したのみである。

6号袋状竪穴（第7図） 西壁側が直線状をなす底面形態円形プランの竪穴である。底面より浮いた状態で壺・甕等の土器破片が出土した。底面径約 145cmを測る。時期は中期前葉でも古期に属す。

出土遺物（第6図）

壺（3） 原初的ともいえる鋤先状口縁の破片資料で、口頸部の外反は強い。色調は茶褐色を呈すが、調整手法は風化のため不明である。

7号袋状竪穴（第7図） 6号に西接して発見された不整楕円形プランの竪穴で、北側の一部を8号袋状竪穴に切られている。出土遺物は弥生土器小片のみである。

8号袋状竪穴（図版2、第7図） 7号を切った状態で検出された隅丸長方形プランの竪穴で、長径 150cm、短径 118cmを測る。底面より若干浮いた状態で、東壁側に集中して壺・甕・器台等がつぶれて多数出土した。時期は中期前葉でも古期に属す。

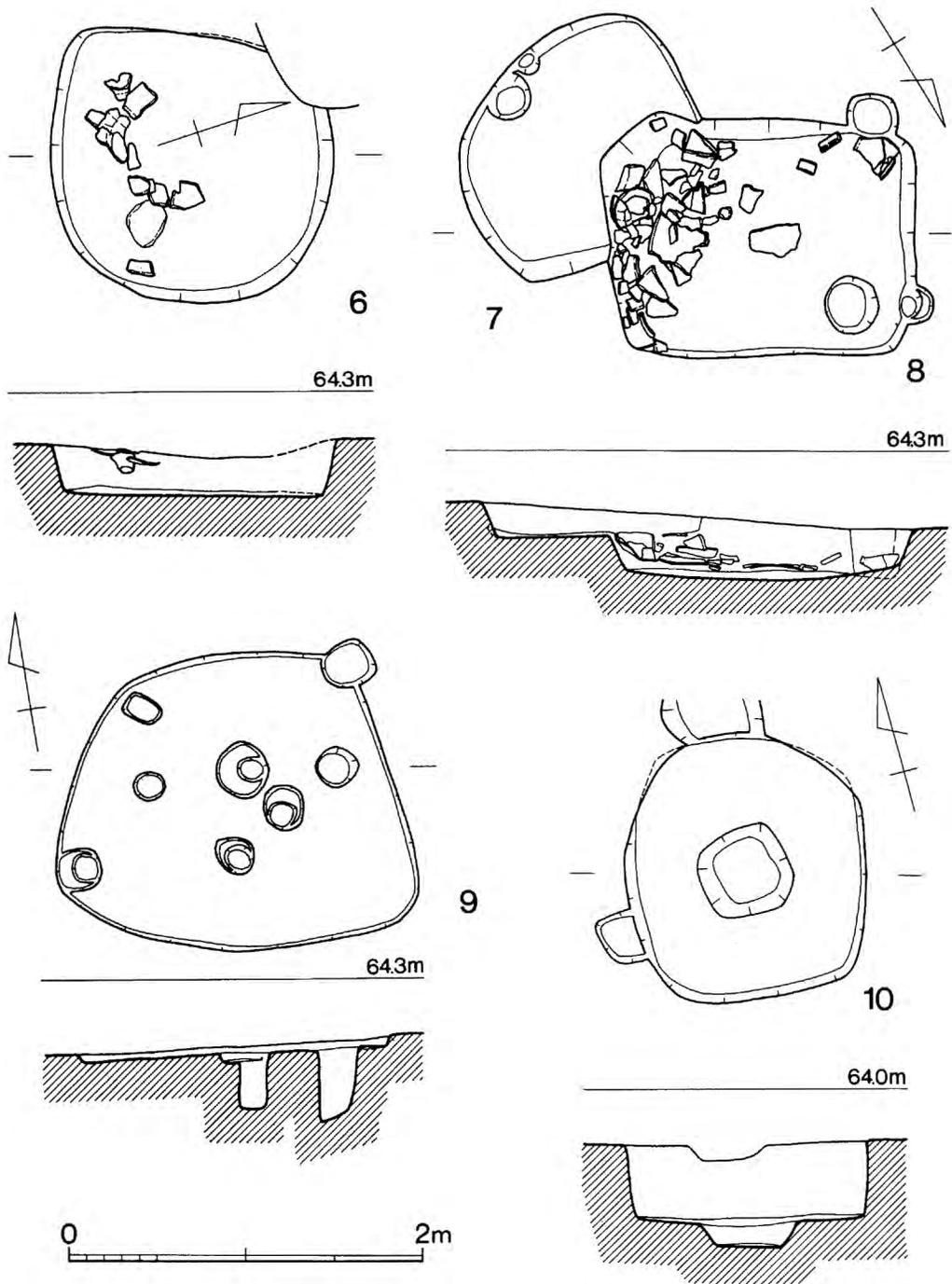
出土遺物（図版15、第6・8図）

壺（4～6） 4は扁球形の胴部に立ち気味に大きく外反する口縁部がつく小形の壺で、底部は凹み底である。胴部内面・外底部をナデしている他は、ヘラ磨きで仕上げている。色調は暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。口径15.8cm、器高20cm、胴部最大径20.3cmを測る。5も4と同様に立ち気味に大きく外反する大形の壺破片で、復原口径23.1cmを測る。色調は暗赤褐色を呈し、調整は器面の風化が著しく不明である。6は大形壺の底部付近の資料で、底径10cmを測る。

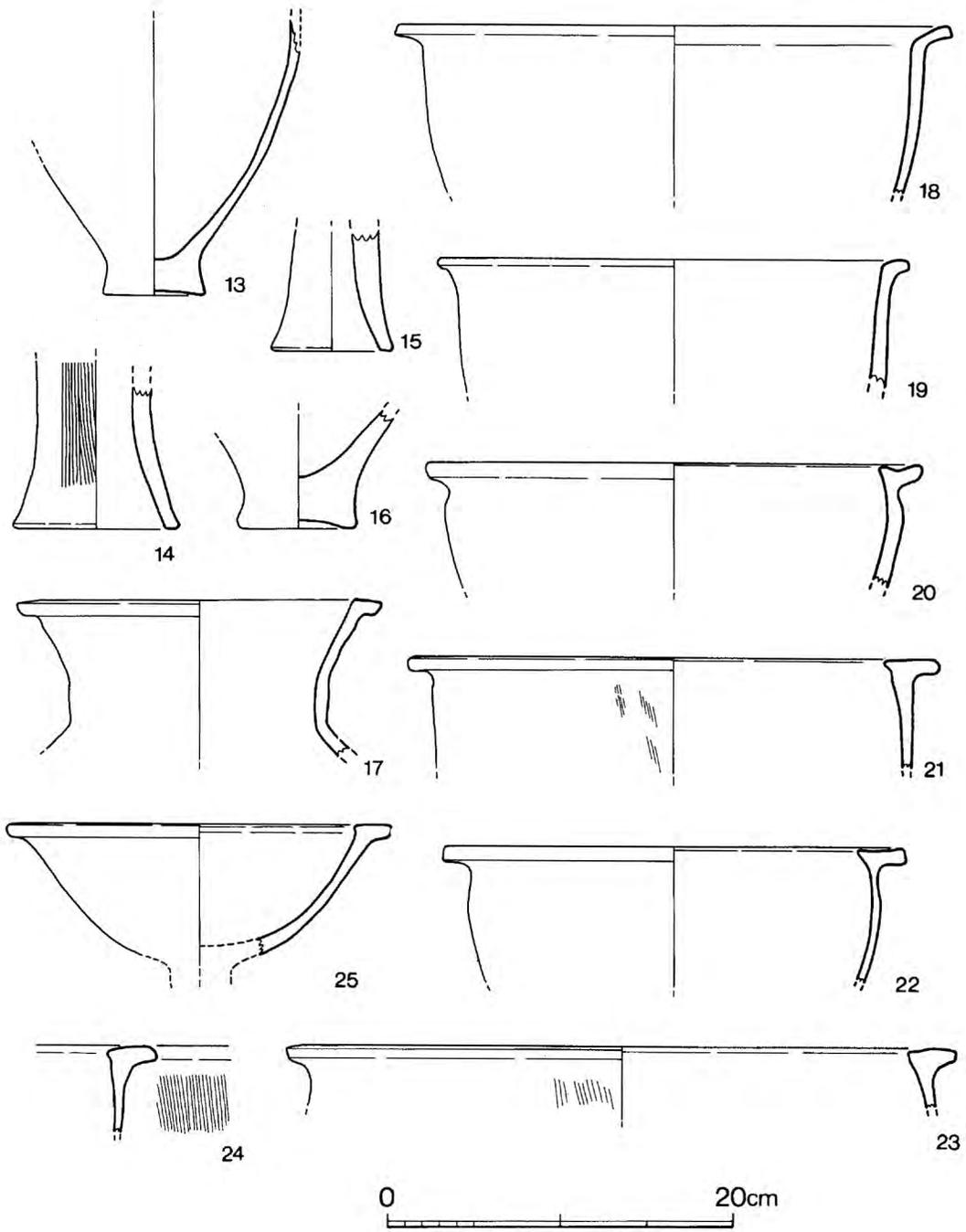
甕（7～13） 大きく二つのタイプがある。いわゆる如意口縁のもの（7）と原初的ともいえる短小のT字状口縁の甕（8～11）である。底部は12・13ともわずかに凹み底の肉厚のもので、裾部が外方に張るタイプである。調整は胴部外面刷毛、内面ナデ、口縁部内外をヨコナデで仕上げたものが一般である。7のような口縁部内面をヨコナデのあとさらに横位の刷毛調整したものもある。口径は8が19.9cmと小さい他は、7が25.9cm、9が25.2cm、11が26.6cmを測る。色調は11が黄褐色の他は、茶褐色ないしは暗茶褐色を呈す。焼成はいずれも良好である。

器台（14） 器受部を欠く円筒状の器台で、外面刷毛、内面ナデ、裾部内外はヨコナデで仕上げている。色調は茶褐色～暗茶褐色を呈す。裾部径 9.6cmを測る。

9号袋状竪穴（第7図） 8号の北側に近接して検出された不整隅丸方形プランの浅い竪穴である。底面には7個のピットがみられるが付随するかは不明である。長径 205×短径 170cmを測る。出土遺物としては器台破片と若干の土器小片が出土したのみである。時期は他例と同



第 7 图 袋状竖穴実測图 2 (1/40)

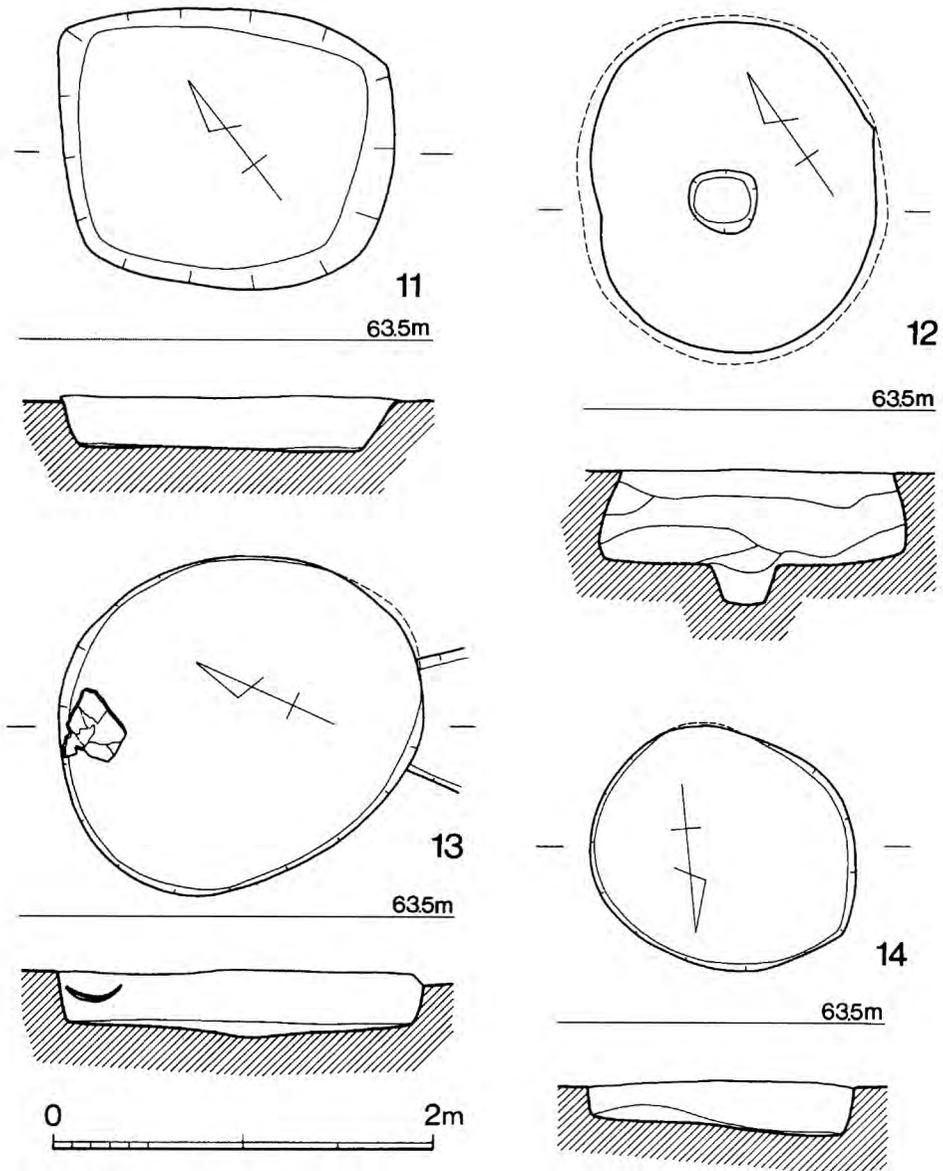


第 8 图 袋状竖穴出土土器实测图 2 (1/4)

様、中期前葉でも古期に属するものであろう。

出土遺物（第8図）

器台（15） 器肉の厚い小形の筒状器台で、裾部径7cmを測る。調整は風化が著しく不明で、色調は茶褐色を呈す。



第9図 袋状竪穴実測図3 (1/40)

10号袋状竪穴(図版2、第7図) 底面形態が胴張りの長方形プランを呈す竪穴で、中央底面には径約55cm、深さ15cmのピットが穿たれていた。底面規模は145×128cmを測る。出土遺物としては弥生中期の土器小片が若干出土したのみである。

11号袋状竪穴(第9図) 北側の一群をなす竪穴で、底面形態は隅丸長方形を呈す。長径148×短径127cmを測る。出土遺物は土器小片が少量出土したのみで時期不詳。

12号袋状竪穴(図版3、第9図) 最も袋状の形態を残した竪穴である。底面形態は円形で、底面中央に1個のピットを設けている。底面付近埋土には多くの炭化物・焼土がみられた。出土遺物としては若干の弥生中期前葉の土器破片が出土した。

13号袋状竪穴(図版2、第9図) 12号の西側から検出された楕円形プランの竪穴である。底面規模は200×165cmを測る。出土遺物としては底面より浮いた状態で大形の甕の破片と若干の土器片が出土した。時期は弥生中期前葉と思われる。

14号袋状竪穴(図版3、第9図) 底面形態楕円形プランを呈す竪穴で、規模は120×150cmを測る。出土遺物は弥生中期の土器片若干である。

15号袋状竪穴(第10図) 14号の北側から検出された楕円形プランを呈す竪穴で、北壁側は袋状を残している。埋土中には多くの焼土塊や炭化物がみられた。出土遺物としては弥生中期前葉の土器破片が若干出土したのみである。

16号袋状竪穴(第10図) 底面形態がほぼ円形を呈す竪穴で、その規模は径約150cmを測る。出土遺物は若干の土器破片のみである。時期は他例と同様、中期前葉でも古期に属するものであろう。

出土遺物(第8図)

甕(16) 凹み底で器肉の厚い底部付近の資料で、裾部が外方に張る土器である。底径6.9cmを測る。器面は風化が著しく調整不明。

17号袋状竪穴(第3図) 16号の東側から検出された円形プランの竪穴である。径約120cmを測るが、深さ約10cmと極めて残りが悪い。床面には2個のピットがあるが付随するものかは不明である。若干の弥生土器小片が出土したのみである。

18号袋状竪穴(第10図) 楕円形プランの袋状を呈す竪穴で、長径142cm、短径127cmを測る。出土遺物は弥生中期の土器片が少量出土したのみである。

19号袋状竪穴(第10図) 12号と18号の間から検出された極めて浅い不整楕円形プランの竪穴である。出土遺物は弥生中期の土器片が若干出土した。

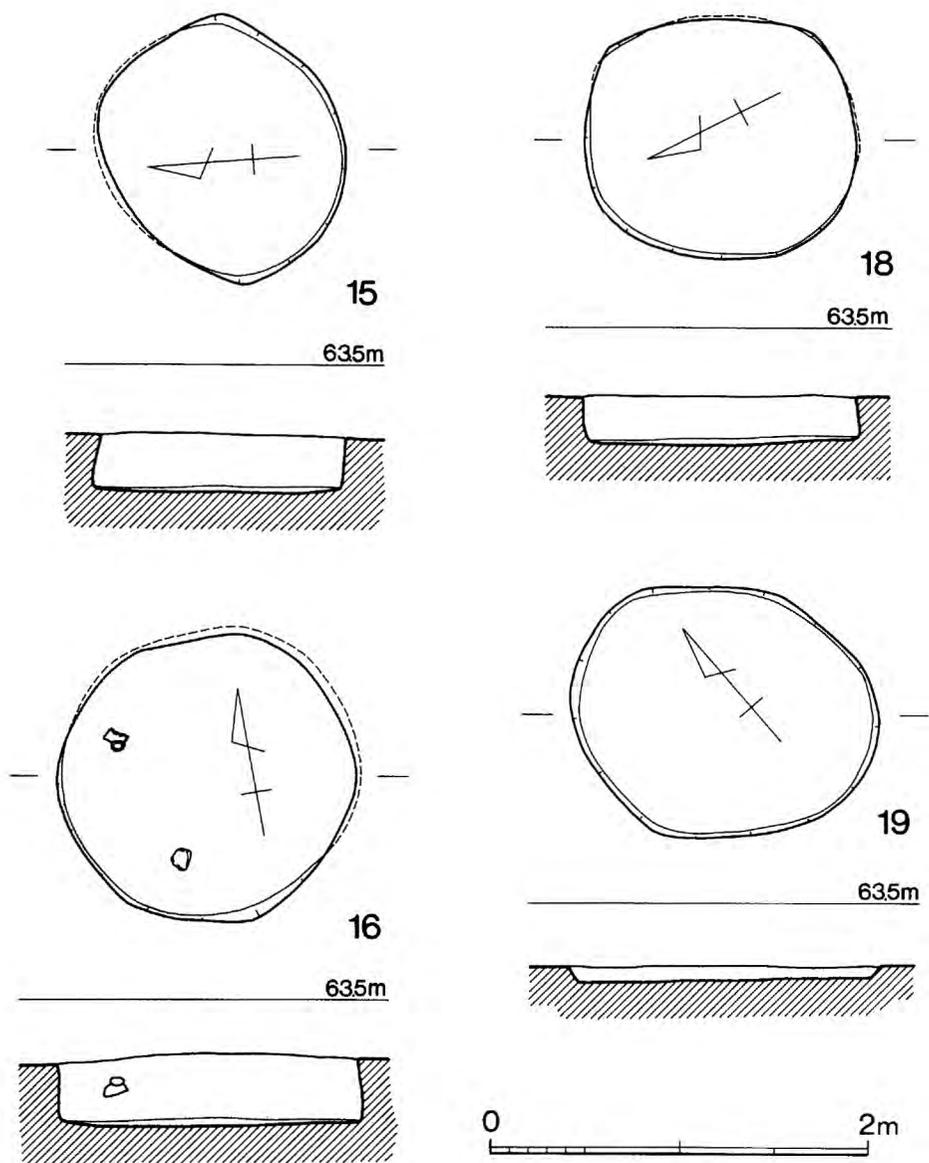
20号袋状竪穴(第12図) 2号住居跡の南西隅床面下より検出された竪穴で、底面の平面形態は楕円形を呈す。底面の規模は、長径148cm、短径135cm、深さ中央部で30cmを測る。出土遺物は土器小片が若干出土したのみである。

21号袋状竪穴(第3図) 6号の東側で、2号住居跡の床面下から発見された竪穴で、底面

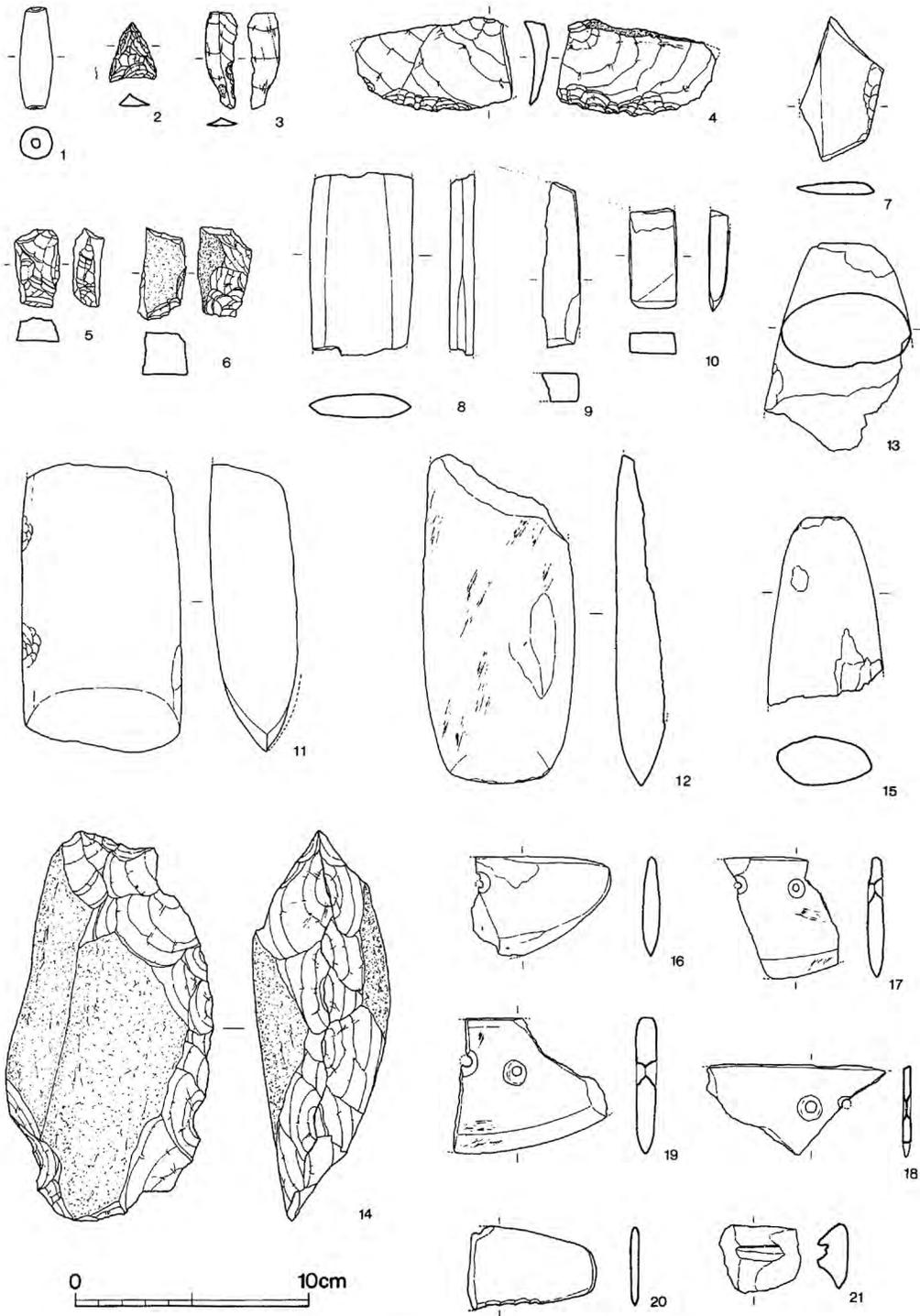
形態は不整楕円形を呈している。埋土中からは壺・甕等の破片と扁平片刃石斧片 1 点が出土した。時期は出土土器から弥生中期前葉に比定できる。

出土遺物 (第 8・11 図)

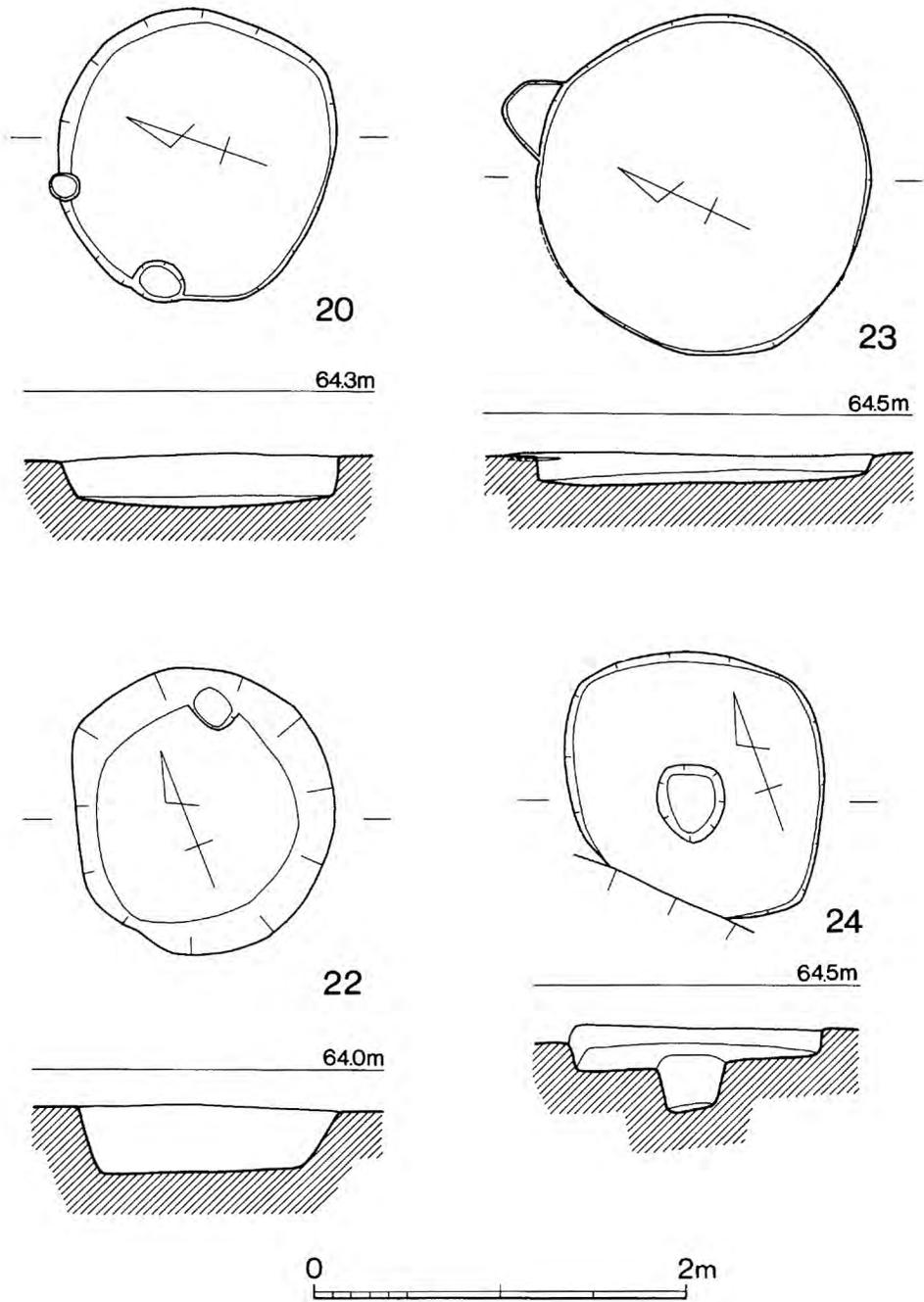
壺 (17) 肩部から口頸部付近の破片資料である。いわゆる原初的な鋤先状口縁を有す壺で、



第 10 図 袋状竪穴実測図 4 (1/40)



第 11 图 土製品・石器実測図 (1/3)



第 12 图 袋状竖穴实测图 5 (1/40)

口頸部の外反は大きい。復原口径20.9cmを測る。器面は風化が著しく調整手法は不明である。

甕(18~24) 若干の小差はあるものの大きく二つのタイプに別けることができる。いわゆる如意形口縁のもの(18・19)とT字状口縁の甕(20~24)である。いずれも風化がはげしく調整手法を知りえるものが少ないが、24は胴部外面刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げているものと思われる。口径は23が38.8cmと大きい他は、26.9~32.2cmを測る。色調は21が黄褐色の他は茶褐色ないしは暗茶褐色を呈している。

石器(第11図9) 扁平片刃石斧だが、その大部分を欠損する。厚さ1.3cmを測る。覆土出土で、泥岩製。

22号袋状竪穴(第12図) 2号住居跡の北東隅床面下から検出された床面プラン不整楕円形を呈す竪穴である。床面規模は115×112cmを測る。底面北壁に接してピットが付設されている。弥生中期前葉の土器破片が若干出土した。

出土遺物(第8図)

高杯(25) 短小の鋤先状口縁を有す深目の杯部の破片資料である。風化のため調整は不明。復原口径22.2cmを測る。色調は茶褐色を呈す。

23号袋状竪穴(図版3、第12図) 塚田地区北東部から検出された底面プラン円形を呈す竪穴で、底面付近を残すだけの浅いものであった。径約180cmを測る。埋土中からは若干の炭化物とともに弥生中期前葉でも古期に属すと思われる土器破片が若干出土したのみである。

24号袋状竪穴(第12図) 23号の西側から発見された竪穴で、平面形態は胴張りの隅丸方形である。底面での規模は130×135cmを測る。底面中央にはピットが穿たれている。出土遺物は少量の土器小片のみで時期不詳。

(3) 土 墳

1号土墳(第13図) 穴江地区南端部から検出された長方形プランを呈す土墳で、長軸をほぼ南北に有している。長辺198cm、短辺60cm、深さ最深部で50cmを測る。底面北側小口部付近に浅い小ピットがみられる。埋土中から多くの炭化物・焼土が検出された。出土遺物としては甕などの土器片が床面よりわずかに浮いた状態で出土した。時期は前期末から中期初頭に属すものと思われる。

出土遺物(第14図)

甕(1・2) いずれも如意形口縁の甕で、2の口縁端部外面はヨコナデにより凹線状をなしている。調整は胴部外面刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。2の外面全体に煤の付着がみられる。復原口径1が27.5cm、2が27cmを測る。

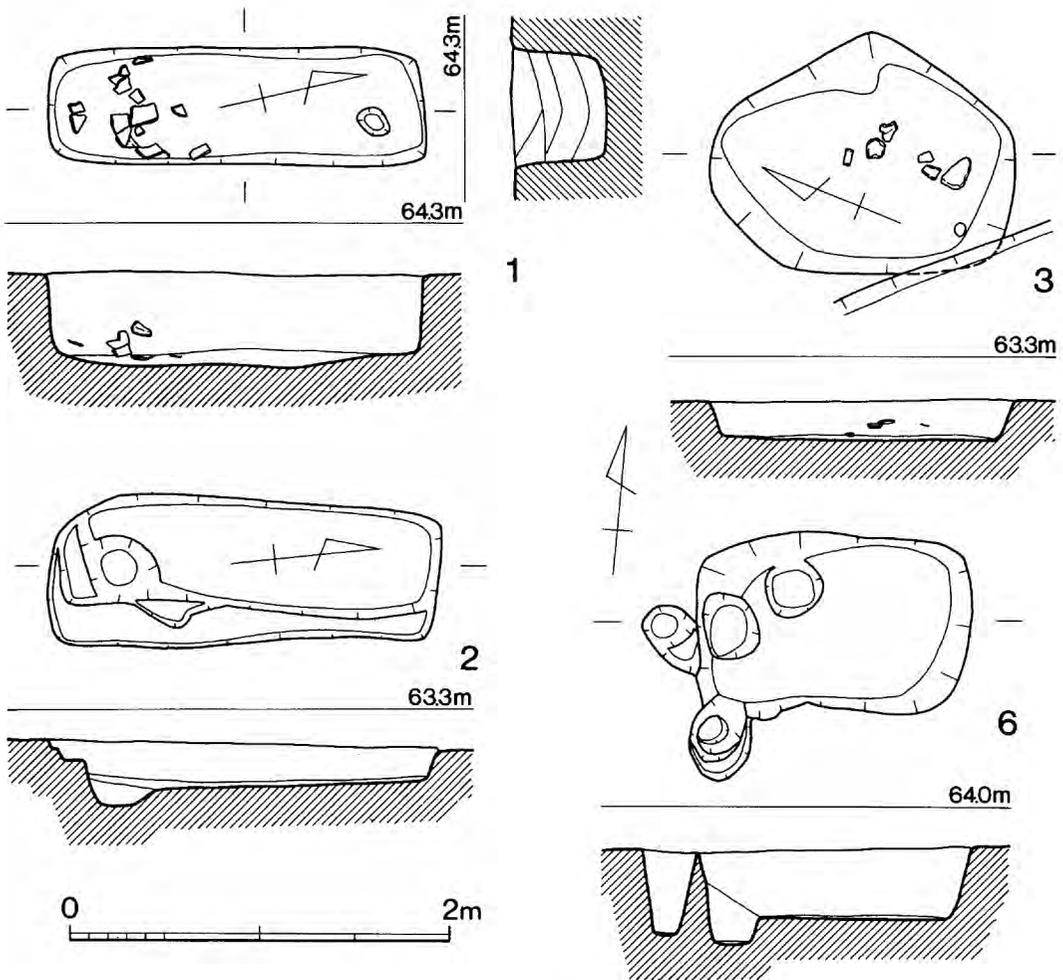
2号土墳(第13図) 東壁の一部を26号住居跡に切られた状態で検出された長方形プランの土墳である。東壁側と南壁側にテラスを設け、南小口部にはピットが付設されている。規模は

長辺 205cm、短辺80cmを測る。1号と同様、埋土中には炭化物・焼土の混入がみられた。出土遺物としては弥生中期の土器片が少量出土した。

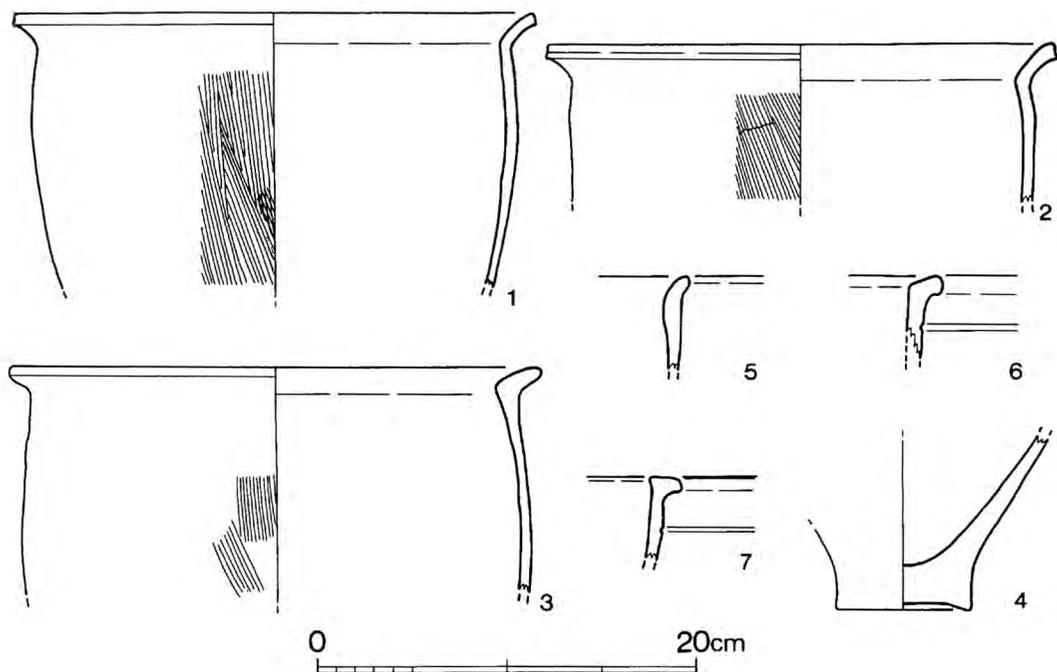
3号土壙 (第13図) 2号土壙の北側に近接して検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径 160cm、短径約 130cm、深さ約20cmを測る。出土遺物は弥生中期前葉でも古期に属すと思われる土器片少量と石剣片1点が出土した。

出土遺物 (第14図)

甕 (3・4) 3は逆L字状口縁の甕で、復原口径28cmを測る。器面は風化が著しく不明瞭であるが、胴部外面に刷毛目の痕跡を残している。色調は明茶褐色を呈す。4は凹み底気味の底部の資料である。底径 7.2cmを測る。色調は褐色で、調整は風化のため不明。



第 13 図 土 壙 実 測 図 (1/40)



第14図 土壌出土土器実測図(1/4)

石器 (第11図8) 石剣の身から茎の上部にかけての破損品。身中央部は平坦に近くなり鑄はない。刃部は鋭く砥ぎ出されている。刃部幅 4.3cm、茎部幅 4.1cm、厚 1.1cm。砂岩質。

6号土壌 (第13図) 11号住居跡の南側から検出された長方形プランの土壌で、西側小口部は新しい時期のピットと複合している。長辺 145cm、短辺約90cm、深さ37cmを測る。埋土中には他と同様、炭化物の混入がみられた。出土遺物は土器小片が少量出土したのみである。時期は弥生中期前葉でも古期に比定されよう。

出土遺物 (第14図)

甕 (5・6) いづれも如意形口縁の甕で、6の口縁下には1条の篋描き沈線がめぐっている。色調は5が茶褐色、6が暗茶褐色を呈す。

7号土壌 (第3図) 西側を5号住居跡に切られて検出された土壌で、短辺最大部で155cm、長辺現存部で173cm、深さ約12cmと浅い。床面には多くのピットが穿たれているが付随するかは不明である。出土遺物としては弥生中期の土器小片が若干出土しただけである。

9号土壌 (第3図) 6号住居跡の西側にあつて環濠に切られた状態で検出された楕円形プランの土壌で、東側小口部付近はピットと複合している。長径1.65m、短径約0.5m、深さ約12cmを測る。遺物としては弥生中期の土器小片若干と石器1点が出土したのみである。

出土遺物 (第11図)



第 15 図 発掘風景

石器（第11図3） 縦長剥片の中央部から端部片で、中央に一本の稜が走る。鋭利な縁片の一部に刃こぼれが見られる。漆黒の黒曜石製。

(4) 竪穴遺構

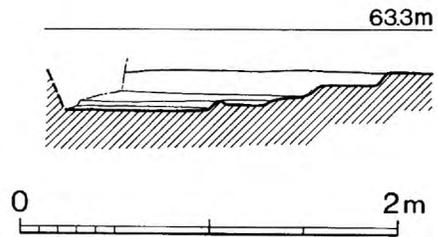
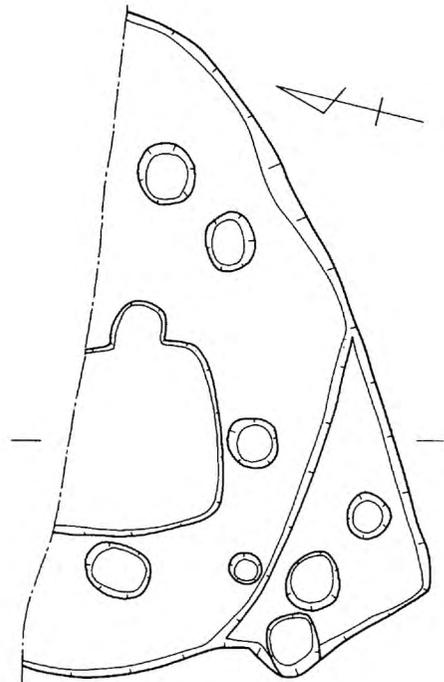
1号竪穴（第16図） 発掘区北端で検出された楕円形プランの竪穴で、南側に方形の張り出し遺構を有している。竪穴内には多数のピットが穿たれているが性格は不明。出土遺物としては弥生中期の土器破片若干と石包丁片1点が出土した。

出土遺物（第11図）

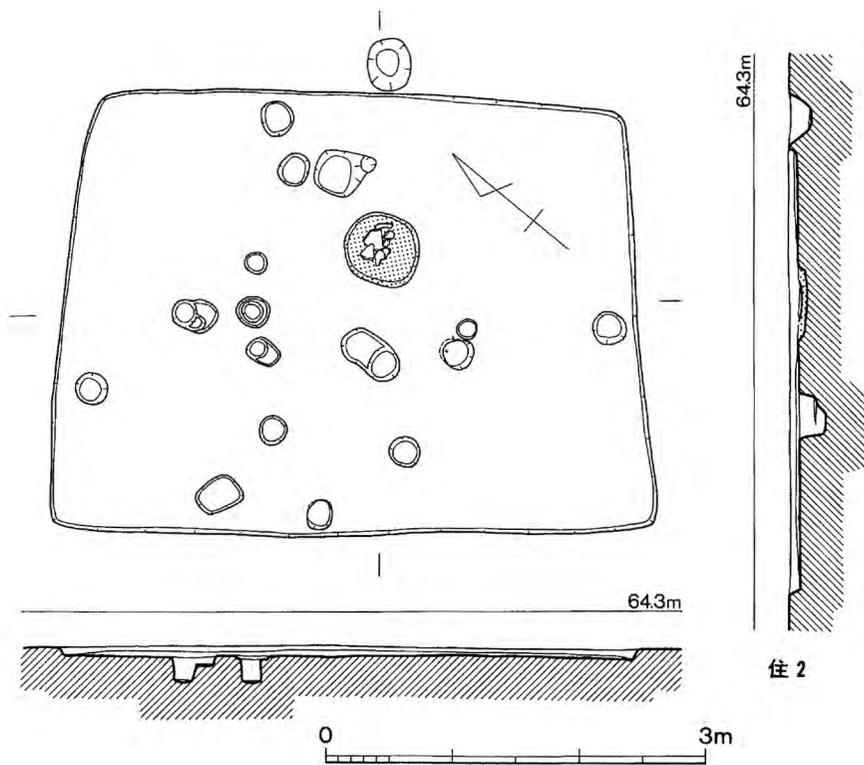
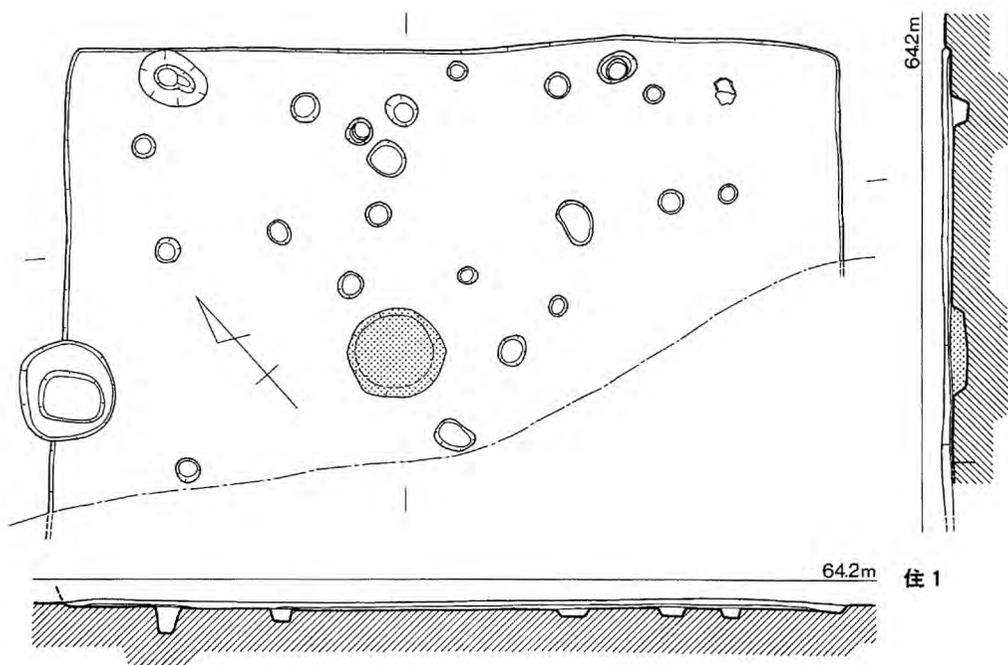
石器（19） 幅広な外弯刃石包丁片である。6mmほどの背縁を有し、至近な位置にある2孔は、硬い工具によって穿孔されている。覆土出土の硬砂岩製。

(5) 竪穴住居跡

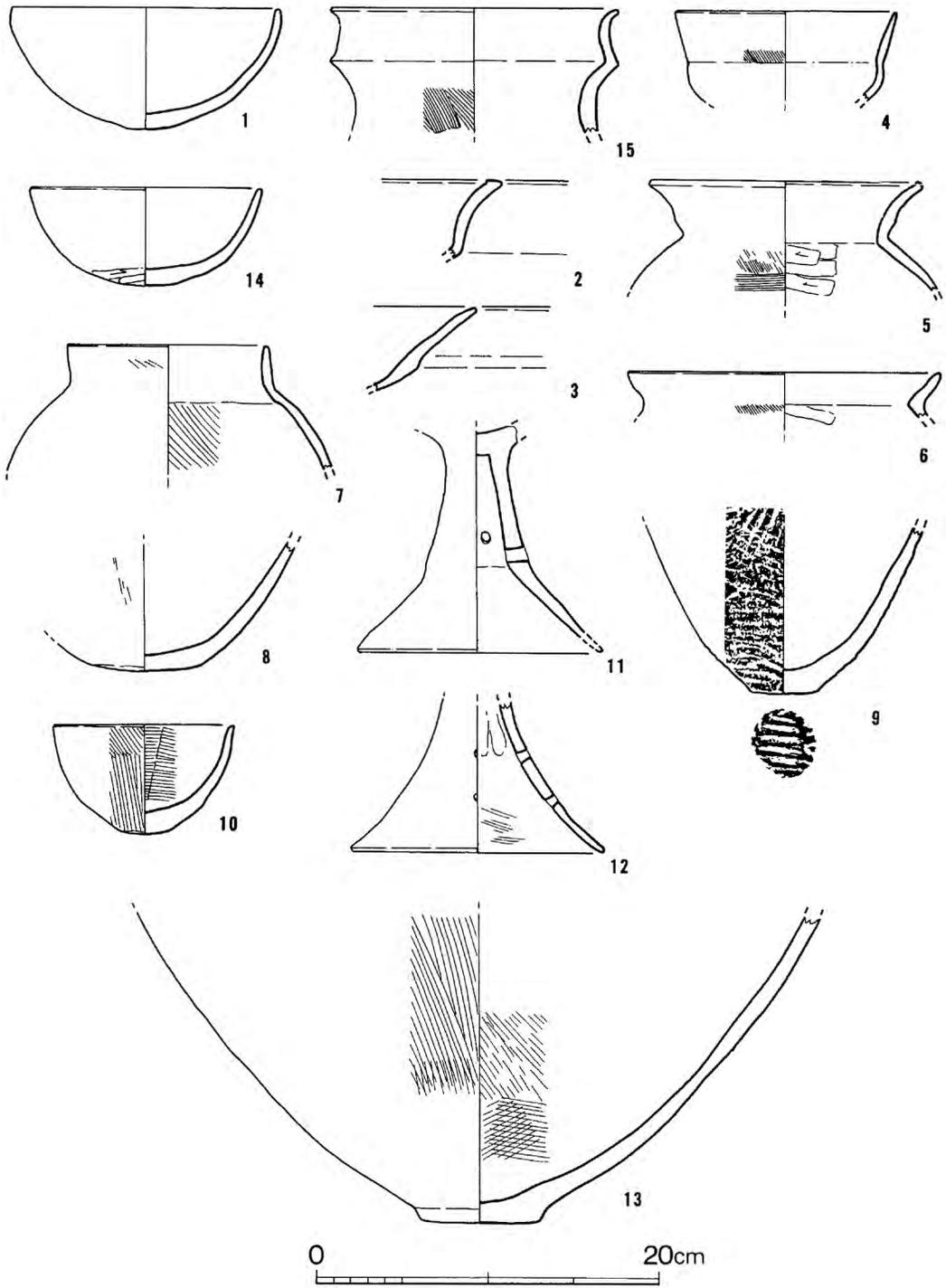
1号住居跡（図版5、第17図） 穴江地区南端で検出された長方形プランの住居跡で、南壁側は段落のため欠失している。現存部で長軸6.12m、短軸3.60m、壁高は北壁側で約5cmと浅い。上面の削平が著しいことが判る。炉跡はほぼ中央にあり、床面はかなり固く敲きしめられていた。床面上には多数のピットが存在するものの柱穴としてまともには把握できないが、2本柱の可能性があろう。埋土中には各所に炭化物の散在がみられ、火災を受けたものと思われる。



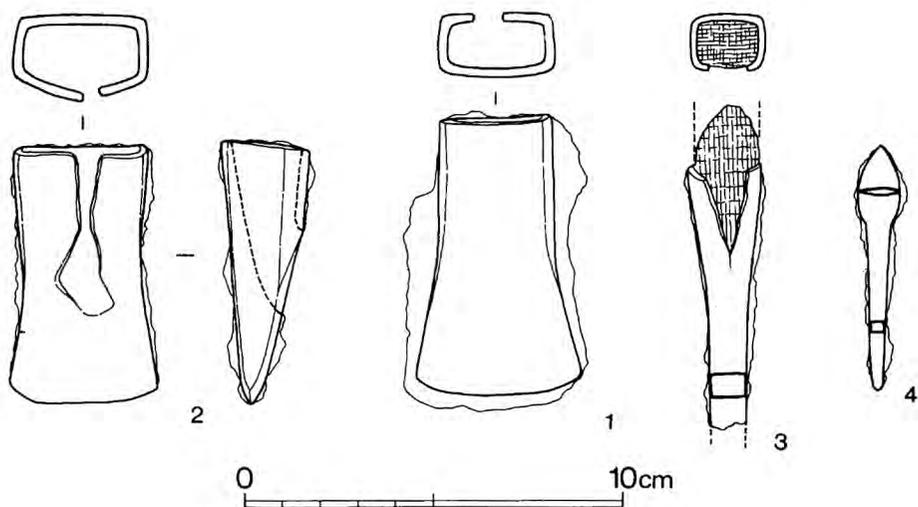
第 16 図 竪穴遺構実測図 (1/40)



第17图 1・2号住居跡実測図(1/60)



第18图 住居跡出土土器実測图1 (1/4)



第19図 住居跡出土鉄器実測図(1/2)

出土遺物としては若干の土器片と、北西側の壁際床面上から出土した鉄斧1点と覆土中から出土したスクレイパー1点である。時期は弥生後期末である。

出土遺物(第18・19・11図)

椀(1) わずかに内弯気味に立ち上る単口縁の椀である。復原口径15.7cm、器高7cmを測る。風化のため調整不明。

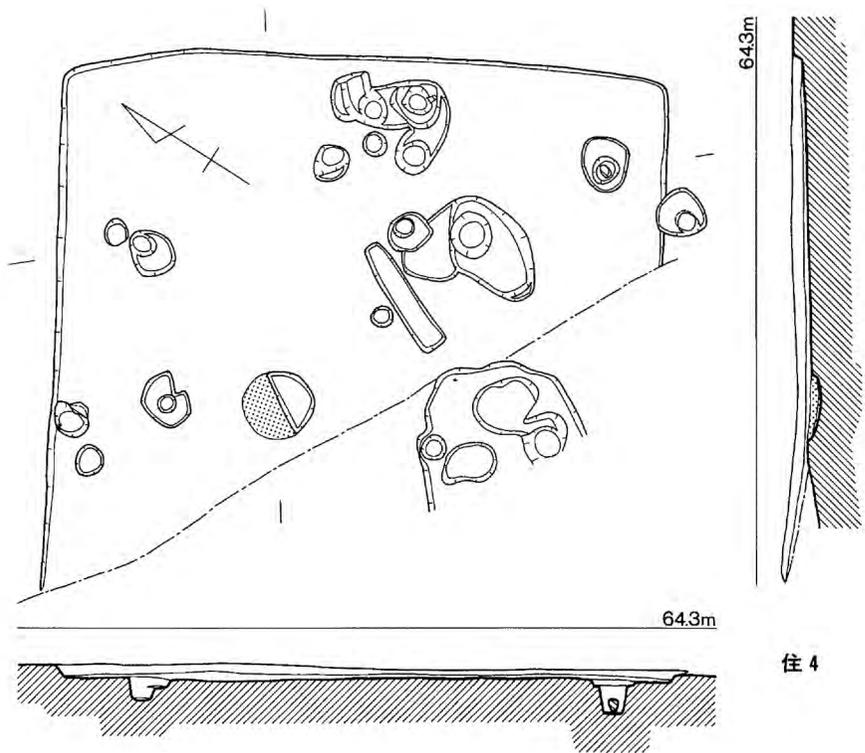
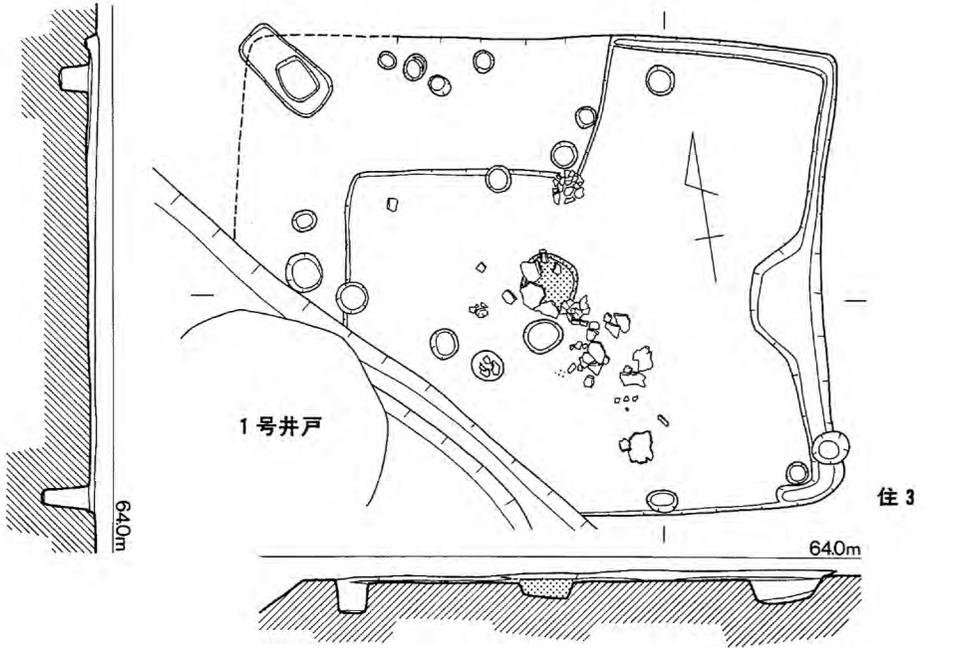
鉄斧(第19図1) 錆の付着が著しく不明な点が多いが、袋部を有す平面バチ形を呈す鉄斧と思われる。全長7.2cm、刃幅4.3cm、袋部内径2.6×1.2cmと推定される。袋は丸味を帯びた長方形を呈している。

石器(第11図4・21) スクレイパー(4)は、横長の剝片を素材とした外弯刃のもので、調整は荒い。安山岩製。21は滑石製の製品で、周囲はほとんど欠損している。中央部に幅5～7mm、深さ4mmほどの溝状の削り込みがある。

2号住居跡(図版5、第17図) 1号住居跡の北側から発見された長軸を南北に有す、長方形プランの住居跡である。規模は東西3.5m、南北4.75mを測る。炉跡は中央よりやや東壁側に偏して構築されている。床面は堅固に敲きしめられていた。柱穴は長軸に対する2本柱と思われるが、南側柱穴が不明である。遺物としては炉跡内から出土した高杯の破片のみである。時期は弥生後期中頃前後と思われる。

出土遺物(第18図)

高杯(2) 杯部の破片資料である。体部からの立ち上りが短かく、端部を肥厚させた高杯である。色調は茶褐色を呈す。調整は風化のため不明である。



第 20 图 3・4 号住居跡実測图 (1/60)

3号住居跡（図版5、第20図） 2号住居跡の北西側から検出されたL字状のベッド状遺構を有す長方形プランを呈す住居跡で、南壁側は方形環濠状遺構に切られている。また、西壁は削平のため消失している。炉跡はほぼ中央にあり、床面上には弥生終末の土器破片多数と炭化材が散乱していた。火災を受けたものと思われる。柱穴は2本柱と思われるが、東側は不明である。床面はかなり敲きしめられていた。

出土遺物（第18図）

高杯（3） 杯部の破片資料で、体部外面の屈折稜は不明瞭である。調整手法は風化のため不明。

4号住居跡（図版5、第20図） 3号住居跡の南側から検出された住居跡で、西壁側は削平により消失している。現存部での規模は、東西4.10m、南北4.80mを測る。炉跡は中央より北側に偏している。床面はかなり敲きしめられていた。床面上から多数のピットが検出されたものの柱穴は不明である。遺物としては小型壺・甕・鼓形器台等の土師器片が若干出土したのみである。時期は古墳時代前期に属す。

出土遺物（第18図）

小型壺（4） 広口の小型丸底壺の破片資料で、復原口径13cmを測る。

甕（5・6・16） 5は肩の張った胴部に内弯気味に大きく外反する口縁がつく甕で、口縁端部をつまみ上げ気味に仕上げている。胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。外面全体に煤の付着がみられる。復原口径16cm、色調は茶褐色を呈し、焼成良好である。6は内弯するく字状口縁の甕で、胴部外面刷毛、内面頸部下からヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径18.3cmを測る。16は胴部の一部を欠く甕である。肩の張った扁球形の胴部にく字状に外反する口縁が付く甕で、口径14.7cm、器高17.8cmを測る。胴部外面刷毛、内面丁寧なヘラ削りし器壁を薄く仕上げている。口縁部内外はヨコナデ仕上げである。色調は茶褐色を呈し、胎土には多くの砂粒を含むが焼成良好。

5号住居跡（図版6、第21図） 北側を6号に、南側を4号住居跡に切られ、西壁側は削平され欠失した住居跡で、その全景は知りえない。現存部で、東西約2.7m、南北約2.8mを測る。壁高は西壁で約7cmと浅い。柱穴・炉跡等は不明だが、床面はしまっている。出土遺物は弥生後期と思われる破片数点が出土したのみである。

6号住居跡（図版6、第21図） 5号・7号住居跡を切り、西壁側を環濠に切られた状態で検出された住居跡である。壁際には幅45～85cm、深さ6～24cmの幅広の周溝がコ字形にめぐっている。柱穴・炉跡とも不明である。周溝内及び床面からは若干浮いた状態で多数の土器破片と石包丁片1点が出土した。また、火災を受けたらしく炭化材が床面上に散在していた。時期は弥生後期終末である。

出土遺物（第18図）

壺(7) 口径11.7cmを測る直口する単口縁の壺の胴上半の資料である。胴部内面刷毛、口縁部内外はヨコナデ仕上げ、胴部外面は風化が著しく不明である。色調は淡黄褐色を呈す。

甕(8・9) いずれも胴下半の資料である。8は丸底気味の平底、9は径3.7cmと小さい平底で、9は外面全体を粗いタタキのまま、8は風化のため不明瞭だが刷毛痕がみられる。内面は刷毛目のあとナデで仕上げているようである。色調は8が淡黄褐色、9が暗茶褐色を呈す。

椀(10) 復原口径10.5cm、器高6.4cmを測る単口縁の椀で、底部は丸底気味の小さい平底である。底部内外をナデの他は、刷毛で仕上げている。色調は黄褐色を呈す。焼成は良好。

高杯(11・12) 11は柱状部と裾部がある程度はつきりするタイプであるのに対し、12は不明瞭でラッパ状に開くタイプである。

石器(第11図16) 外弯刃石包丁の破損品。側刃端部は鋭角である。覆土出土で輝緑凝灰岩製。

7号住居跡(図版6、第21図) 北側を8号に、西側を6号住居跡に切られ、その大半を欠失した長方形プランの住居跡である。現存部での規模は、東西約4m、南北4.5mを測る。炉跡は中央よりやや南偏し、柱穴は中央2個の2本柱と思われる。壁高は約4cmと極めて浅い。遺物としては炉跡内出土の胴下半の壺形土器のみである。時期は弥生後期後半～終末に属するものと思われる。

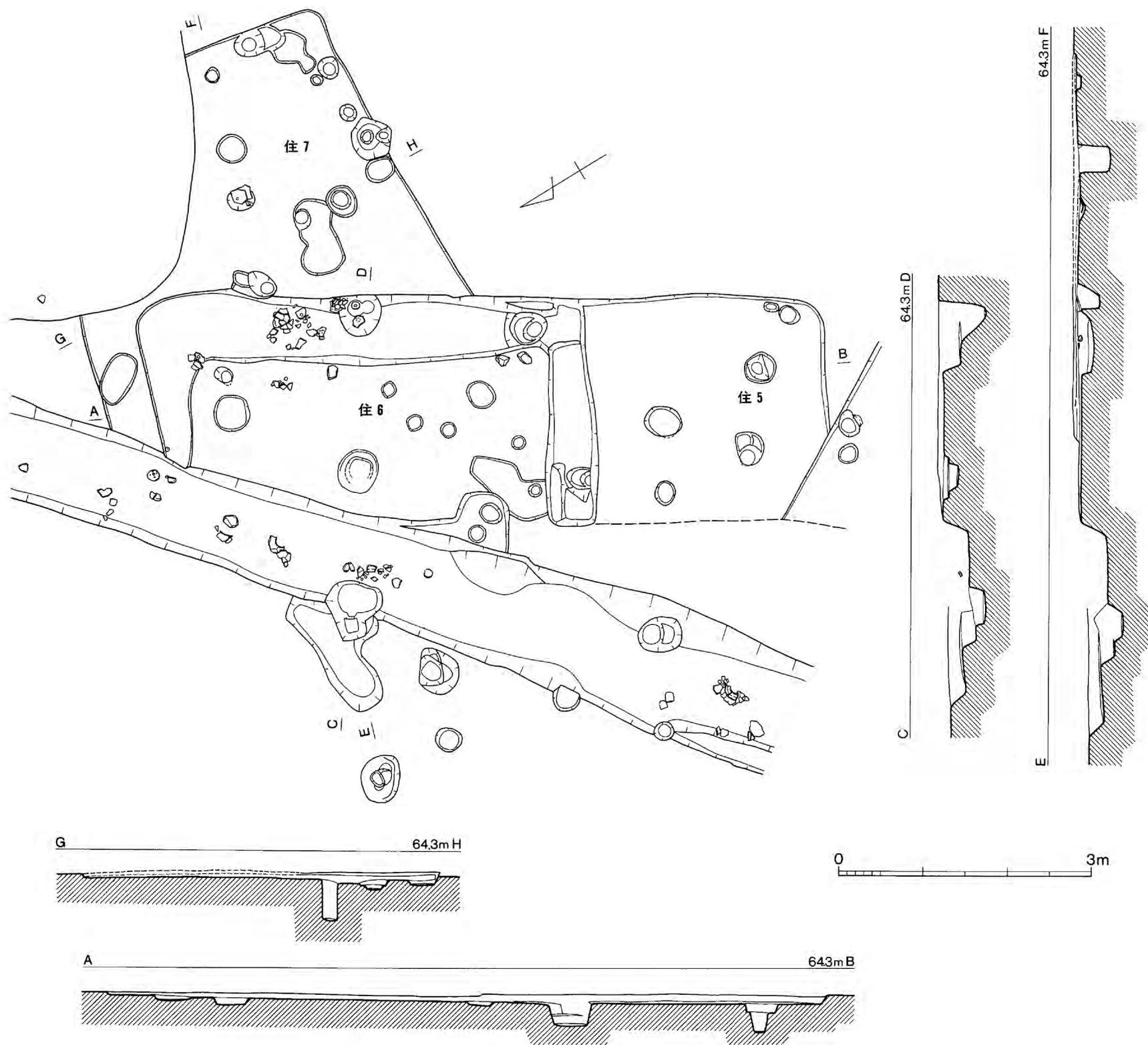
出土遺物(第18図)

壺(13) 底径7cmと小さい平底の大形壺の胴下半の資料である。胴部外面刷毛のあと底部付近をナデで、内面刷毛のあと内底部はナデで仕上げている。色調は暗茶褐色を呈す。

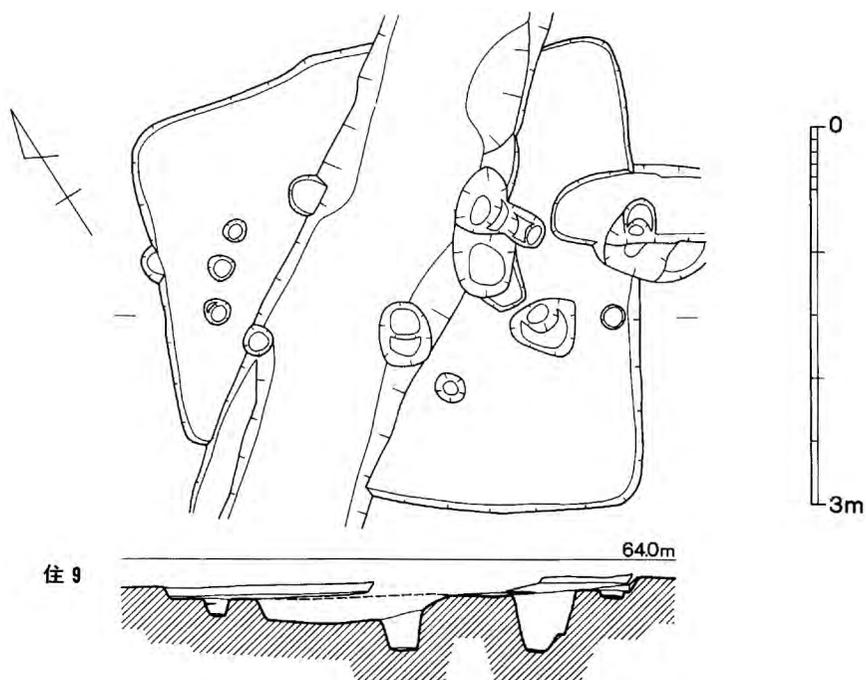
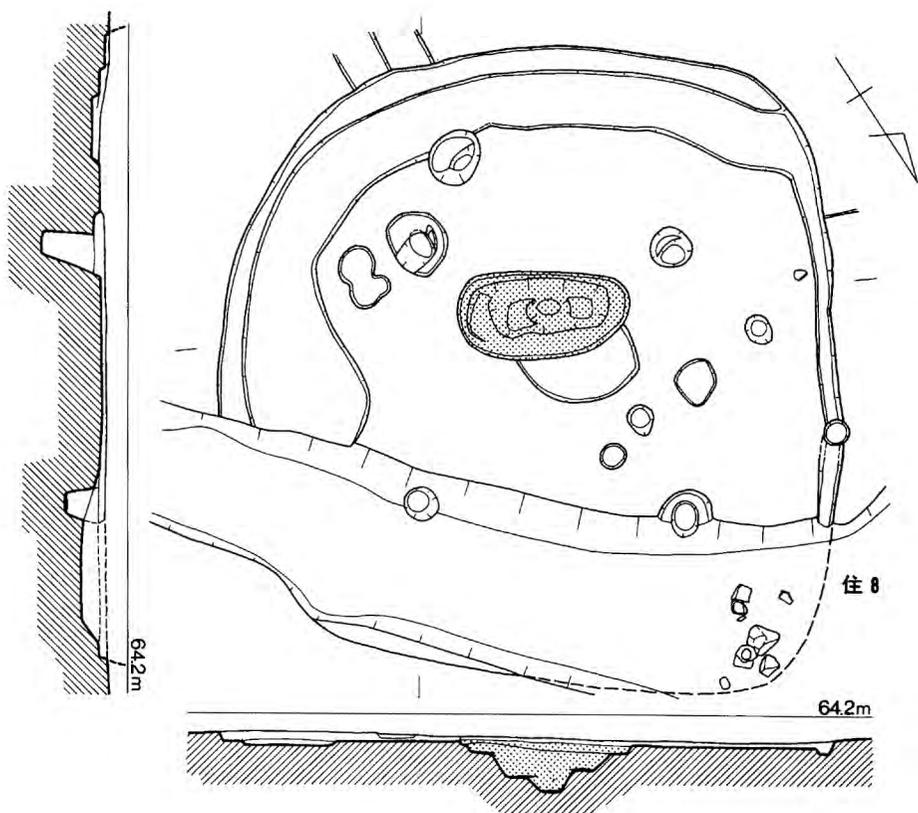
8号住居跡(図版6、第22図) 7号住居跡を切って、北壁側を方形環濠に切られた状態で検出された住居跡である。平面形態は他と異なり胴張りの隅丸方形を呈している。規模は東西4.85m、南北4.85mを測る。柱穴は4本柱で、炉跡は中央よりやや南偏して構築されている。壁際には幅15～100cm、深さ約8cmの周溝がめぐり、南壁から東壁側は幅広くなっている。床面はかなり敲きしめられ堅固であった。遺物としては若干の土器小片が出土したのみで時期の確定は難しいが弥生後期後半から終末に属するものであろう。

9号住居跡(第22図) 5・6号住居跡の床面下から検出された東壁が若干狭い方形の住居跡である。中央は環濠により破壊されているため柱穴、炉跡等は不明である。床面は他例に比べあまり敲きしめられていない。遺物は弥生中期の土器片が若干出土したのみである。規模は、東西3.85m、南北3.7mを測る。

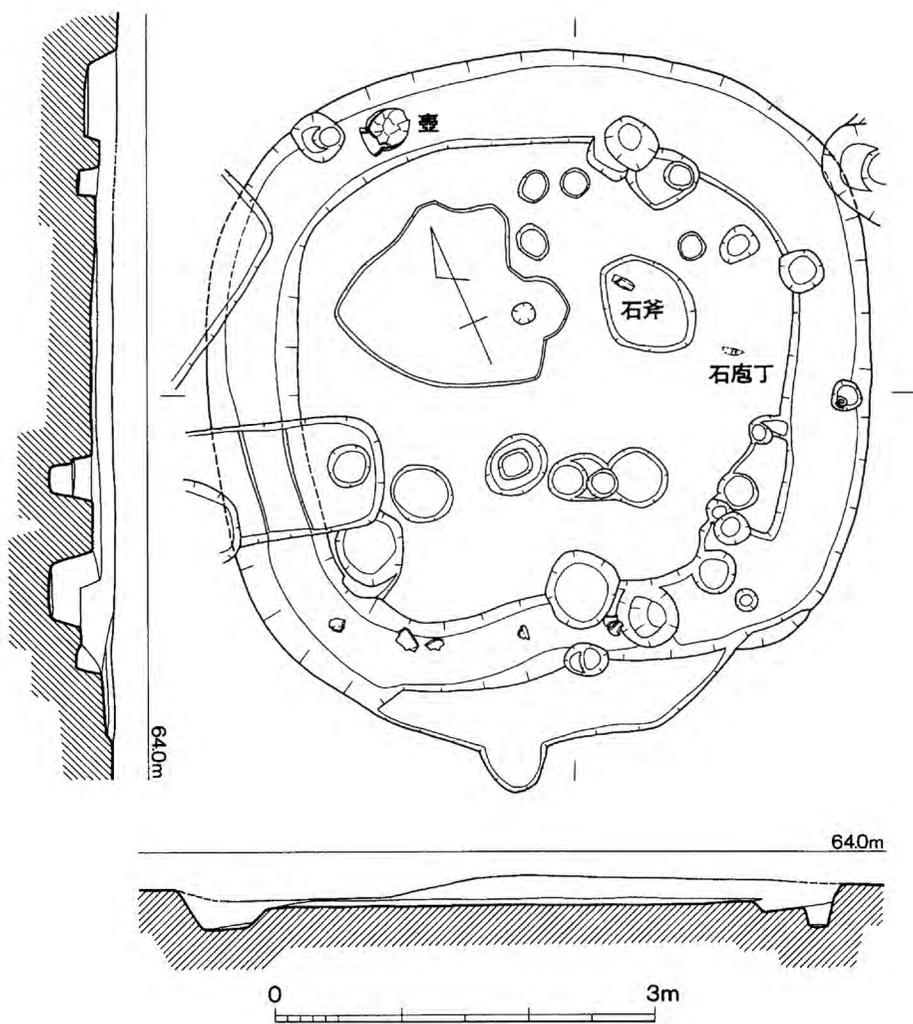
10号住居跡(図版7、第23図) 9号住居跡の東側から検出された胴張りの隅丸方形プランの住居跡で、一部を11号・15号住居跡、3号土壌に切られている。規模は、東西5.2m、南北約5mを測る。6号・8号住居跡と同様、壁際には幅55～80cm、深さ15～20cmの幅広の周溝がめぐっている。床面には多数のピットが存在するが、中央の2個が支柱穴かもしれない。炉跡



第21图 5~7号住居跡実測图 (1/60)



第 22 图 8・9 号住居跡实测图 (1/60)



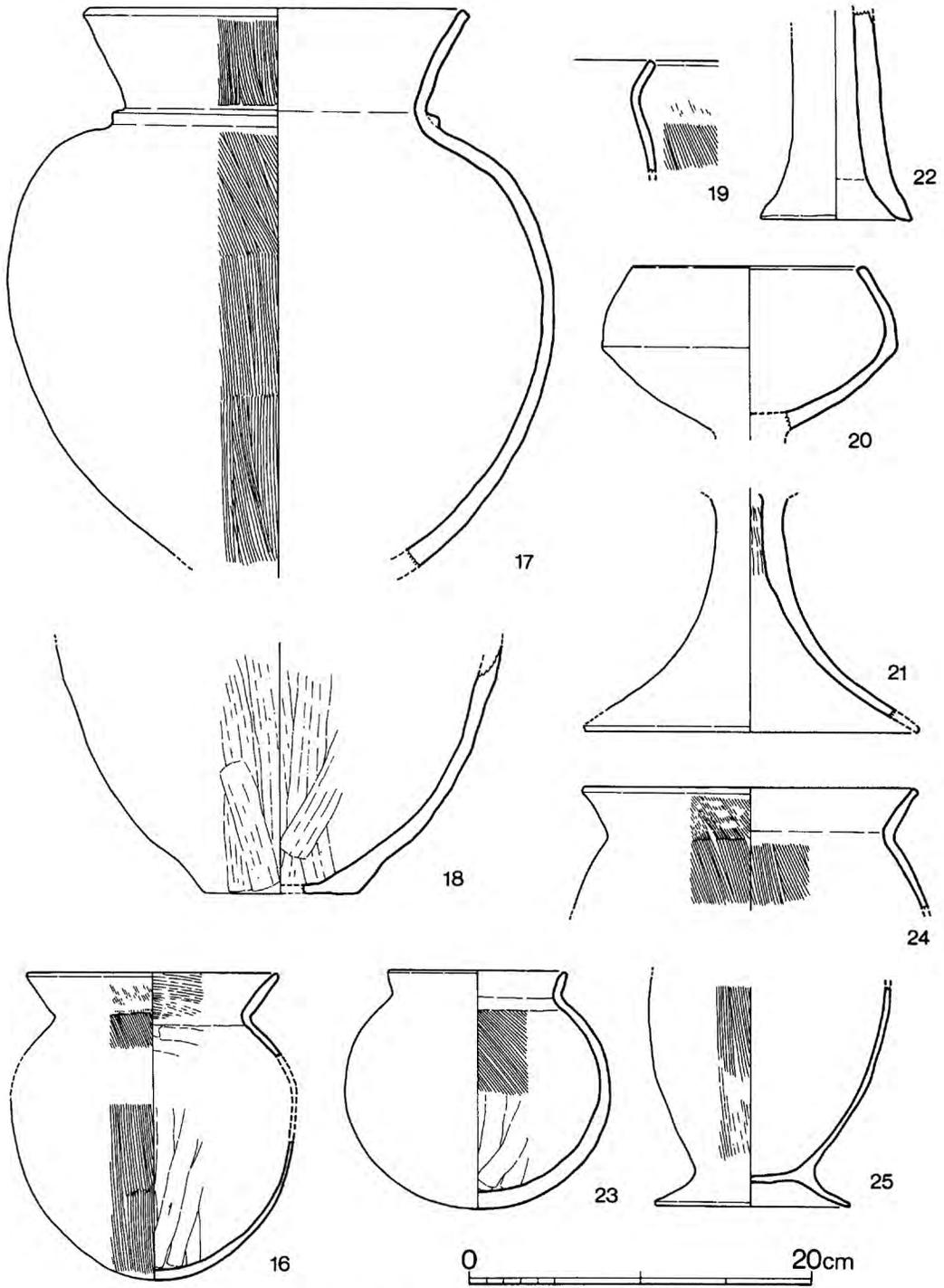
第 23 図 10 号住居跡実測図 (1/60)

は不明である。遺物は北側周溝内から壺形土器のほぼ完形品が出土した他は少量の破片と石包丁片 1 点、縄文時代のものと思われる磨製石斧片 1 点のみである。時期は後期後半である。

出土遺物 (第24図)

壺 (17・18) 17は肩の張った胴部にく字状に外反する口縁部がつく壺で、頸部に 1 条の三角凸帯を付している。口径22.4cm、胴部最大径31.8cmを測る。調整は外面刷毛、胴部内面ナデ、口縁部内面と端部外面はヨコナデで仕上げている。色調は淡黄褐色で、焼成良好な土器である。18は胴下半の破片資料である。復原底径 9 cmの平底で、内外ともヘラ状工具による擦過で仕上げている。色調は淡灰色を呈し、焼成は良好である。

甕 (19) く字状に外反する長胴の甕の小破片である。胴部外面刷毛、口縁部内外はヨコナ



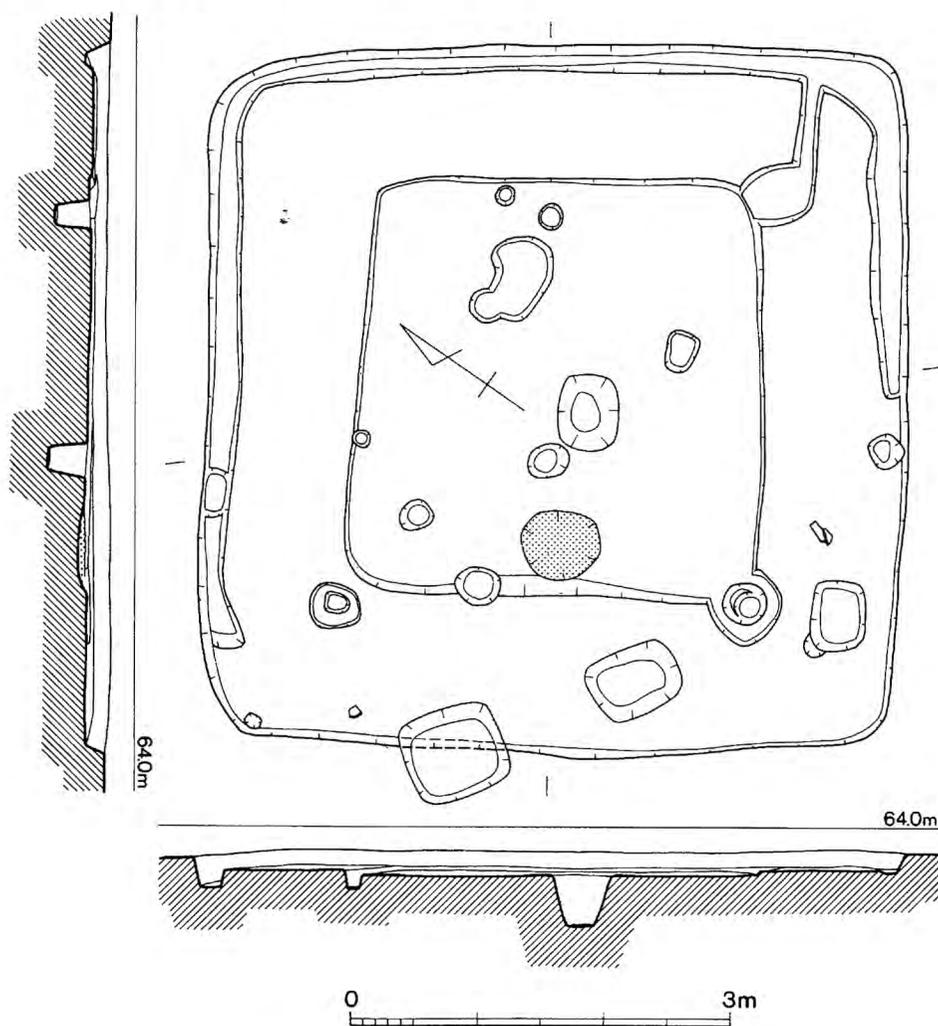
第24图 住居跡出土土器実測图2(1/4)

デで仕上げ、内面は風化のため不明。色調は黄褐色を呈す。

高杯 (20・21) 20は杯部、21は脚部の破片資料である。20はソロバン玉形を呈す杯部で、体部の屈折は明瞭である。復原口径13.6cmを測る。21は柱状部からラッパ状に大きく開くタイプである。調整はいずれも器面の風化が著しく不明。色調は20が淡黄褐色、21が黄褐色を呈す。

支脚 (22) 上部を欠失する器肉の厚い手捏的な土器である。裾部径 8.8cmを測る。

石器 (第11図12・17・18) 12は始刃石斧の刃部から体部の破片。体部は凹面も含めて非常に丁寧に研磨され、刃部は鋭い。最大幅は体部中央に有す。質の良い蛇紋岩製。17・18は石包丁の破損品。17は輝緑凝灰岩製で背縁は丸味を有す。床面出土。18は未製品で、体部の磨きは行なわれていない。砂岩製で、住居内の周溝より出土。



第 25 図 11 号住居跡実測図 (1/60)

11号住居跡（図版7，第25図） 最も残りの良かった隅丸方形プランの住居跡で、壁際には幅85～120cmの全周するベッド状遺構を付設している。規模は東西5.5m、南北5.65mを測るほぼ方形の住居跡である。柱穴は南北中央の2個で、炉跡は南側ベッド状遺構側に偏っている。幅20～30cm、深さ5～12cmを測る周溝が、南壁と東壁側の一部を除き、コ字状にめぐっている。床面はかなり敲きしめられ堅固になっていた。遺物は弥生後期終末の土器片が若干出土したのみである。

12号住居跡（第26図） 11号住居跡の北側にあり、13号住居跡を切って作られた方形プランの住居跡で、東壁側は奈良時代の2号竪穴遺構で切られ、北側は段落で欠失している。規模は、現存部で東西5.2m、南北3.4mを測る。柱穴は東西中央に並列する2本柱で、炉跡は中央北側に偏して構築されている。床面は固くしまっていた。遺物は若干の土器片数点が出土したのみである。時期は弥生後期終末と思われる。

13号住居跡（第26図） 北側を12号住居跡と2号竪穴、東側を11号住居跡に切られ、その大半を欠失した住居跡である。従って、柱穴・炉跡等は不明で、規模も明らかにしえない。遺物としては弥生中期前半でも古期の土器が若干出土したのみである。

出土遺物（第34図）

壺（26） 口頸部付近の破片資料である。大きく外反する鋤先状口縁の壺で、復原口径18.5cmを測る。調整は器面の風化が著しく不明である。色調は淡黄褐色を呈す。

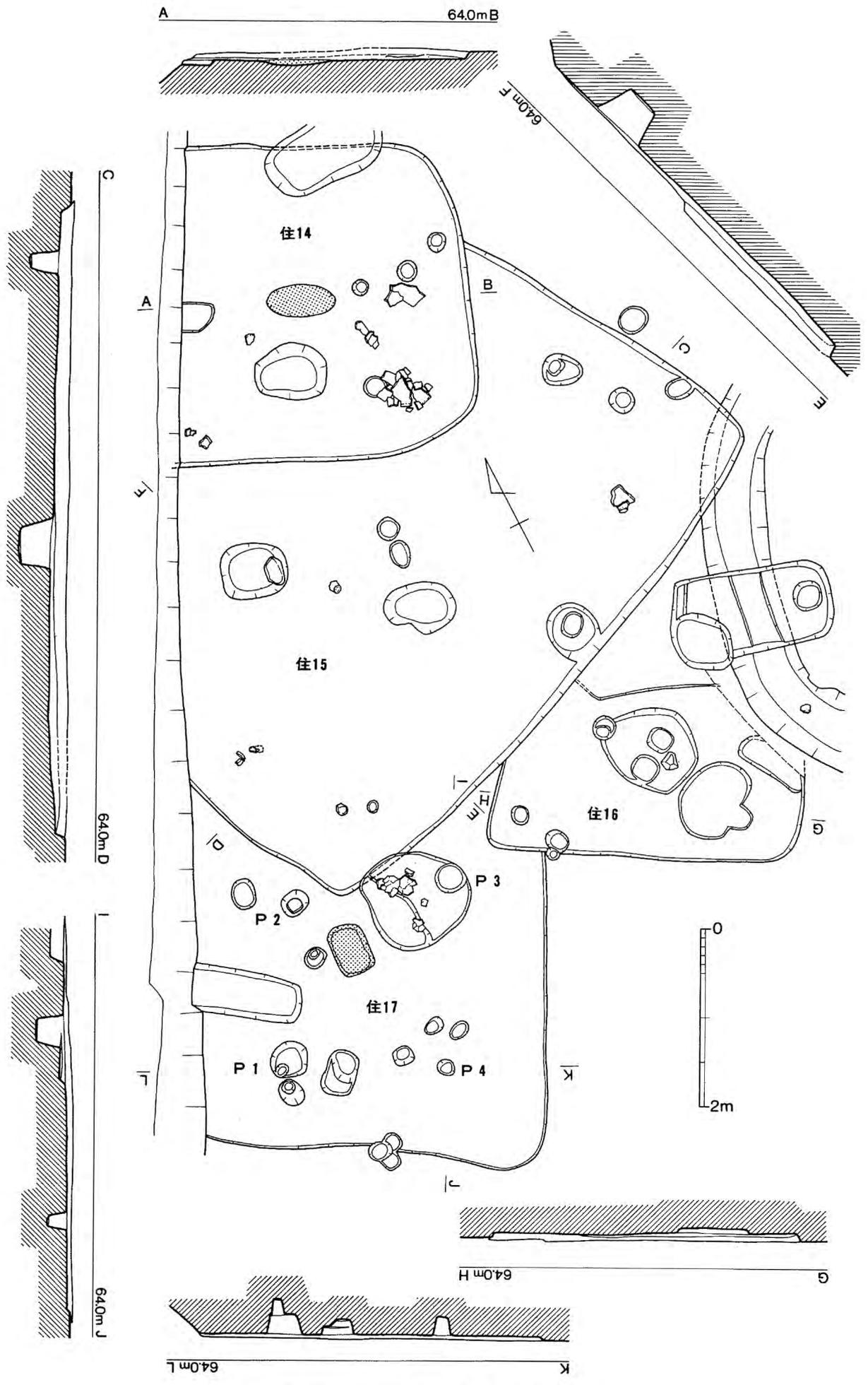
14号住居跡（図版7，第27図） 15号住居跡を切って作られた方形の住居跡で、西壁側は田圃の開削で欠失している。規模は現存部で東西3.35m、南北3.55mを測る。炉跡はほぼ中央にあり、床面には火災を受けたらしく炭化物が散乱していた。南東隅床面上からは土師器甕と甑がつぶれた状態で出土した。床面は堅固に敲きしめられていたが柱穴と思われるピットは検出できなかった。時期は古墳時代後期に比定される。

出土遺物（第28図）

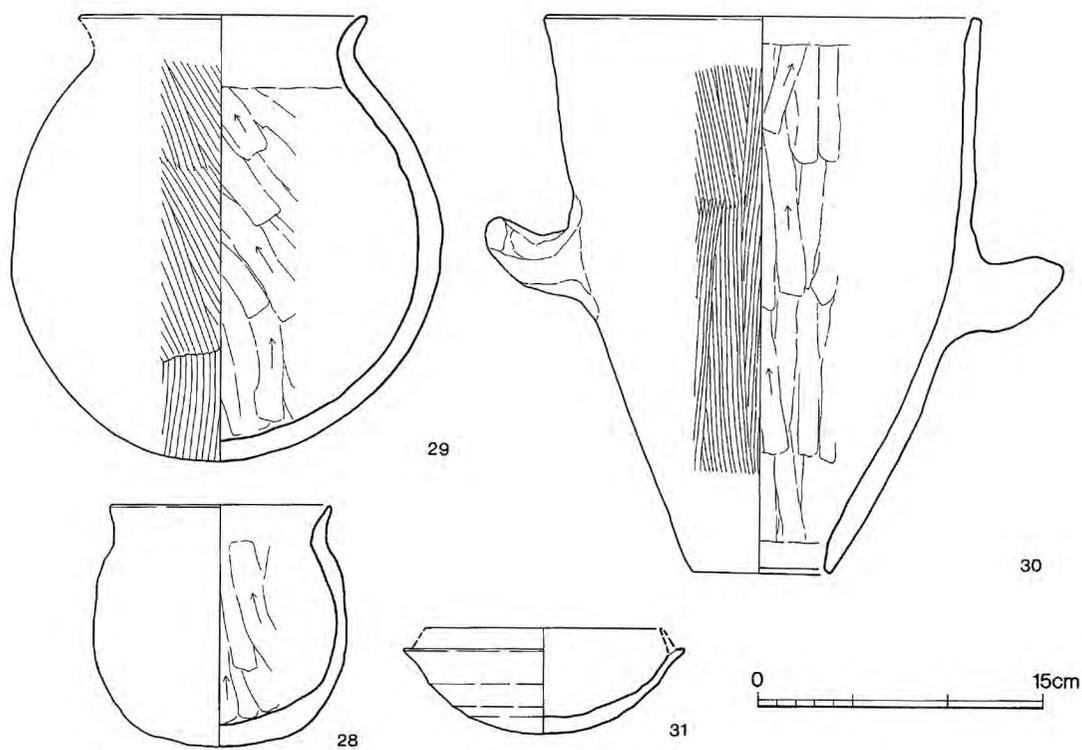
壺（28） 広口の器肉の厚い小形壺で、復原口径11.6cm、器高12.8cmを測る。調整は外面風化のため不明だが、内面粗いヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は茶褐色で、焼成は良い。

甕（29） しもぶくれの球形の胴部に、短く外反したく字状口縁がつく甕である。口径15cm、器高23.5cm、胴部最大径22.4cmを測る。胴部外面粗い刷毛、内面粗いヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。胴部外面に煤の付着がみられる。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好な土器である。

甑（30） 口縁部に最大径を有し、底部へと直線的にすぼまる把手付の甑である。調整は胴部外面粗い刷毛のあと底部付近をヨコナデし、内面はヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は外面褐色、内面黒色を呈す焼成良好な土器である。



第 27 図 14~17 号住居跡実測図 (1/60)



第28図 14号住居跡出土土器実測図(1/4)

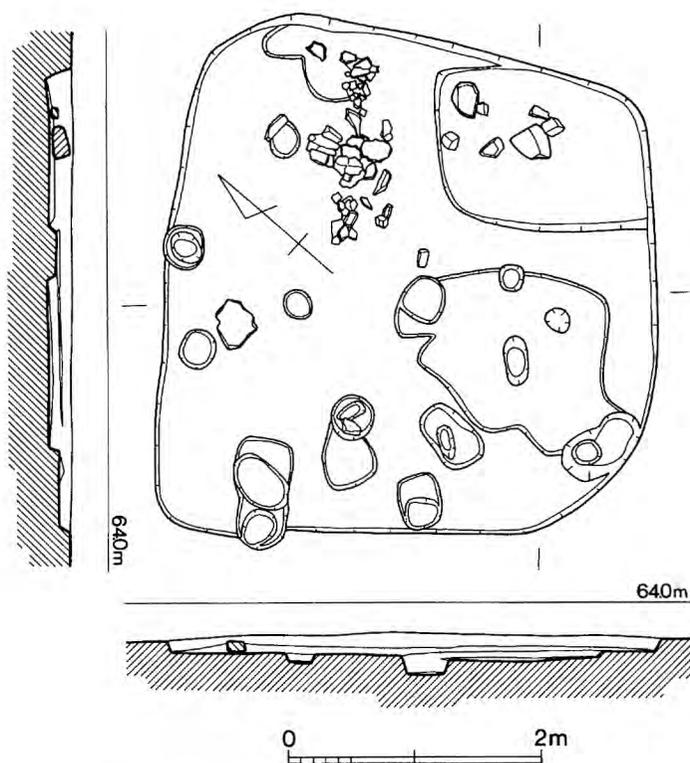
須恵器杯身(31) 口縁部を欠く資料で、最大径は14.6cmを測る。体部内外はロクロヨココナデ、外底部は回転ヘラ削りしている。外底部には一条のヘラ記号がみられる。色調は淡黄灰色を呈し、焼成はあまい。

15号住居跡(図版7、第27図) 14号住居跡に切られ、16・17号住居跡を切って作られた方形の住居跡で、北西側は開削により消失している。規模は現存部で、東西6.90m、南北3.85mを測る。柱穴・炉跡とも不明である床面はかなり敲きしめられていた。また、火災を受けたらしく埋土中から多くの炭化物・焼土が検出された。遺物は若干の弥生土器と磨製石斧片1点が出土したのみで時期は不詳。切り合い関係等から判断して弥生終末の所産と思われる。

出土遺物

石器(第11図13) 磨製石斧の頭部破片。風化しているが、研磨は丁寧に施されている。緑色で硬質の石材を用いる。

16号住居跡(図版7、第27図) 北側を15号に、東側を10号住居跡に切られるなどその大半を消失したひとまわり小形の方形プランの住居跡である。現存部での規模は、東西3.5m南北3.3mを測る。炉跡・柱穴等は確認できなかった。出土遺物は弥生後期後半と思われる土器片若干と時期は異なるが縄文期の打製石鏃(サヌカイト)1点が出土したのみである。



第29図 18号住居跡実測図(1/60)

17号住居跡 (第27図) 15・16号住居跡に切られ、西側は開削により欠失した住居跡である。床面からは多数のピットが検出されたが、P1～P4の4本柱と思われる。炉跡は中央よりやや西側に寄って構築されていた。また、床面は堅固に敲きしめられていた。現存部での規模は、東西3.85m、南北約4mを測る。遺物は若干の弥生後期と思われる土器片が出土したのみである。

18号住居跡 (図版8、第29図) 17号住居跡の南から検出された南壁側が若干狭い隅丸方形プランの住居跡で、規模は、東西3.9m、南北約4m、壁高は残りの良い東壁で約20cmを測る。東壁側床面上からは土師器甕がつぶれた状態で出土した。一方、南東隅の竪穴内からは、作業台として使用されたとと思われる河原石数個が検出された。床面には多数のピットが存在しているが柱穴としてまとまるものはない。また、炉跡・カマド等も不明である。時期は床面から出土した土師器及び埋土中から出土した須恵器杯身から6世紀後半(古墳時代後期)に比定できる。他に、時期は異なるが弥生期の大型蛤刃石斧片1点が出土した。

出土遺物(第30図)

土師器甕 (28・29) 28は胴上半の破片、29は口縁部を欠く資料である。28はく字状に大き

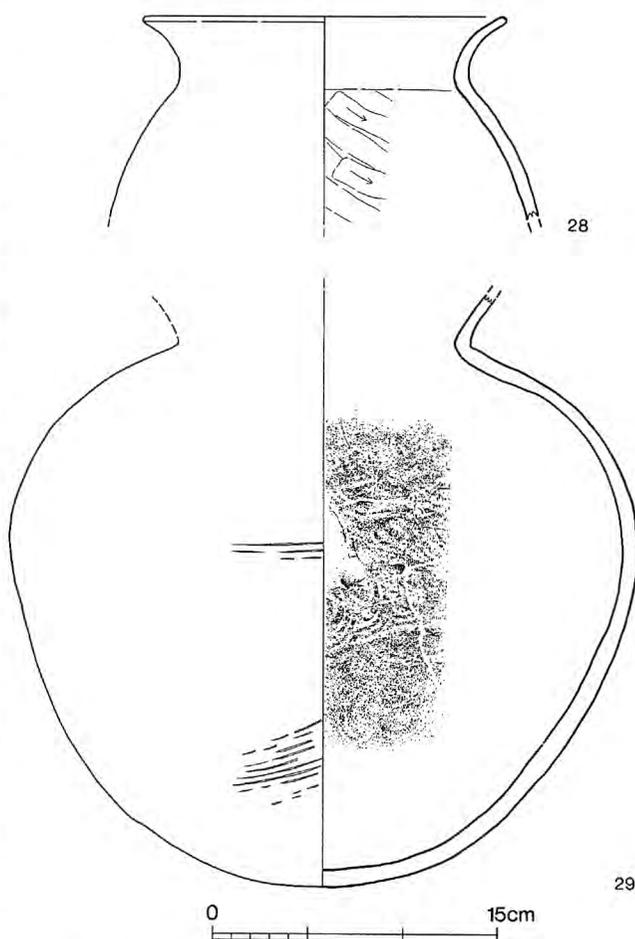
く外反する甕で、復原口径19cmを測る。胴部外面ナデ、内面粗いへラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げた焼成良好な土器である。色調は茶褐色を呈す。29は器形的にも技法的にも須恵器の系統に属すが、色調が茶褐色を呈す、土師質で、黒斑が存在するなど焼成法は明らかに土師器といえる。いわゆる擬須恵土師器と呼称される土器であろう（註1）。器面は風化が著しく不明瞭であるが、胴部外面平行タタキ、内面青海波文のタタキを施している。

石器（第11図11） 太型始刃石斧片で、頭部と背面を欠損する。体部は細かい敲打痕で整えて、研磨を施す。最大幅は刃部で6.8cm。玄武岩製。

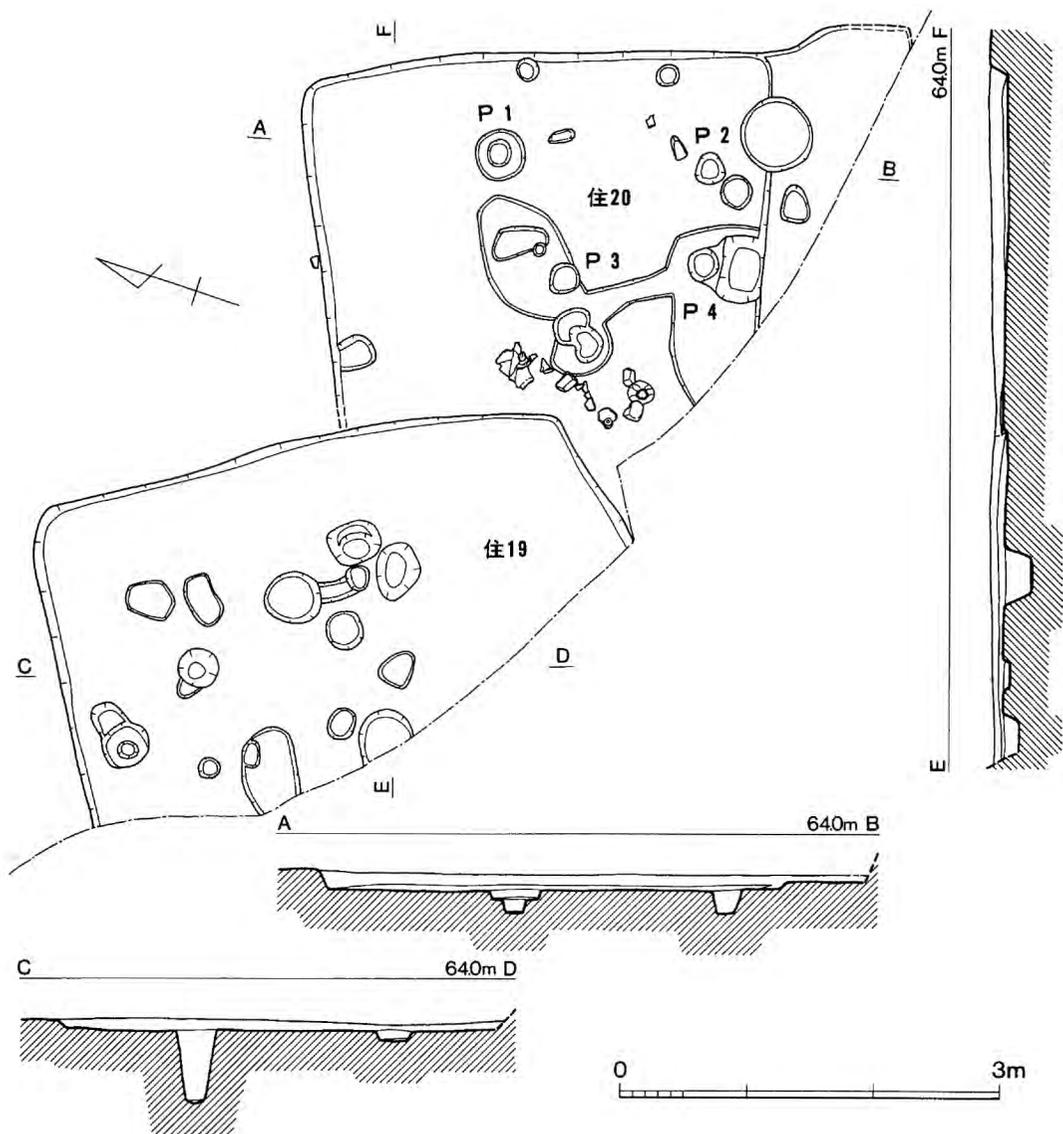
19号住居跡（図版8、第31図） 18号住居跡の南側から検出された方形プランの住居跡で、西側は田圃の段落で欠失している。床面からは多数のピットが検出されたが、柱穴としてのまとまりがない。床面はかなり敲きしめられていた。出土遺物は土師器・須恵器等の破片が若干出土した。時期は6世紀後半であろう。この時期の住居跡は一般にカマドが付設されているが、現存部では不明である。

20号住居跡（図版8、第31図） 19号住居跡に切られて検出された方形プランの住居跡で、南壁側にベッド状遺構が付設されている。埋土にはかなりの炭化物が含まれていて、火災を受けた可能性がある。床面はかなり堅固で、中央西側床面上から壺・甕・高杯等がつぶれた状態で出土した。他に時期は異なるが打製石鏃1点が出土している。柱穴は、柱間が狭いがP3・P4の2本柱かP1・P2の4本柱を想定すべきか判断に苦しむ。また、炉跡についても不明である。規模は現存部で、東西3.85m、南北4.20m、壁高は残り良い北壁で約14cmを測る。時期は弥生後期終末である。

出土遺物（第24・32図）



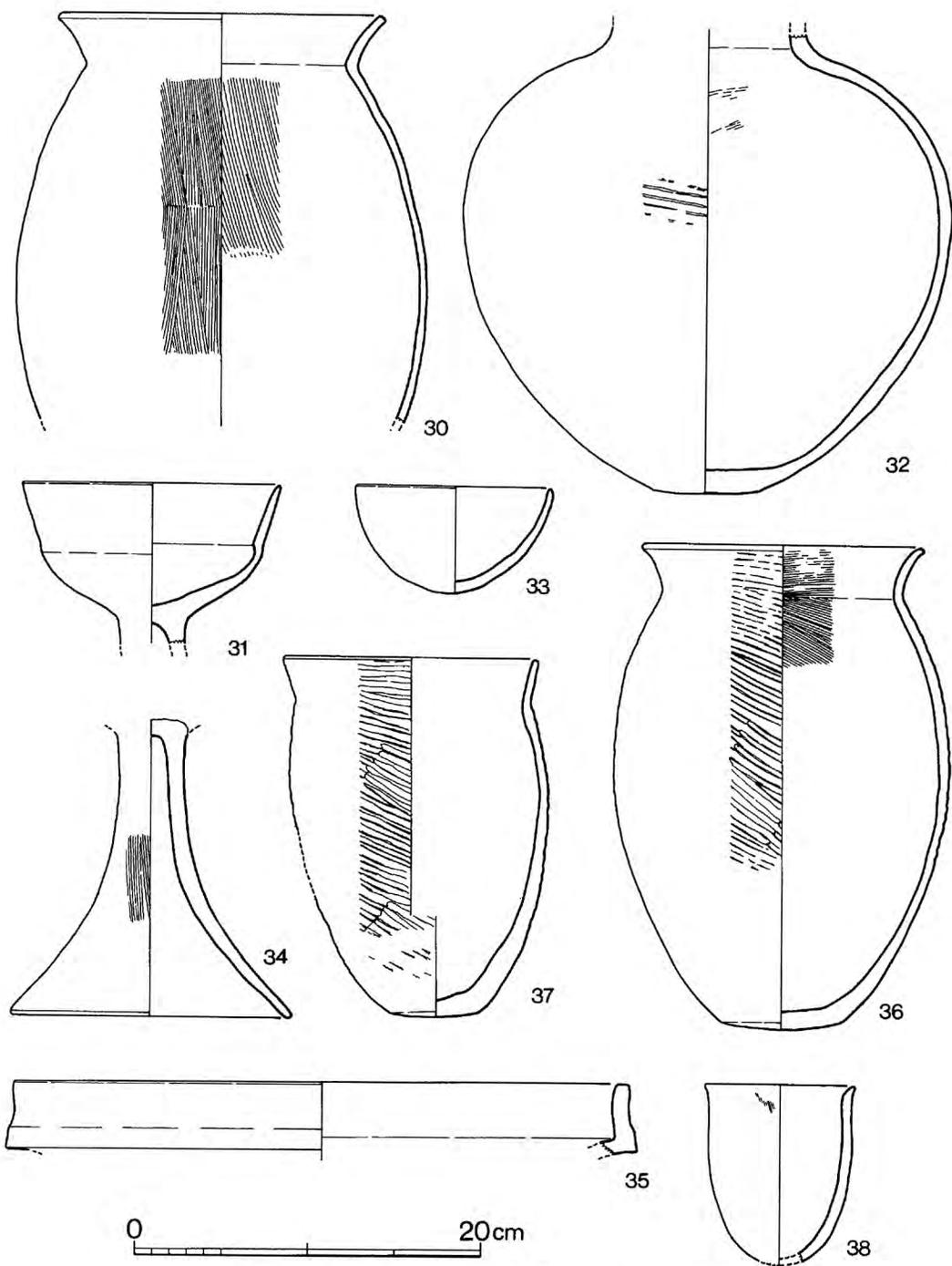
第30図 18号住居跡出土土器実測図（1/4）



第31図 19・20号住居跡実測図(1/60)

壺(23) いわゆる直口気味に立ち上がる短頸壺で、胴部は球形を呈す。復原口径10.5cm、器高13.9cm、胴部最大径15.4cmを測る。調整は外面が風化のため不明だが、胴部内面は上半を細かい刷毛、下半をナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈し、焼成も良い。

甕(24・25・30) 24・30はく字状口縁の長胴の甕、25は台付の甕である。調整は24・30とも胴部内外刷毛で、24は内外とも下半をナデで仕上げている。25は胴部外面刷毛、内面は風化のため不明瞭だがナデ仕上げと思われる。いずれも色調は茶褐色を呈し、器壁も薄く焼成の良



第 32 图 住居跡出土土器実測图 3 (1/4)

好な土器である。30の胴部外面には煤の付着がみられる。

高杯 (31) 碗形の杯部を有す高杯で、脚部を欠失した資料である。体部内面の屈折は明瞭だが、外面の屈折稜は不明瞭である。器面は風化が著しく調整は不明である。色調は暗茶褐色を呈す。

石器 (第11図2) 凹基無茎式の石鏃で完形品。扱いは浅い。調整は極めて粗雑である。長2.45cm、最大幅2cm、厚0.53cm、重2g。覆土出土で、安山岩製。

21号住居跡 (第3図) 南側は段落で、東側は環濠で破壊されその大半を失った平面形方形を呈すと思われる住居跡である。規模は現存部で、東西5.5m、南北2.2mを測る。柱穴・炉跡とも不明である。出土遺物は弥生土器の細片のみで時期不詳。

22号住居跡 (図版8、第33図) 23号住居跡に切られその大半を欠失した住居跡で、柱穴・炉跡とも不明である。平面形態は隅丸長方形を呈し、現存部での規模は東西約5m、南北3.65mを測る。床面はかなり敲きしめられていた。遺物は弥生中期前半の土器破片数点が出土した。

出土遺物 (第34図)

壺 (27) 口頸部の外反が強い鋤先状口縁の壺で、復原口径21.7cmを測る。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。調整は胴部内面ナデの他はヘラ磨きのようである。

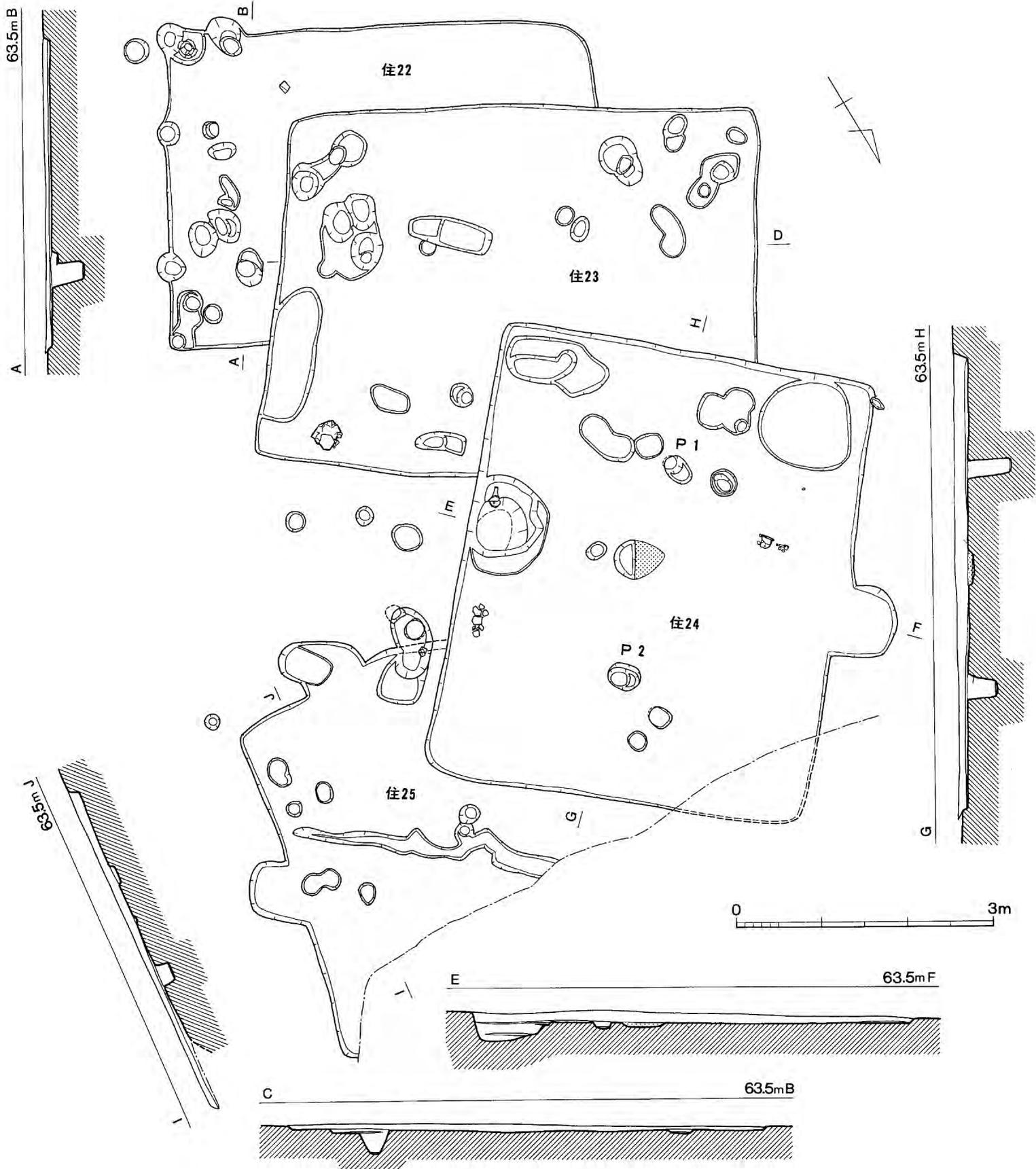
23号住居跡 (図版8、第33図) 北西隅付近を24号住居跡に切られ、22号住居跡を切って作られた長方形プランの住居跡である。規模は東西5.55m、南北4.3mを測り、壁高は約6～10cmと浅い。床面はかなりしまっているものの、柱穴・炉跡等は確認できなかった。遺物としては弥生後期終末の壺が床面上から出土した他は、少量の土器片のみである。時期は弥生終末と思われる。

出土遺物 (第32図)

壺 (32) 口頸部を欠く壺である。丸底気味の平底の底部に肩の張った扁球形の胴部がつくもので、弥生後期にみられる直口する口頸部がつくタイプと思われる。胴部最大径28.5cmを測る。調整は器面の風化が著しく不明瞭だが、胴部外面にタタキ痕、内面には刷毛目痕がみられる。色調は茶褐色を呈し、胎土には多くの砂粒を含むものの焼成は良好である。

24号住居跡 (図版8、第33図) 一部北西隅を欠失するもののほぼ全形を知りうる隅丸長方形プランの住居跡である。柱穴は長軸より若干偏するもののP1・P2の2本柱と思われる。炉跡はほぼ中央にあり、かなり使用されたらしく焼きしまっていた。また、南壁側中央には屋内貯蔵穴と思われる土壌もあり、中から高杯・碗等の土器片がかなり出土した。床面は中央部付近が特に敲きしめられていた。時期は弥生後期終末に比定される。また、覆土中から大型蛤刃石斧の未製品1点が出土しているが、下層から検出された28号住居跡 (弥生中期) に共伴するものと思われる。

出土遺物 (第32図)

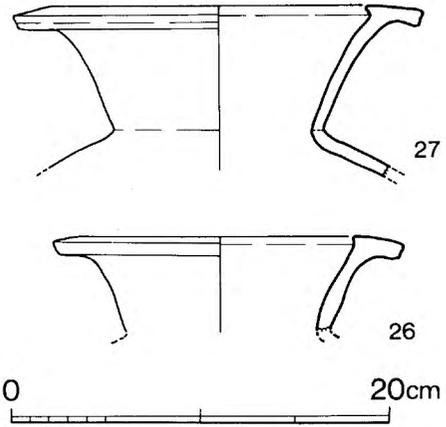


第 33 图 22~25 号住居跡実測图 (1/60)

椀 (33) 口径11.5cm、器高 6.2cmを測る尖底気味の椀である。調整は風化のため不明。色調は淡茶褐色を呈す。

高杯 (34) 柱状部の長いラップ状に開く高杯の脚部の資料で、裾部径16.4cmを測る。色調は淡黄褐色を呈す。

石器 (第11図14) 原材の片側縁を交互剥離で大まかに整えた段階のもので、太型蛤刃石斧の未製品である。表裏とも未だ大きく原面を残している。長16.6cm、幅 8.7cm、厚 5.7cmを測る。玄武岩製で、床面出土。



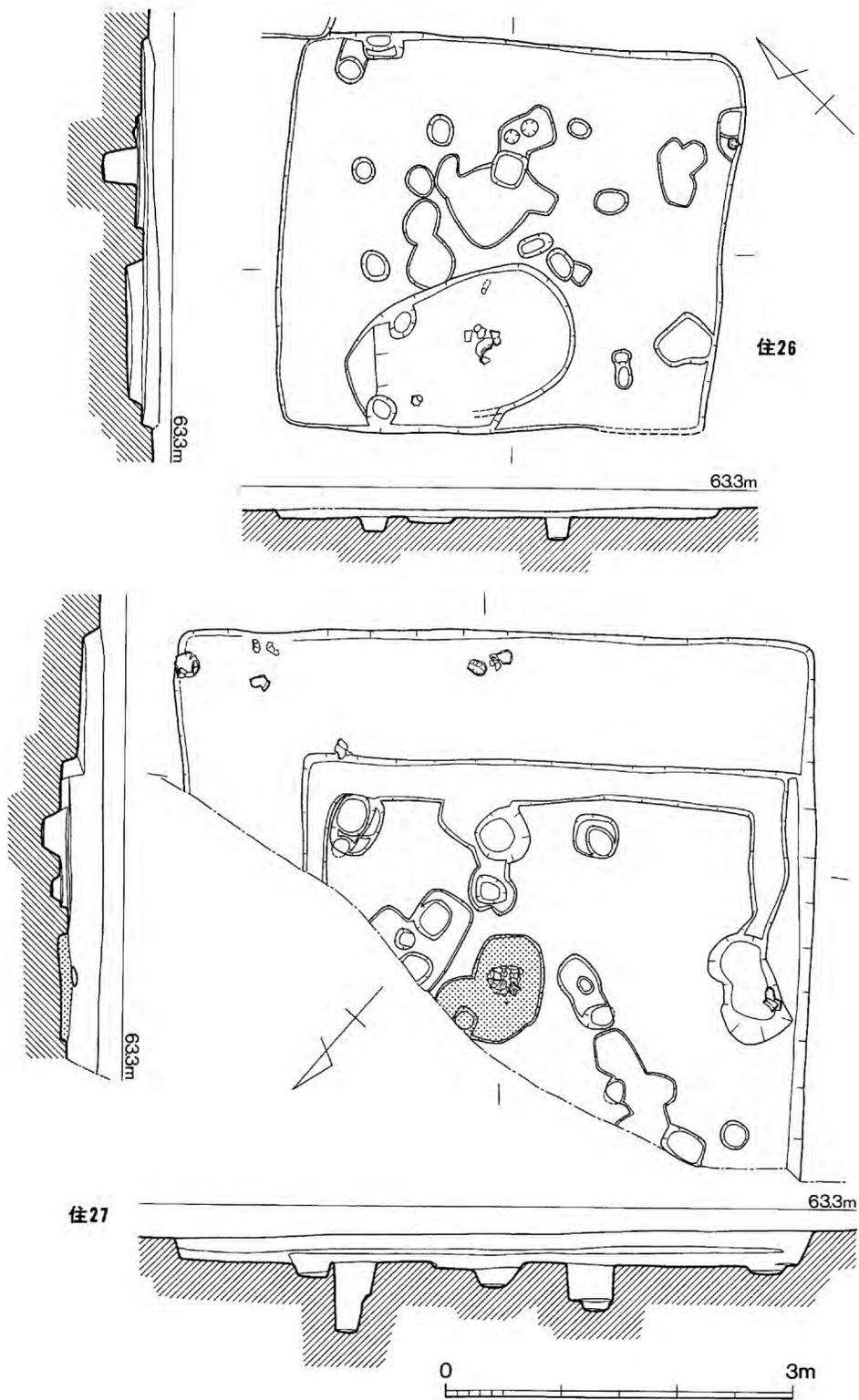
第 34 図 住居跡出土土器実測図 4 (1/4)

25号住居跡 (図版 8、第33図) 西側を24号住居跡に切れ、北側は開削のため消失した方形プランの住居跡である。床面はある程度敲きしめられていたものの柱穴・炉跡等は検出できなかった。規模は現存部で、東西 2.7m、南北約 4 mを測る。床面中央に走る幅13~25cm、深さ 3~6 cmの溝が共存する遺構か不明である。遺物は何等出土しないため時期は不詳。

26号住居跡 (図版8、第35・36図) 北西隅を1号竪穴遺構に切られた平面形態長方形の住居跡



第 35 図 26・27 号 住居跡 全景



第 36 図 26・27 号住居跡実測図 (1/60)

で、東西4.85m、南北4.4mを測る。南壁側中央には屋内貯蔵穴を思わせる長径2m、短径1.25m、深さ約8cmの土壇が付設されている。床面は堅固に敲きしめられ、多数のピットが検出されたものの柱穴・炉跡等は不明である。出土遺物としては弥生中期前半に比定される土器片が少量出土した。

27号住居跡（図版8、第36図） 北端部で検出された方形プランの住居跡で、北側が未掘のため不明であるが、L字形のベッド状遺構が付設された住居跡と思われる。北側柱穴は未掘のため明らかでないが中央2個の2本柱と思われる。炉跡は中央北端にあり、周溝は西壁の一部までのコ字状にめぐると思われる。遺物は南側ベッド状遺構上と炉跡内から弥生後期末の甕・椀などがつぶれた状態で出土した。また、床面より若干浮いて鉄斧1、鉄鏃1、鉄ノミ1点が発見された。他に時期は異なるが、磨製石斧片1点も出土している。時期は弥生後期終末である。

出土遺物（図版15、第32・39図）

壺（35） 複合口縁の大形の壺で、復原口径35.8cmを測る。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。

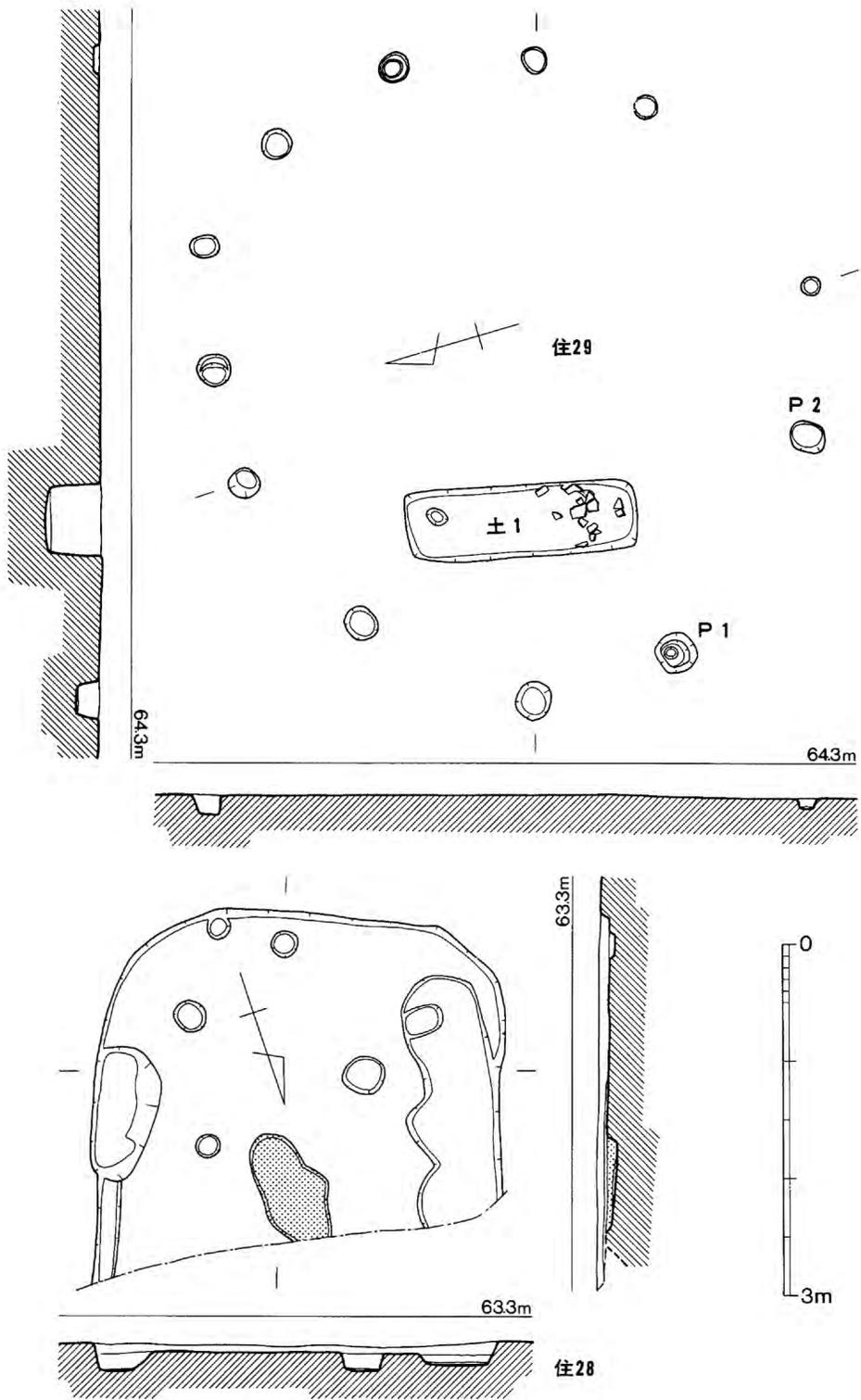
甕（36・37・39） いずれもく字状口縁の長胴の甕で、37はひとまわり小形である。36・37とも外面粗いタタキのあと、底部付近はナデで、内面はナデ、26は刷毛のあと口縁部付近を除きナデで仕上げている。口縁部内外はさらにヨコナデしている。39は肩の張りが強いタイプで、胴部内外ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。胎土には多くの砂粒を含むが、焼成は良好である。36の胴部外面全体には著しく煤の付着がみられる。口径は36が16.4cm、37が14.8cm、39が17cm、器高は36が28cm、37が20.8cmを測る。

椀（38・40・41） 38は深目、40は単口縁、41はく字状に大きく開く鉢形の椀である。いずれも尖底気味の丸底である。調整は38が風化が著しく不明瞭だが、40は内外とも刷毛のあと、外底部をヘラ削りし、口縁部内外はヨコナデ、41は底部付近を刷毛、口縁部内外はヨコナデの他は、ナデで仕上げている。色調は38が淡黄褐色、40が外面黄褐色、内面黒色、41は黄褐色を呈す。焼成はいずれも良好である。

鉄器（第19図2～4） 2は袋部を有す平面バチ形の鉄斧である。長さ6.8cm、刃部幅3.9cm、袋部内径3×1.8cmを測る。3は柳葉式の鉄鏃の完形品。全長6.5cm、鋒長2cm、鋒幅1cm、莖長4.5cmを測る。4は鉄ノミの柄部付近の資料で、袋部には木質が残っている。

石器（第11図15） 磨製石斧の頭部破片。形態的には縄文後期頃出土する石斧に類似する。覆土出土で蛇紋岩製。

28号住居跡（第37図） 24号住居跡の床面下から検出された平面形態隅丸方形を呈す住居跡である。規模は現存部で、東西3.45m、南北2.9mを測る。東壁側には屋内貯蔵穴を思わせる長径1.15m、短径55cm、深さ約15cmの楕円形の土壇が付設され、その北側に幅約20cmの周溝が



第 37 图 28·29 号住居跡実測図 (1/60)

設けられている。西壁下にも幅広の溝が存在するが周溝か不明である。炉跡はほぼ中央にあるものの明確な柱穴はみられない。床面は堅固にしまっていた。出土遺物としては弥生中期前半の甕破片若干と扁平片刃石斧1点が出土した。時期は中期前半と思われる。

出土遺物

石器 (第11図10) 小型の扁平片刃石斧で、頭部を欠失する。刃部は鋭いが、一部、斜めに研がれている。残存長 4.2cm、幅 2 cm、厚さ 0.9cmで、淡青灰色の泥岩製。

29号住居跡 (図版9、第37図) 1号住居跡の東側南端部から検出された住居跡で円形にめぐる柱穴12個を残すのみで炉跡・周溝等は不明である。柱穴の配列から円形の住居跡と思われる。柱穴間内径 4.8～5.2mを測る。P1・P2の柱間が 2.2mと他より広く入口部を示すものかもしれない。出土遺物は何等なく時期は不明である。

30号住居跡 (図版9、第38図) 塚田地区のほぼ中央から検出された柱穴のみが遺存した住居跡で、柱穴の配列から円形プランの住居跡と思われる。また、柱穴が内側にもめぐり、住居の拡張がなされたことが判る。内側は14個、外側は18個の柱穴がある。規模は、内側の住居で、柱間内径 5.5～5.75m、外側の住居で 6.5～6.9mを測る。出土遺物はなく時期は不明である。

31号住居跡 (図版9、第3図) 塚田地区南端部から検出された方形プランの住居跡で、西側は開削でその大半を欠失している。規模は現存部で、東西 1.4m、南北4.75mを測る。その大半を欠失しているため柱穴・炉跡等は不明である。床面は堅固にしまっていた。遺物としては6世紀後半の須恵器・土師器片が若干出土した。

出土遺物 (第39図)

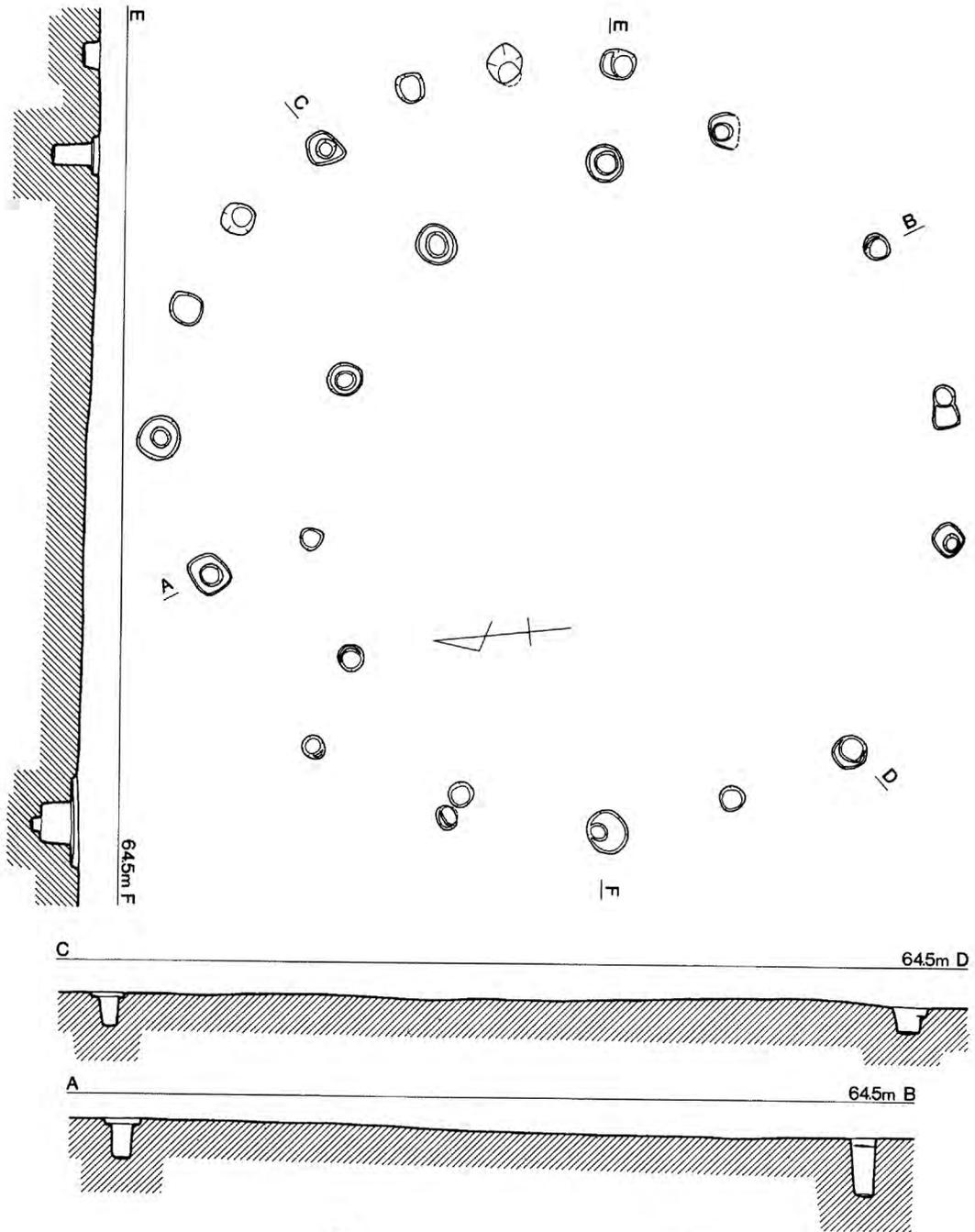
甕 (42) 42は肩の張った胴部に、強く外反したく字状口縁が付く甕で、復原口径22.3cmを測る。調整は胴部外面ナデ、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良好。

32号住居跡 (図版9、第3図) 南側を31号住居跡に、東側は3号竪穴遺構に切られた長方形プランの住居跡である。規模は東西 5 m、南北 3.4mを測る。柱穴は長軸中央2個の2本柱で、炉跡は検出されなかった。遺物は床面より若干浮いて弥生終末の土器破片が少量出土した。時期は弥生後期末と思われる。

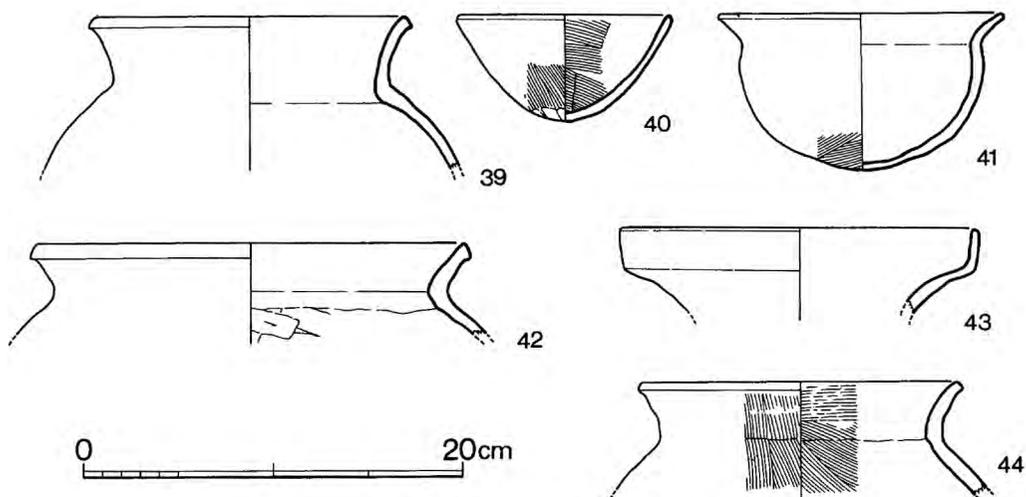
出土遺物 (第18図)

壺 (15) 内傾気味に外反する複合口縁の口頸部付近の破片資料で、復原口径16.8cmを測る。頸部外面刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡黄褐色を呈す。

33号住居跡 (図版9、第3図) 東側を31・32・34号住居跡に、南側は開削のためその大半を失った方形プランの住居跡である。現存部での規模は東西 2.2m、南北 3.6mを測る。その大半を欠失しているため、柱穴・炉跡とも不明である。床面はかなり敲きしめられていた。出土遺物は弥生後期末と思われる土器片が若干出土したのみである。



第 38 图 30 号住居跡実測图 (1/60)



第 39 図 住居跡出土土器実測図 5 (1/4)

34号住居跡 (図版9、第3図) 33号と同様、その大半を欠失した住居跡で、南側を32号に、東側を36号住居跡に切られている。床面は堅固だが狭少のため柱穴・炉跡とも不明である。遺物は土器小片が若干出土したのみで時期は不詳。

35号住居跡 (図版9、第3図) 34・36号住居跡に切られた状態で検出された方形プランの住居跡である。規模は現存部で東西 5.3m、南北約 3 m を測り、壁高は北壁で約 7 cm と浅い。床面は固くしまっているものの、柱穴・炉跡は確認できなかった。遺物は弥生後期末の土器小片が若干出土したのみである。

36号住居跡 (図版9、第3図) この住居跡もその大半を欠失した方形プランの住居跡で、現存部で東西 3.5m、南北 3 m を測る。遺物は床面に散乱した状態で弥生終末の土器片多数が出土した。床面はかなりしまっていたものの、柱穴・炉跡とも確認されなかった。時期は弥生後期終末に属す。

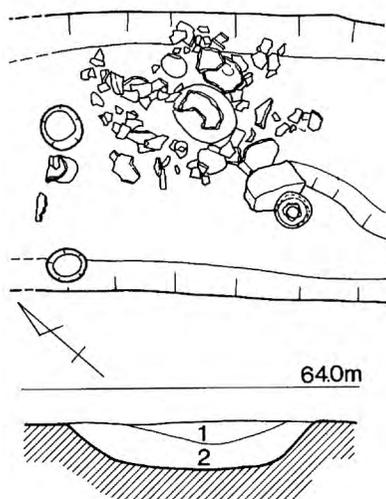
出土遺物 (第39図)

壺 (43) 直口する複合口縁の壺で、外面の屈折稜は不明瞭である。復原口径19cmを測る。調整は風化のため不明。色調は茶褐色を呈し、胎土に多くの砂粒を含むが焼成は良い。

甕 (44) く字状口縁の甕で、復原口径17.2cmを測る。調整は内外とも刷毛で、口縁部内外はさらにヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈し、焼成良好である。

(6) 環濠状遺構 (図版10、第3・40・41図)

穴江地区中央から検出された平面形釣針状にめぐる方形の環濠である。東溝の大半と南溝は上面がかなり削平されていることもあって、また、道路で未掘部もあり確認できなかった。従



1. 暗茶褐色土 2. 茶褐色土

第 40 図 溝内土器出土状態
及び土層断面 (1/40)

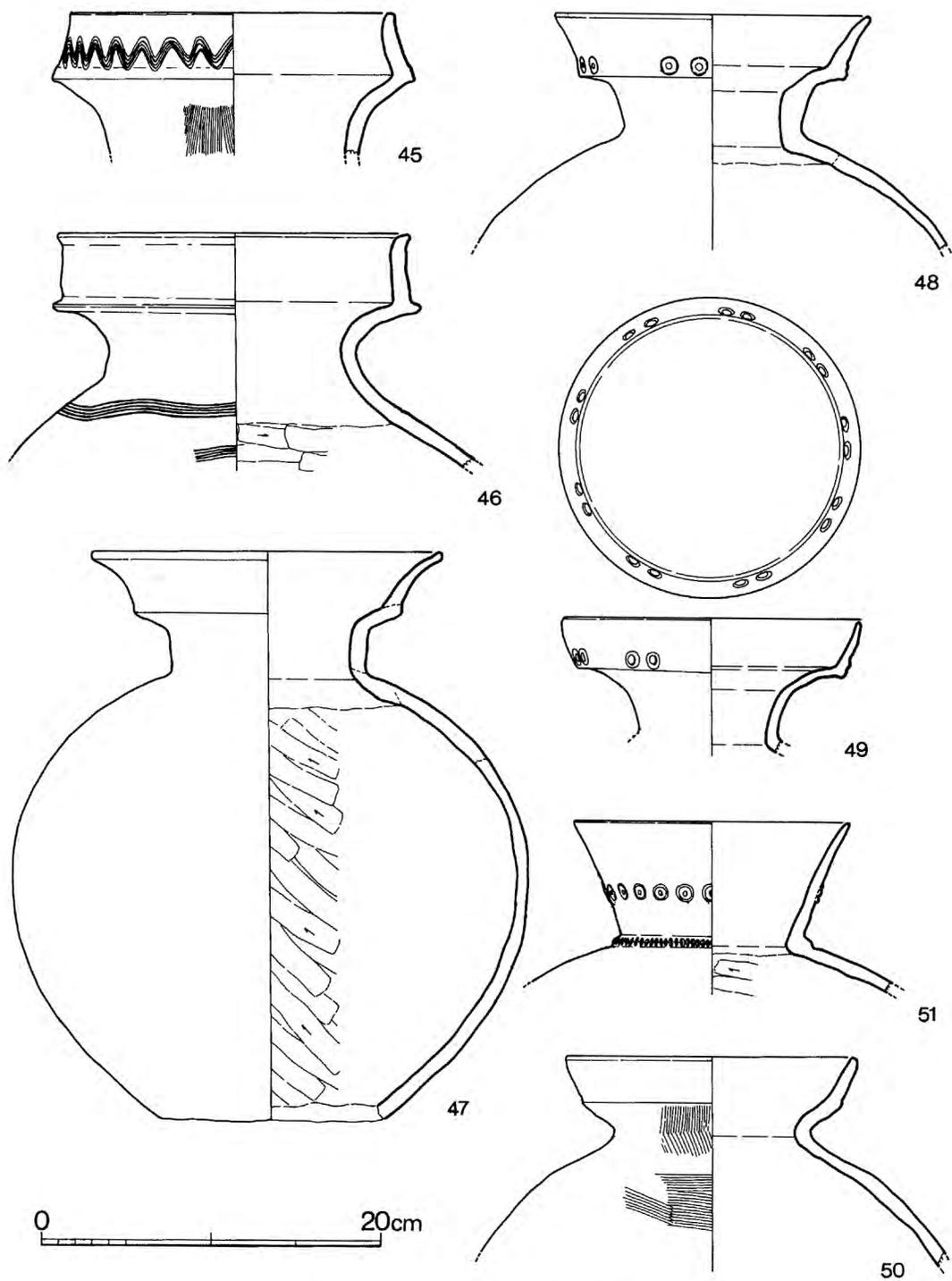


第 41 図 土器出土状態

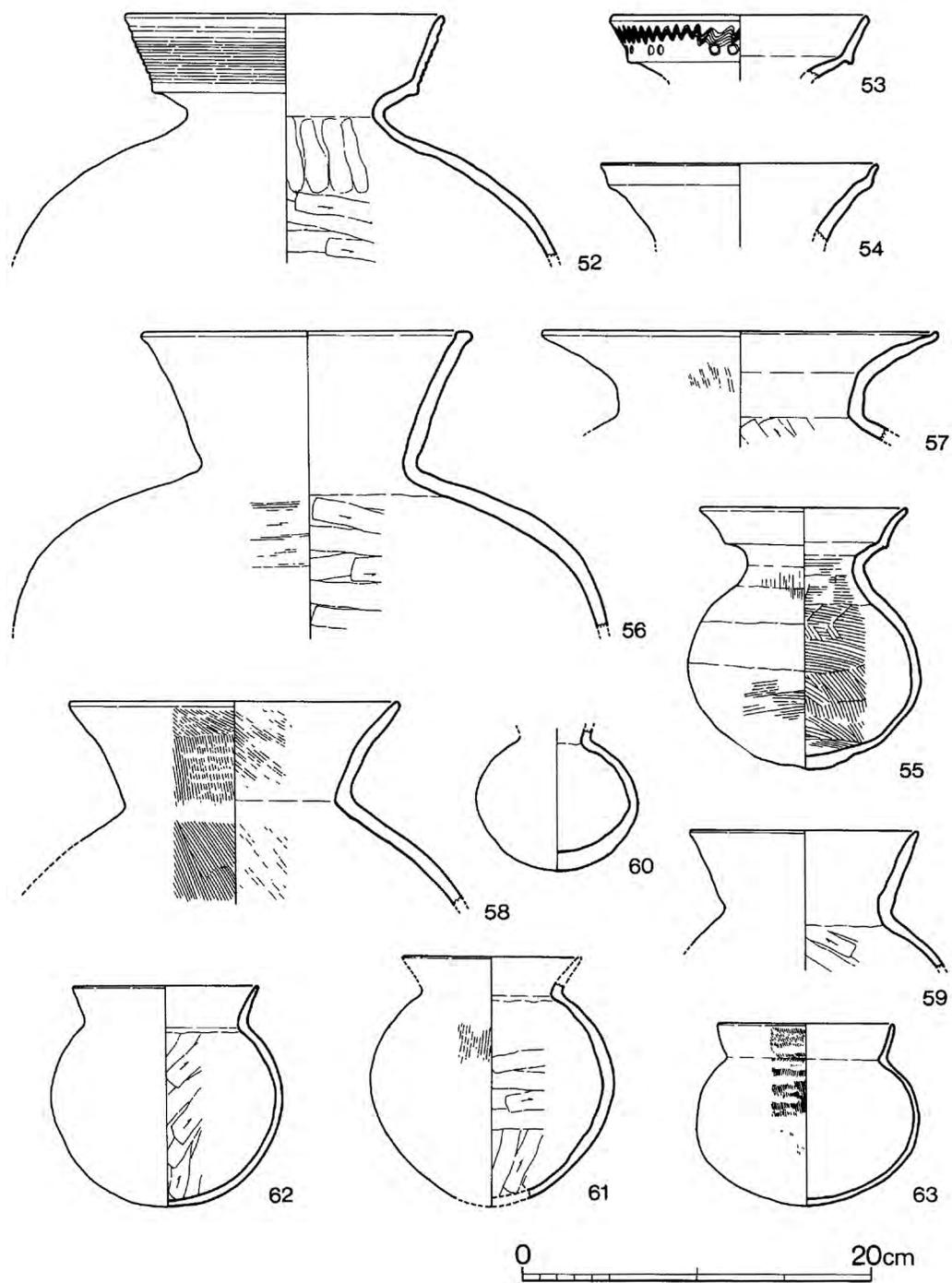
って、その全貌は知り得ない。溝幅は、狭い東溝で約80cm、広い西溝で1.7mを測る断面低平なU字状をなす溝である。最も残りの良い東溝で深さ約40cmを測る。溝内からは底面より若干浮いた状態で古墳時代前期の古式土師器が多量に出土した。他に水晶片が2点出土した。とりわけ、西溝(第40図)からは壺・甕・高杯等のほぼ完形品が集積した状態で検出された。出土土器からして古墳時代前期に掘削された環濠である。この時期の遺構としては環濠内にある4号住居跡1軒が確認されているだけである。しかし、検出された36軒の住居跡が全て浅くかなり削られていることを考慮すれば、環濠内に本来かなりの数の住居跡が存在した可能性は高いであろう。環濠内の規模は現存部で、東西20m、南北約24mを測る。

出土遺物(図版16~18、第42~46図)

壺(45~63) 45・46は内傾する複合口縁の壺で、45の口縁部外面には4条の櫛描き波状文が、46の肩部には5条の櫛描き波条文が二段にめぐっている。口径45が19.1cm、46が20.8cmを測る。47~50・52~55はいわゆる複合口縁の壺で、47~50・52は大形品、53~55は小形品である。47は肩の張った扁球形の胴部に短かく直立する頸部がつく複合口縁の壺で、底部は穿孔(焼成後)されている。調整は器面が風化しているため不明瞭であるが、外面へラ磨き、胴部内面へラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げているようである。口径20.6cm、器高34.5cm、胴部最大径30.5cmを測る。色調は外面淡黄褐色、内面黒褐色を呈し、焼成は良好である。48・49は口縁部外面下端に2個対の竹管文を施した壺で、頸部は短く外傾したタイプである。48は外面へラ磨き、胴部内面へラ削りしている。色調は48が褐色、49が明茶褐色を呈す。口径は48が18.6cm、49が17.7cmを測る。50は頸部がほとんどなく、内傾気味に外反する複合口縁の壺で



第 42 图 環濠出土土器実測图 1 (1/4)



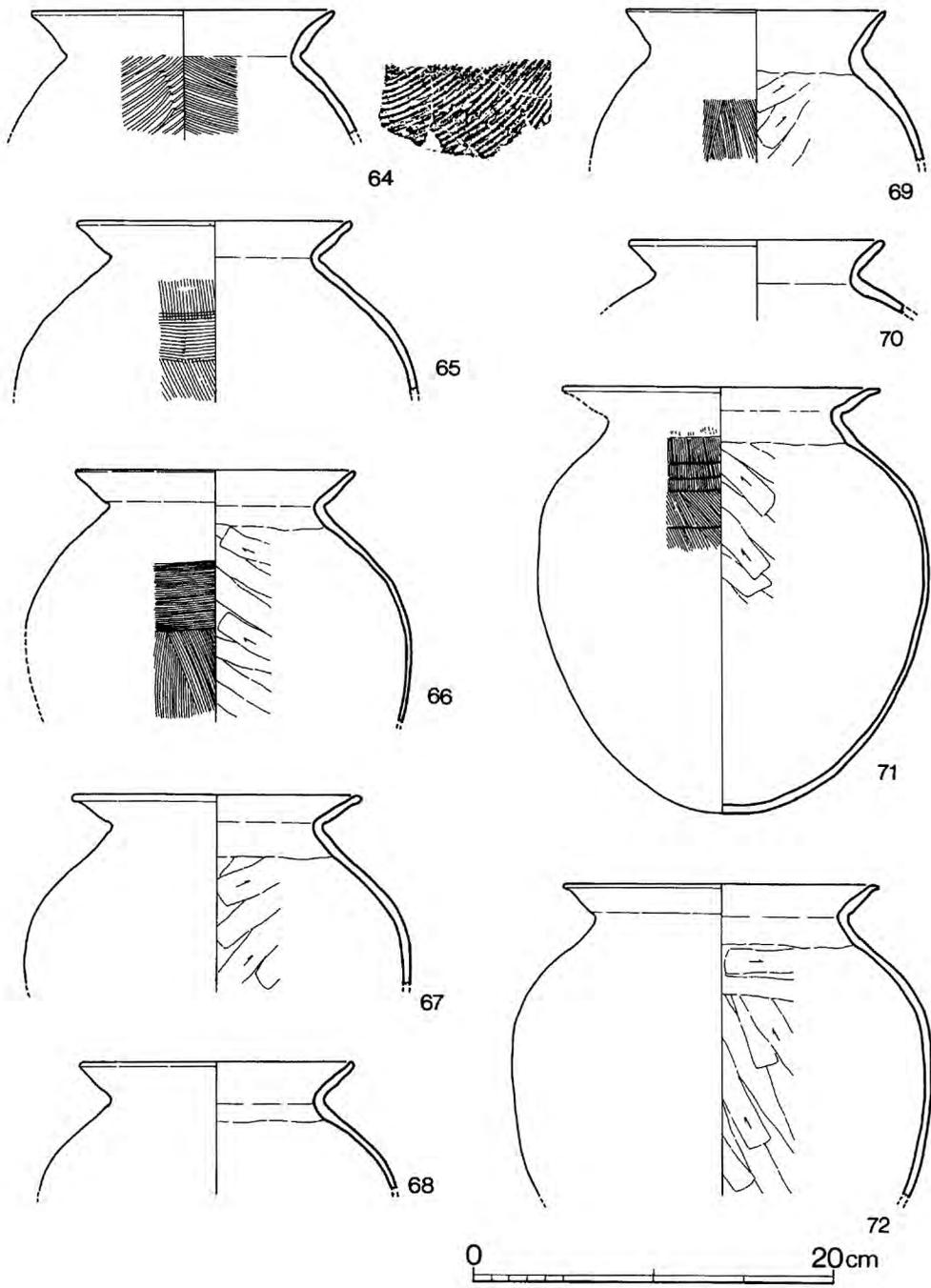
第 43 图 環濠出土土器実測図 2 (1/4)

ある。口径17.3cmを測る。52は口縁部外面に凹線文がめぐる短頸の複合口縁の壺である。風化のため不明瞭だが、胴部内面へラ削りしている。色調は黄褐色で焼成は良い。口径18.3cmを測る。51は大きく外反する単口縁の壺で、外面に円形付文をめぐらし、頸部下に三角凸帯を付し、上端に刻目を施している。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好な土器である。口径16.3cmを測る。53～55は口径11.9～16cmを測る小形品で、53の口縁部外面には櫛描き波状文と2個対の竹管文が施されている。いずれも黄褐色で、へラ磨きされた作りの良い土器で、54の内外には赤色顔料の塗布がみられる。56～58は肩の張った胴部に大きく外反する単口縁が付く壺で、56のような口縁端部を肥厚させたものと、57のようにつまみ上げたものもある。56・57は胴部内面へラ削りであるが、58は刷毛のあとナデで仕上げている。口径56が18.8cm、57が22.8cm、58が18.9cmを測る。色調は56・57が黄褐色、58は外面淡褐色、内面暗茶褐色を呈す。59～61はいわゆる小形丸底壺で、62・63は広口の小形壺で、63は器壁も薄く作りの良い土器である。調整は外面細かい刷毛のあとヨコへラ磨きし、下半は特に丁寧に磨いている。胴部内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。口径10.2cm、器高10.5cm、胴部最大径12.7cmを測る。色調は淡茶褐色を呈し、焼成も良好である。

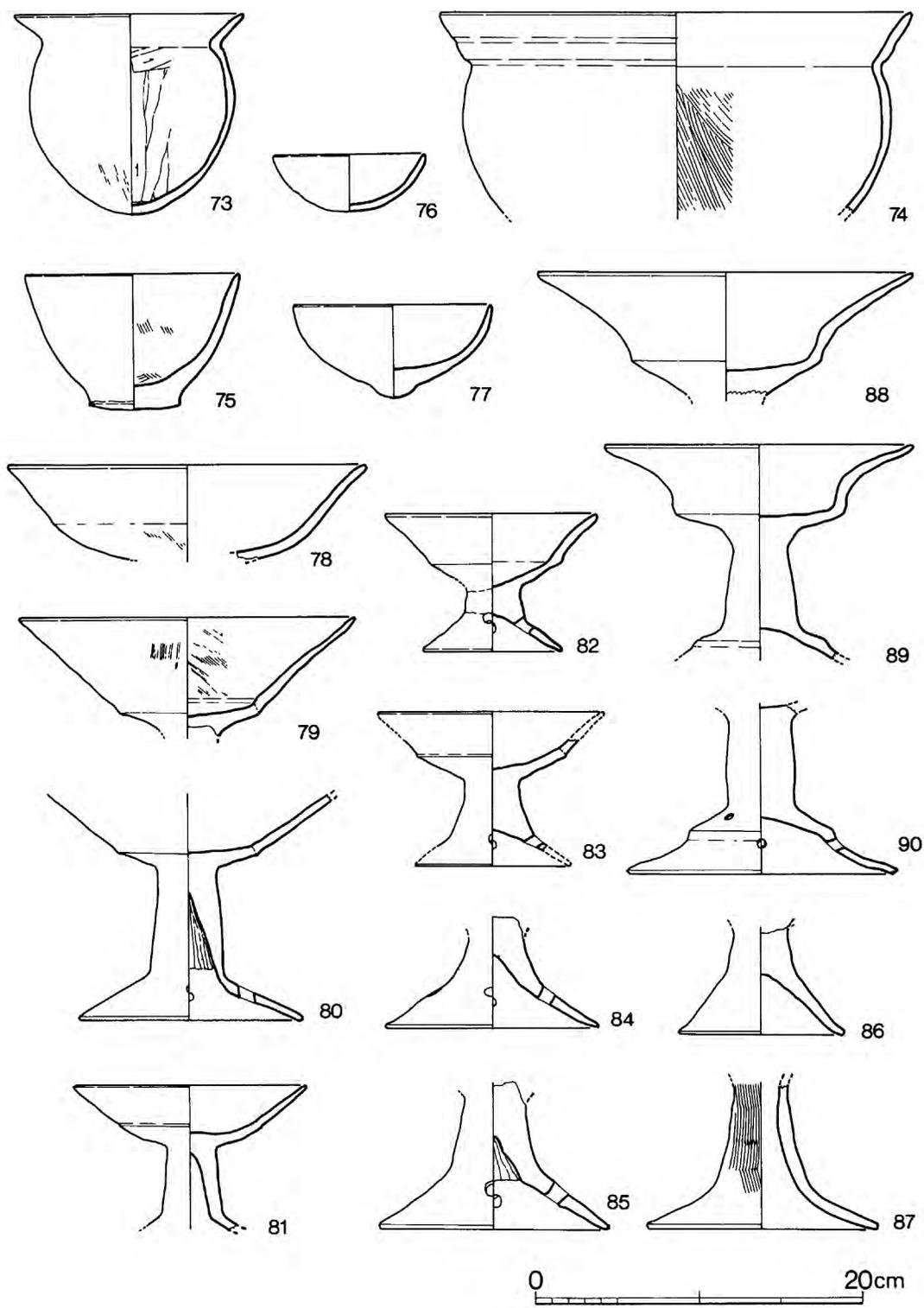
甕 (64～72) いずれも器面が風化し調整手法が不明瞭なものが多いが、64のような胴部外面タタキ、内面刷毛で仕上げたもの、65～72のような胴部外面刷毛かナデ、内面へラ削りで仕上げたものの二つのタイプがある。しかし、後者のタイプには口縁端部を丸く仕上げたもの(65～70)と、つまみ出し気味に細く仕上げたもの(71・72)の小差がある。また、71のような刷毛のあと文様風に凹線(極めて浅い)をめぐらした特異なものもある。一方、口縁部が内彎気味に外反するもの(65～68・71・72)と直線的に外反するもの(69・70)の差異がある。口径は64が16.8cm、65が15.2cm、66が15.5cm、67が16cm、68が15.2cm、69が14.4cm、70が14.3cm、72が17.6cmを測る。71はほぼ完形品で、口径17.7cm、器高23.6cm、胴部最大径21.5cmを測る。いずれも器壁の薄い作りの良い甕で、色調は64～66、70～72は茶褐色、67～69は黄褐色を呈す。73は最大径を口縁部にもつ小形の甕である。口径14cm、器高12cm、胴部最大径12.5cmを測る。胴部外面は風化のため不明瞭だが、一部に刷毛の痕跡がみられる。胴部内面はへラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。

鉢 (74) だらけた複合口縁状をなす大形の鉢で、復原口径29cmを測る。風化のため明瞭ではないが、調整は胴部外面ナデ、内面刷毛、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は暗茶褐色で、焼成も良好である。

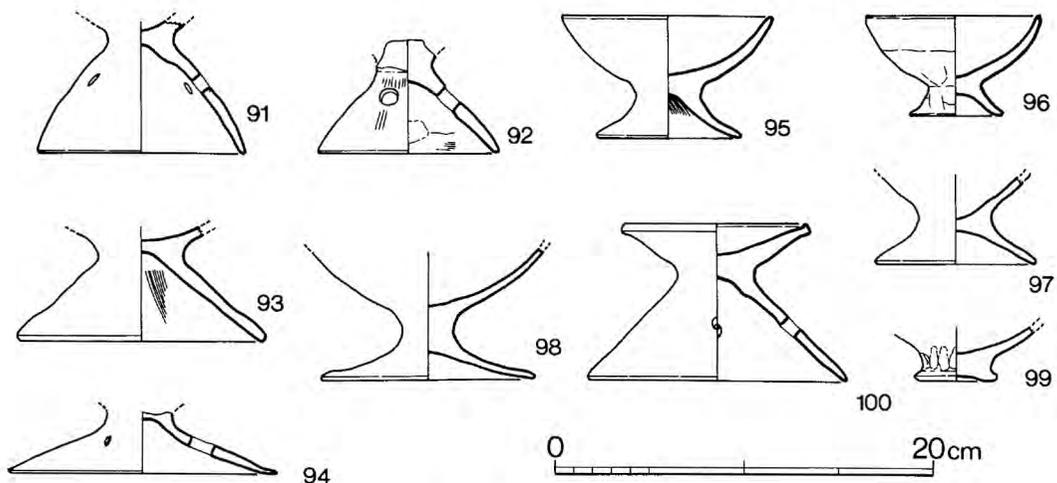
椀 (75～77) 75は平底の深いもの、76・77は杯ともいえる浅いタイプである。77は尖底気味の底部を有す特異な椀である。口径は75が13.2cm、76が9.3cm、77が12.2cm、器高は75が8.2cm、76が3.5cm、77が5.6cmを測る。調整は77が内外ともナデで仕上げている他は、風化が著しく不明瞭。



第 44 图 環濠出土土器実測図 3 (1/4)



第 45 图 環濠出土土器実測图 4 (1/4)



第46図 環濠出土土器実測図5(1/4)

高杯 (78~98) 大きく7つのタイプにわけることができる。78のような弥生時代の系統をひく大きめの高杯で、体部外面の屈折稜の不明瞭なもの、79・80のような杯部が深く大きいもの、81~86のような柱状部が短い小形のもの88~90のような杯部・脚部に段を有す特異なもの、91・92のような柱状部が極めて短かく裾部が内弯気味に開くもの、94~98のような柱状部から直接ラッパ状に開くもの、99のような台付碗というべきものの7タイプである。

器台 (100) ラッパ状に開く脚部に直線的に外反する器受部がつく小形の器台で、口縁端部をヨコナデによりつまみ上げ気味に仕上げている。器受部径10cm、裾部径13.6cm、器高8.4cmを測る。調整は外面へラ磨き、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は茶褐色で、焼成も良好である。

石器 (第11図5・6) 両者とも水晶で、素材の一部に浅い剝離が見られるが、石核ではない。5の方が透明度が高い。

(7) 溝状遺構

溝1 (第3図) 19・20号住居跡床面下から検出された北東から南西方向に走る、全長約7m、幅0.6~1.5m、深さ9~18cmを測る溝である。溝内からは弥生土器片が若干出土したのみで時期の確定はむずかしい。

溝2 (第3図) 11号袋状竪穴の南西側から検出された北東から南西方向に走る幅25~30cm、深さ14~24cmの細い溝で、南西端は田圃の段落で消失している。全長3.9mを測る。遺物は若干の土器小片と砥石1点である。時期不詳。

出土遺物

石器 (第59図2) 棒状砥石で、4つの砥面を有す。断面は台形で、復原長14.5cm、最大幅

2.6cm。4面とも良く使用されている。

溝3（第3図） 2号住居跡の南側から検出されたほぼ南北に走る全長3.2mの溝である。溝幅は20~40cm、深さ5~10cmを測る。遺物は何等出土しなかった。

溝4（第3図） 20号住居跡と21号住居跡の間から検出された弯曲して走る細い溝で、西側は段落で消失している。全長約2.5m、溝幅20~28cm、深さ5~7cmと浅く、断面U字状を呈す溝である。遺物は弥生土器小片が若干出土したのみで、時期は不明である。

2. 歴史時代の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

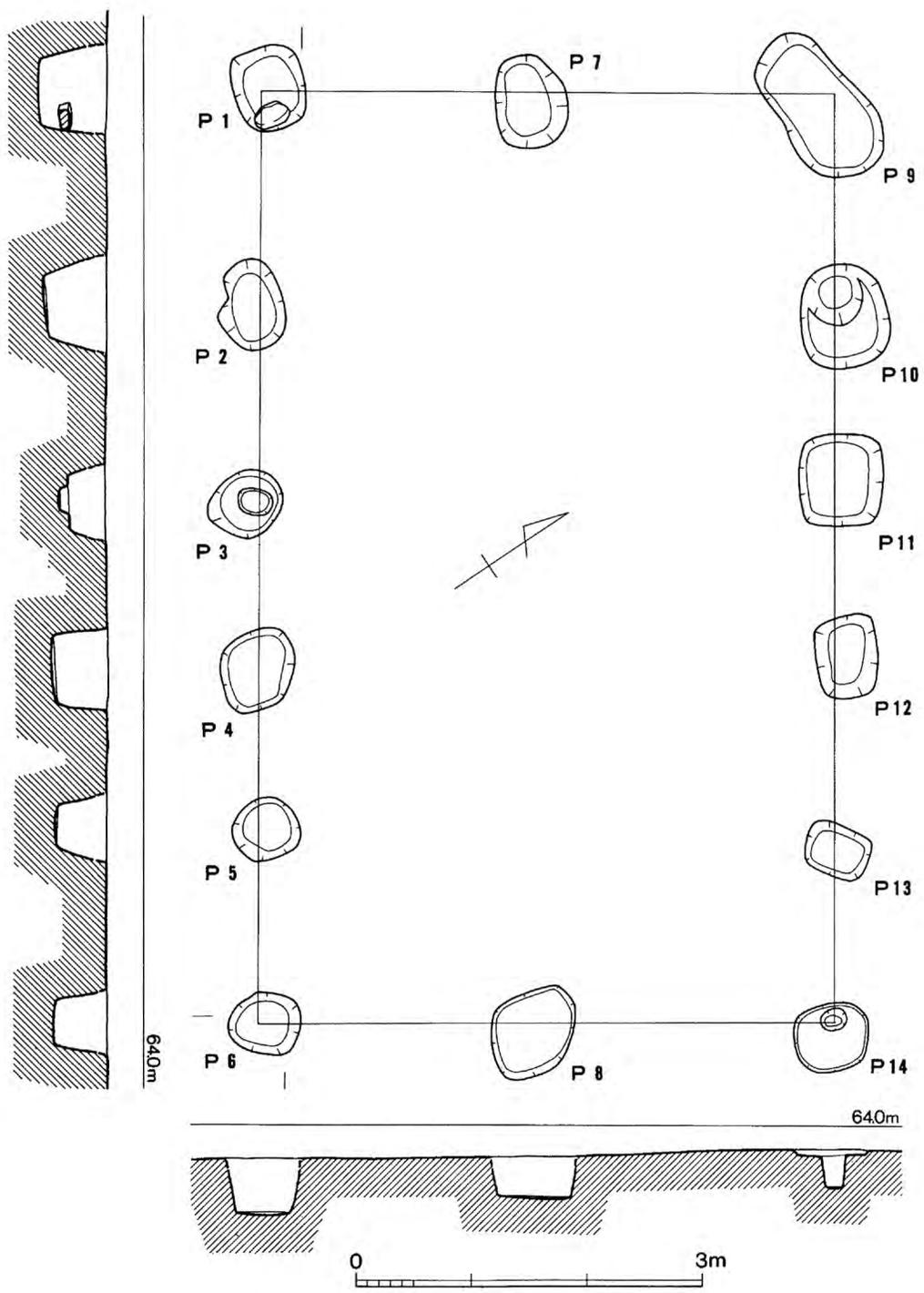
1号建物跡（図版11、第47・48図） 10・11・14・15号住居跡にわたって検出された2間×5間の建物跡である。梁間平均499cm、桁行間平均810cmを測る。柱穴の掘り方は全体に大きいものが多く、二段掘りと素掘りのものがある。深さは若干ばらつきがある。桁行方位はN-55°-Wを指す。また、柱穴内から奈良時代の須恵器片が若干出土した。時期は8世紀中頃。

表1 1号建物跡計測表

											(単位 cm)									
桁行柱間寸法					桁行寸法	梁間柱間寸法					P	深さ								
P1~P2 195	P2~P3 170	P3~P4 150	P4~P5 140	P5~P6 170	P1~P6 825	P1~P7 220	—	—	—	—	P6~P8 235	1	42	5	32	9	55	13	23	
—	—	—	—	—	P7~P18 810	P7~P9 255	—	—	—	—	P8~P14 260	2	35	6	38	10	61	14	34	
P9~P10 160	P10~P11 165	P11~P12 155	P12~P13 170	P13~P14 145	P9~P14 795	梁間寸法					3	24	7	36	11	55				
P1~P9 475	P2~P10 505	P3~P11 510	P4~P12 515	P5~P13 495	P6~P14 495	4	48	8	25	12	27									



第47図 1号建物跡全景

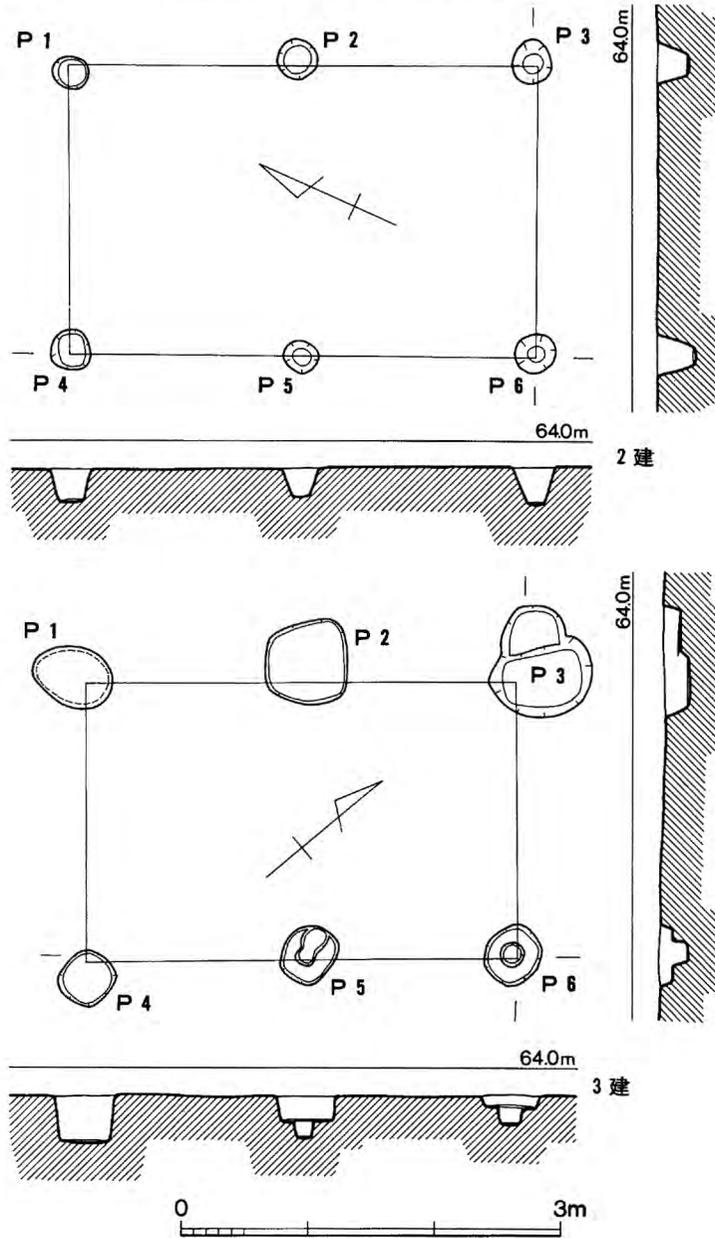


第 48 图 1 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

出土遺物 (第54図)

杯蓋 (1) 口縁端部を嘴状につくりだした低平な杯蓋の破片資料である。口縁部内外ヨコナデ、天井部外面回転ヘラ削り、内面ナデで仕上げている。色調は灰色を呈す。

2号建物跡 (第49図) 1号建物跡の東側から検出された1間×2間の建物跡で梁間間平均



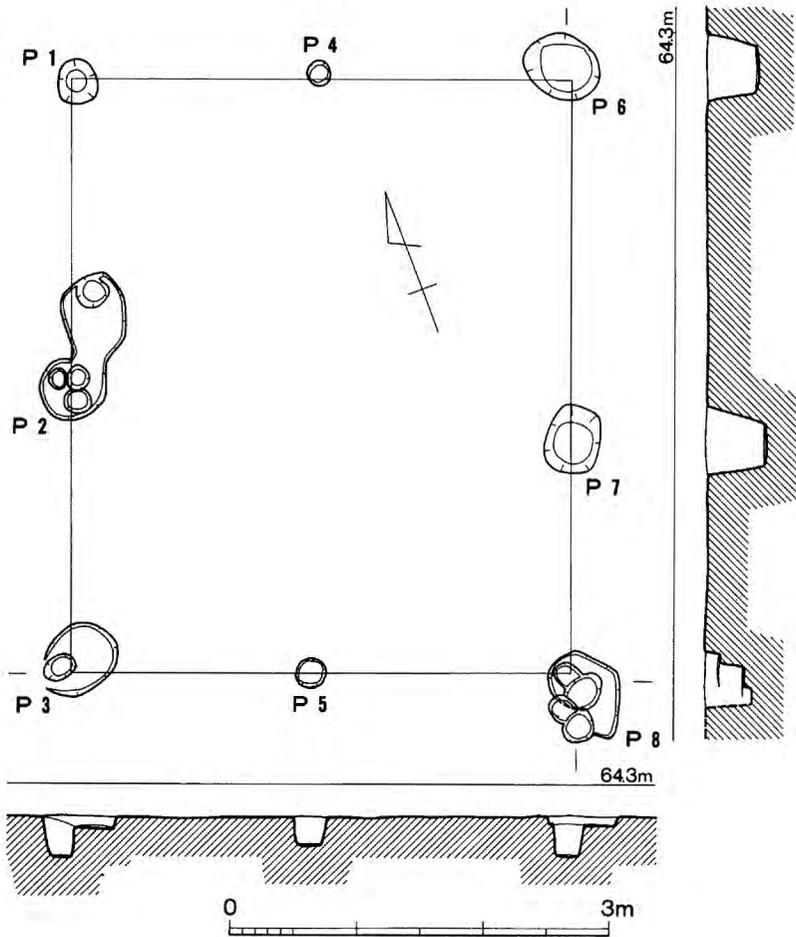
第49図 2・3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

228cm、桁行間平均 365cmを測る。柱穴は素掘りで、P 1が若干浅い他は22~30cmとほぼ一定している。桁行方位はN-24°30'-Wを指す。

3号建物跡 (第49図) 1号建物跡の南西側から検出された1間×2間の建物跡で、梁間間平均 230cm、桁行間平均 355cmを測る。柱穴は二段掘りと素掘りがあり、P 2が6cmと浅いが他は18~36cmである。桁行方位はN-40°-Eを指し、1号建物跡にほぼ直交する建物である。

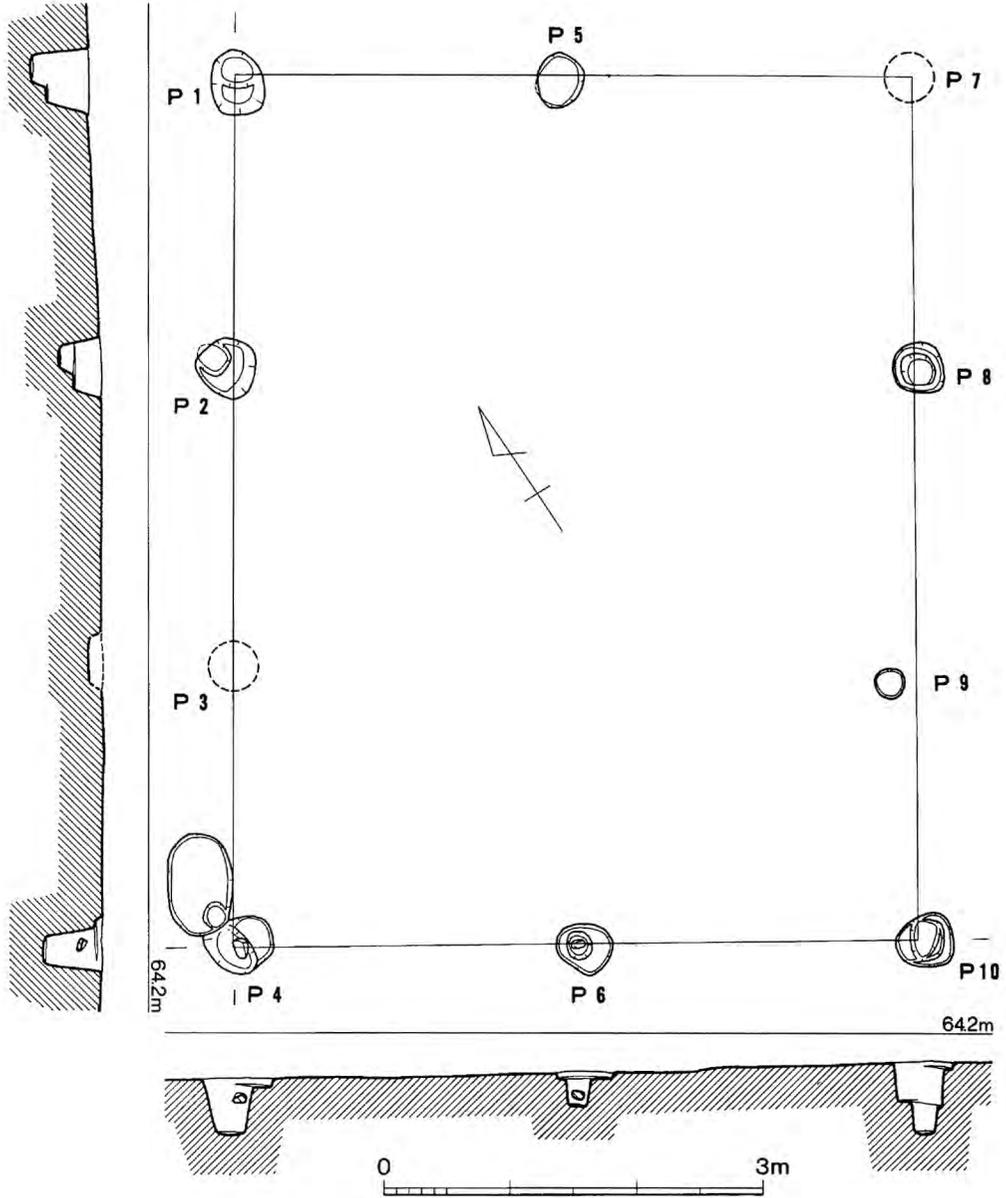
4号建物跡 (第50図) 1号建物跡の南東側から検出された2間×2間の建物跡で、梁間間平均 395cm、桁行間平均 473cmを測る。柱穴は二段掘りと素掘りのものがあり、深さはばらつきがある。桁行方位はN-21°-Eを指す。

5号建物跡 (第51図) 4号建物跡の西側から検出された2間×3間の建物跡で、梁間間平均 551cm、桁行間平均 689cmを測る。柱穴は二段掘りと素掘りがあり、P 4・P 6内には根石



第50図 4号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

が残っていた。深さはばらつきがある。桁行方位は $N-33^{\circ}30'-E$ を指し、1号建物跡にほぼ直交する建物跡である。



第51図 5号掘立柱建物跡実測図(1/60)

表2 2号建物跡計測表

(単位 cm)

桁行柱間寸法			桁行寸法			梁間柱間寸法			P	深 さ		
P1~P2 180	P2~P3 185	P1~P3 365	P1~P4 220	P2~P5 235	P3~P6 230	1	23	4	26			
P4~P5 180	P5~P6 185	P4~P6 365				2	14	5	22			
						3	24	6	30			

表3 3号建物跡計測表

(単位 cm)

桁行柱間寸法			桁行寸法			梁間柱間寸法			P	深 さ		
P1~P2 185	P2~P3 185	P1~P3 370	P1~P4 240	P2~P5 230	P3~P6 220	1	—	4	36			
P4~P5 175	P5~P6 165	P4~P6 340				2	6	5	32			
						3	18	6	22			

表4 4号建物跡計測表

(単位 cm)

桁行柱間寸法			桁行寸法			梁間柱間寸法			P	深 さ		
P1~P2 235	P2~P3 230	P1~P3 465	P1~P4 194	—	P3~P5 195	1	33	5	22			
—	—	P4~P5 475	P4~P6 195	—	P5~P8 205	2	12	6	42			
P6~P7 295	P7~P8 185	P6~P8 480	梁間寸法			3	32	7	46			
			P1~P6 389	P2~P7 395	P3~P8 400	4	15	8	32			

表5 5号建物跡計測表

(単位 cm)

桁行柱間寸法			桁行寸法			梁間柱間寸法			P	深 さ				
P1~P2 230	P2~P3 —	P3~P4 —	P1~P4 695	P1~P5 255	—	—	P4~P6 267	1	44	5	30	9	9	
—	—	—	P5~P6 683	—	—	—	P6~P10 275	2	32	6	26	10	55	
P7~P8 —	P8~P9 245	P9~P10 205	—	梁間寸法			3	12	7	—				
			—	P2~P8 560	—	P4~P10 542	4	45	8	36				

(2) 土 壙

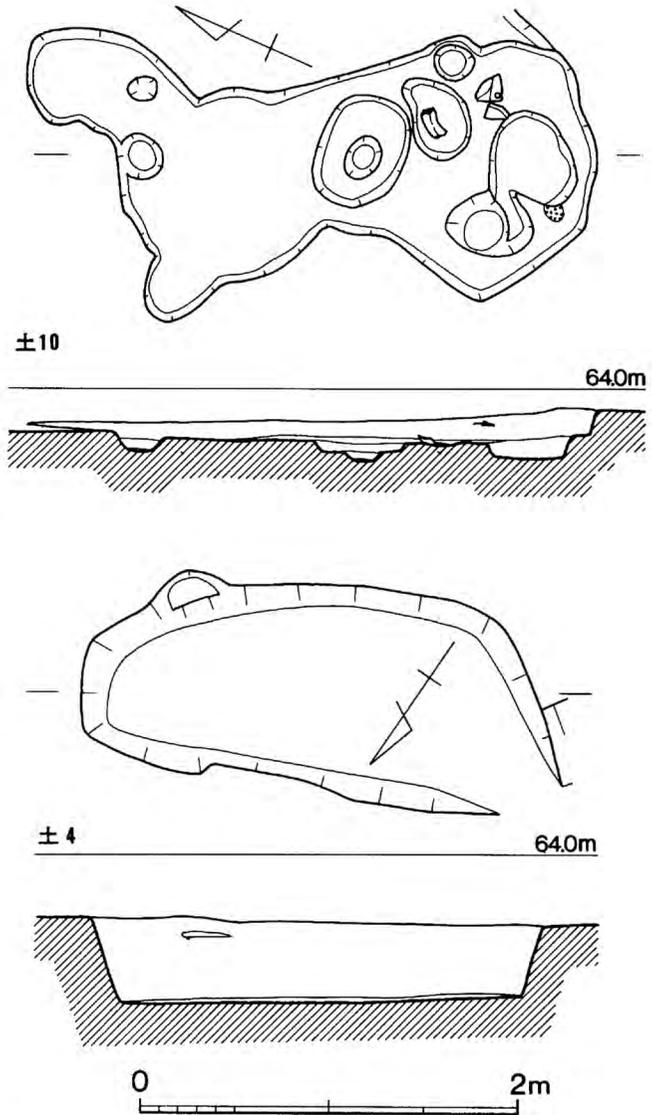
4号土壙 (第52図) 18号住居跡の西側から検出された隅丸長方形プランの土壙で、北西隅は田圃の段落で欠失している。規模は東西2.43m、南北幅広の所で1.15m、深さ46cmを測る。出土遺物は土師器・須恵器小片が少量出土した。時期は出土土器から奈良時代に属するものと思われる。

10号土壙 (第52図) 4号住居跡の北側にある不整楕円形プランの土壙である。壙底からは多数のピットが検出されたが、付随するものか明らかでない。埋土中からは奈良時代の須恵器・土師器とともに、多量の炭化物や焼土が検出された。時期は8世紀中頃と思われる。

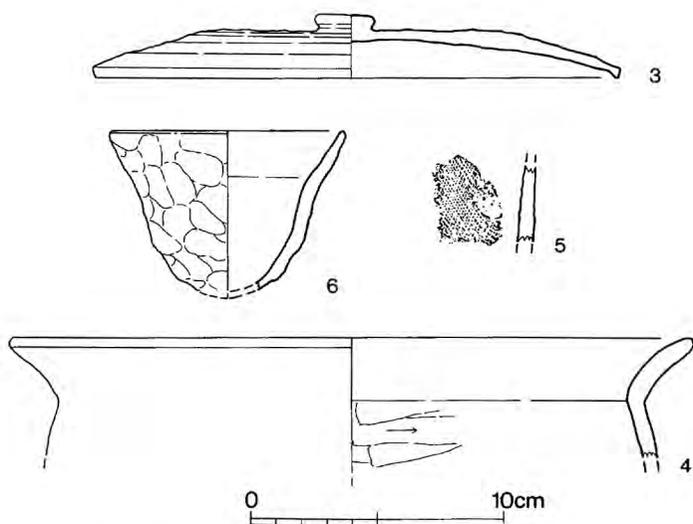
出土遺物 (図版19、第53図)

須恵器杯蓋 (3) 低平な宝珠形の鈕を有す杯蓋である。口縁部と体部の境界は明瞭で、口縁端部は嘴状につくり出している。口径20.6cm、器高 2.5cmを測る。天井部外面は回転ヘラ削り、内面ナデ、口縁部付近内外はヨコナデで仕上げている。色調は灰色を呈し、焼成は良好。

土師器甕 (4) 張りの弱い胴部に大きく外反したく字状口縁が付く甕で、復原口径27cmを測る。胴部内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は茶褐色を呈し、胎土には多くの砂粒を含むが焼成は良好である。



第 52 図 土 壙 実 測 図 (1/40)



第 53 図 10 号土 壤 出 土 土 器 実 測 図 (1/3)

焼塩壺 (5・6) 丸底で円筒形をなすと思われる焼塩壺の胴部破片で、内面に布目痕を残している土師質の土器である。外面には指頭痕がみられる。色調は茶褐色を呈し、強い二次加熱を受けているものの焼成は良好である。6は復原口径 9.3cm、器高 6.6cmを測る尖底気味の丸底を有す椀形の土器である。外面には指頭圧痕を顕著に残し、内面は丁寧にナデて仕上げている。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好。森田勉氏の分類(註2)によれば、5はI類、6はIIb類の焼塩壺に比定できる。

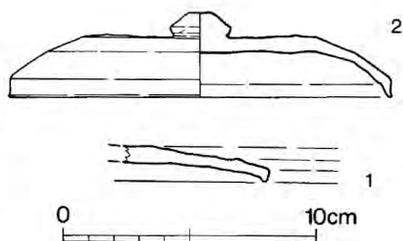
(3) 竪穴遺構 (第3図)

2号竪穴 (第3図) 13号住居跡を切って作られた隅丸方形プランの竪穴で、東側は段落で欠失している。規模は現存部で東西 3 m、南北約 1.5mを測る。遺物は床面上から 須恵器杯蓋 1点が出土したのみである。時期は 8 世紀初頭である。

出土遺物 (第54図)

須恵器杯蓋 (2) 宝珠形の鈕を有す口径 15.1cm、器高 3.4cmを測る杯蓋である。天井部外面回転ヘラ削り、内面ナデ、他はヨコナデで仕上げている。色調は暗灰色を呈し、焼成も良好である。

3号竪穴 (図版9、第3図) 32号住居跡を切って作られた隅丸長方形プランを呈す竪穴で、東側を4号に、南側を5号竪穴に切られている。現存部での規模は、東西 3.75m、南北 2.7m、深さ 54cmを測る。出土遺物は土師器・須恵器・白磁等の破片が少量出土した。時期は平安時代



第 54 図 竪穴・ピット出土土器
実測図 (1/3)

と思われる。

4号竪穴（図版9、第3図） 3号竪穴の東壁を切って作られた長方形プランの竪穴で、東側は未掘のため不明である。規模は現存部で、東西約1.3m、南北1.2m、深さ55cmを測る。埋土中からは若干の土器小片が出土したのみで時期は不詳である。

5号竪穴（図版9、第3図） 3号竪穴を切って作られた方形プランの竪穴で、東側と南側は未掘のため規模等は不明である。現存部で、東西3.2m、南北2.7m、深さ73cmを測る。出土遺物としては土師器片が若干出土したのみで時期は不明である。

（4）井戸状遺構

1号井戸（図版12、第55図） 3号住居跡の西側、環濠西溝中央上面から検出された径約1.95m、深さ約2mの円形プランの竪穴である。底面はほぼ平坦で、底面付近側壁には径5～6cm前後の木杭が数本めぐっていた。しかし、調査時に降った豪雨により消失してしまった。また、埋土中層から検出された茅（？）で編んだと思われるゴザ（図版12）状の編物も消失してしまったことは残念であった。遺物としては奈良時代の須恵器・土師器片が若干と弥生時代のものと思われるガラス小玉1点が出土した。他に、カヤの実やイチイガシ、竹等の植物類、コガネムシの羽根等が検出された。時期は掘立柱建物跡とほぼ同じ8世紀中頃と思われる。

出土遺物

ガラス玉（第59図5） スカイブルーのガラス小玉である。長4.8mm、径4.9mmを測り、いびつ。

2号井戸（図版12、第55図） 30号住居跡の東側から検出された平面形態円形を呈す竪穴で、埋土上層からは河原石10数個が集積した状態で出土した。規模は径約1m、深さ1.05mを測る断面逆台形状を呈す竪穴である。また、埋土中には多くの炭化物が含まれていた。出土遺物としては土師器片と白磁片が若干、土錘1点が出土したのみである。時期は平安時代末である。

出土遺物（第18図）

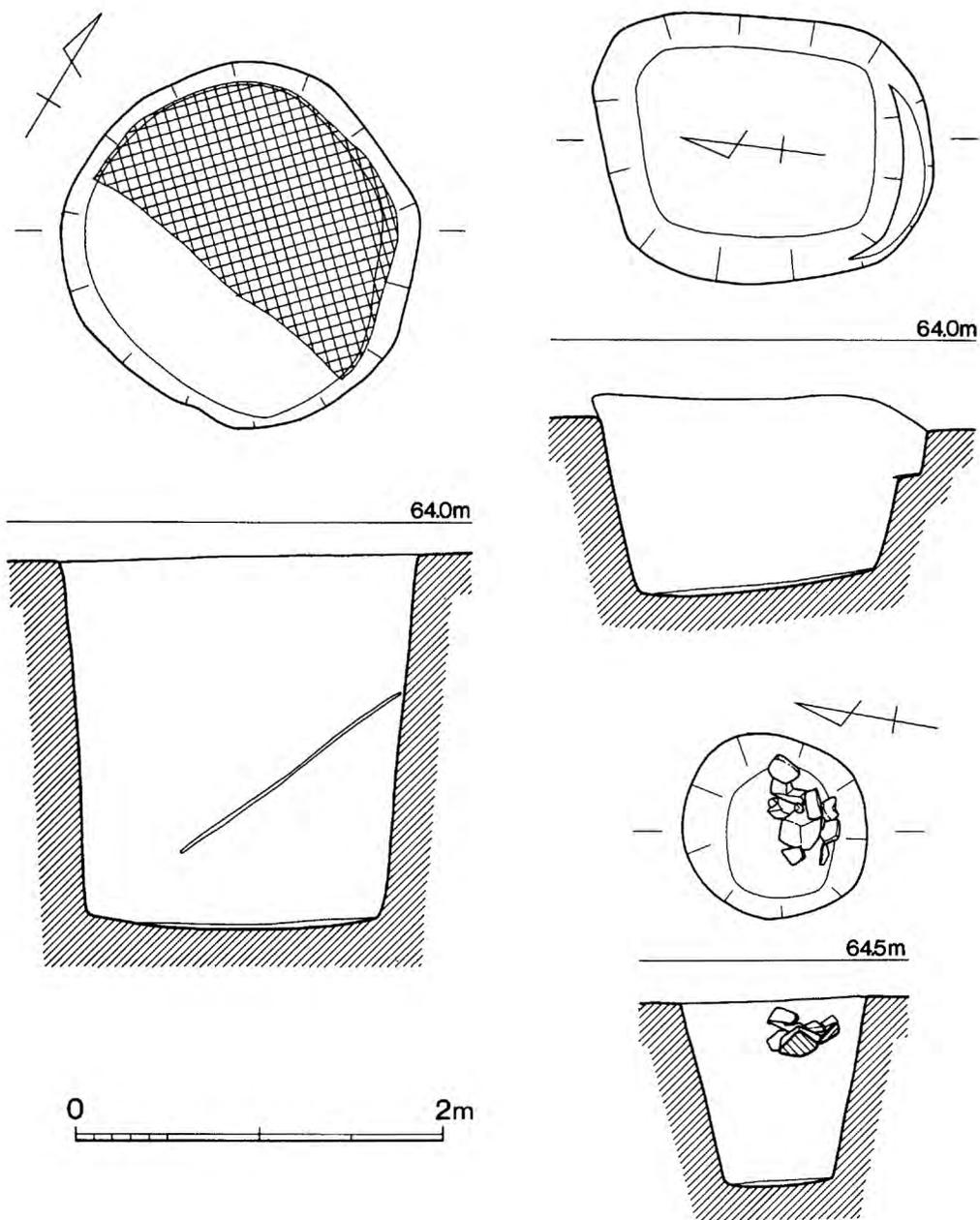
土師器椀（7） 内黒の高台付椀で、復原口径14.8cm、器高6.2cm、高台径8.2cmを測る。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。

白磁椀（8） 底部付近の破片資料である。低く肉厚のずんぐりした高台を有す椀で、内面見込みに1条の沈線がめぐっている。釉は乳白色で内面に施されている。

土製品（第11図1） 土錘の完形品。長4.48cm、最大幅1.5cm、孔径0.35cmを測る。淡褐色を呈し、胎土には砂粒多く含む。

3号井戸（第55図） 塚田地区北西端部の西側斜面際から検出された楕円形プランの竪穴で、北側は未掘である。規模は現存部で長径1.90m、短径0.9m、深さ60mを測り、東壁側にテラスを設けている。谷部に移る斜面ぎわに構築されていることもあって湧水が著しく調査に難行

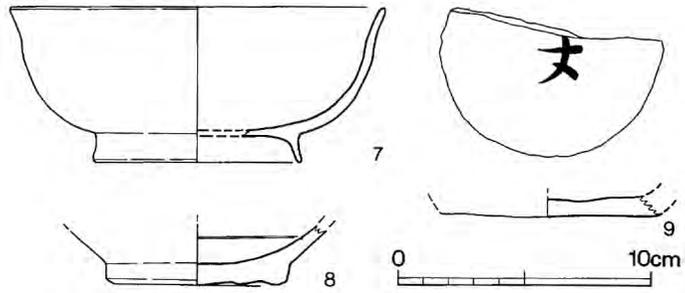
した。1号のような木杭等はみられず素掘りの井戸と思われる。出土遺物は若干の土師器片のみであった。



第55図 井戸実測図(1/40)

4号井戸(第3図)

3号井戸の南側に接近して検出された隅丸長方形プランの素掘り堅穴で、南壁側にはテラスを付設している。規模は東西1.45m、南北1.8m、深さ1.05mを測る。3号と同様に湧水のはげしい堅穴であ



第56図 井戸状遺溝出土土器実測図(1/3)

った。出土遺物は土師器片が若干出土したのみであったが、杯底部外面に文字が書かれた土師器片が1点出土した。時期は平安時代末と思われる。

出土遺物(図版18、第56図)

土師器杯(9) 底部の破片資料で、外底部に「大」と思われる墨書文字が記されていた。底径8.7cmを測り、内面ロクロナデし、外底部には板目痕がみられる。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。

(5) 溝状遺構(図版1、第3図)

塚田地区北端部で3条検出された。いずれも浅く不整な溝であり、本来は1条の溝が上面が削平され、溝底付近が残存した結果の可能性が高い溝である。また、出土遺物もほぼ同時期のものであり、1条の大溝と理解した方が良いでしょう。出土須恵器片等から奈良時代8世紀前半の溝といえよう。

(6) 土墳墓

1号土墳墓(図版11、第57図) 2号住居跡の東側から検出された隅丸長方形プランの土墳墓で、長径1.59m、短径0.95m、深さ11cmを測る。北西隅床面上に青磁椀1、土師器杯1、土師器皿3が副葬されていた。頭位は北側と思われる。時期は平安時代末、12世紀後半に比定できよう。時期が異なるが不明石器片1点も出土している。

出土遺物(図版19、第58図)

土師器皿(10~12) 口径9.3~10cm、器高1~1.3cm、底径6.5~7.5cmを測る。底部の切り離しは糸切りである。

土師器杯(13) 口径16.4cm、器高3cm、底径10.1cmを測る。底部の切り離しは糸切り手法である。

青磁椀(14) 内面・内底部に片彫りの草花文が描かれた完形の高台付椀である。釉調は淡黄緑色を呈し、高台内面を除き施釉されている。口径15.9cm、器高6.5cm、高台径5.8cmを測

る。

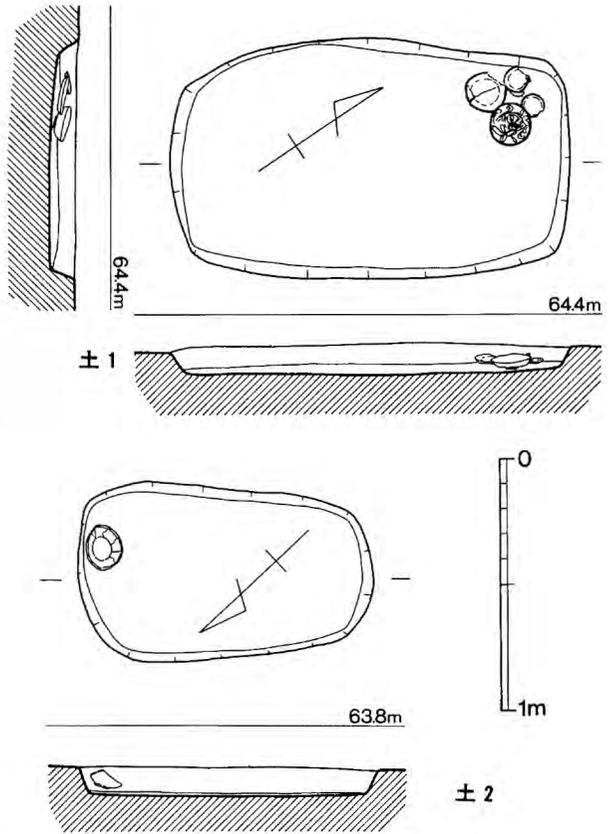
石器(第59図1) 粘板岩製の扁平な石器で、表裏及び左縁は丁寧に研磨されている。石包丁であろうか。覆土中より出土。

2号土墳墓(図版12、第57図)

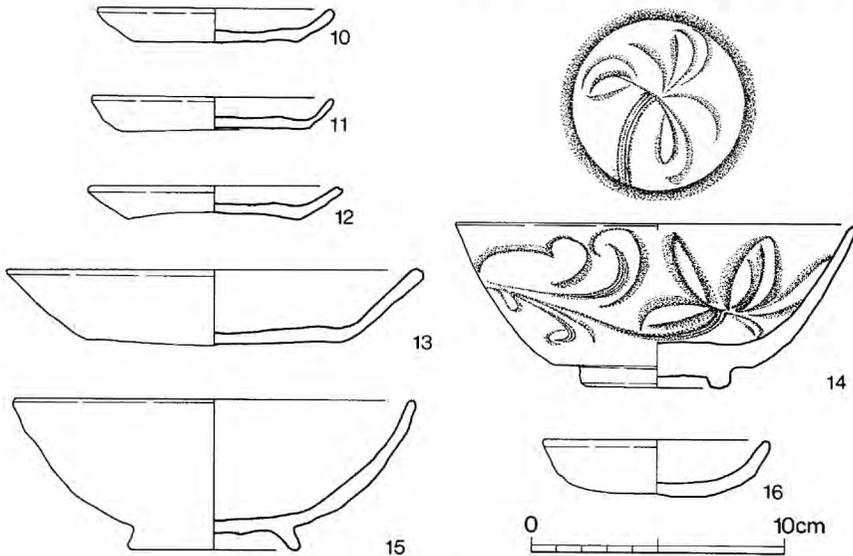
19号住居跡北側から検出された平面形態隅丸長方形を呈す土墳墓である。規模は長径1.17m、短径中央で0.66m、深さ11cmを測る。北側小口部から床面よりわずかに浮いた状態で土師器椀1が出土した。南側小口に比べ北側小口が若干広く、また、土師器椀の副葬からして頭位は北側と思われる。時期は12世紀前半に比定されよう。

出土遺物(図版19、第58図)

土師器椀(15) 低い外方にふんばった高台に内弯気味に立ち上る



第57図 土墳墓実測図(1/30)



第58図 土墳墓出土土器実測図(1/3)

体部がつく高台付椀で、口径15.8cm、器高6cm、高台径6.7cmを測る。色調は黄灰色を呈し、焼成普通。

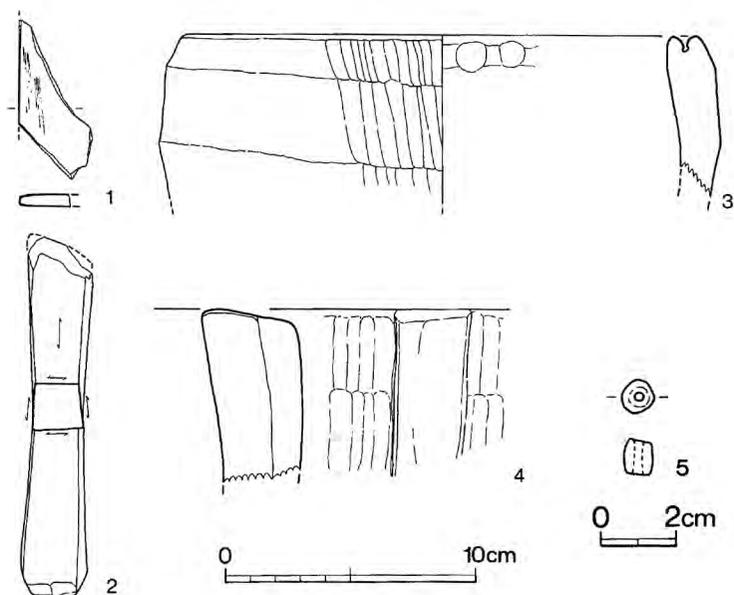
3号土墳墓（第3図） 10号住居跡の上面から検出された隅丸長方形プランの土墳墓で、長径0.9m、短径0.47m、深さ約20cmを測る。遺物は埋土中から土師器皿1点が出土した。時期は2号土墳墓とほぼ同時の12世紀前半と思われる。

出土遺物（第58図）

土師器皿（16） 口径9cm、器高2cm、底径5.5cmを測る。調整手法は器面の風化が著しいため不明である。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良好。

(7) その他の遺物

石器（第11図20、第59図3・4） 20は石包丁と考えられる石器で、右側縁には刃部が用意されている。下縁には刃こぼれがある。砂岩製。3・4とも滑石製の石鍋であるが、形態を異にする。3は口径21cm前後に復原でき、口唇部には一条の溝が巡っている。体部外面のノミ削り痕は3段観察される。外面には煤が付着する。4は上下方向に長い把手を有す石鍋片である。把手の幅3cm、厚さ1.5cm、器壁2.2cm前後。口径は22~24cmぐらいである。削りは口縁部に近い方が古い。



第59図 石器、玉類実測図(1/3・1/2)

IV 柿木遺跡の調査

穴江・塚田遺跡の北側に位置する標高 61.50～62mの一段低い段丘上突端にある遺跡である。穴江・塚田遺跡に比べ 1 m 強の比高差がある。遺跡は全体に開削や耕作等によりかなり削平されていたが、弥生時代中期の溝状遺構 1 条、奈良時代のものと思われる溝状遺構 2 条と時期不明の溝 4 条が検出された。また、B 地区北端から検出された大溝内からは井堰と思われる遺構が発見された。

調査地区が狭長であるため、水路を挟み北側を A 地区、南側を B 地区と仮称し調査を実施した。

1. 柿木 A 地区の遺構と遺物

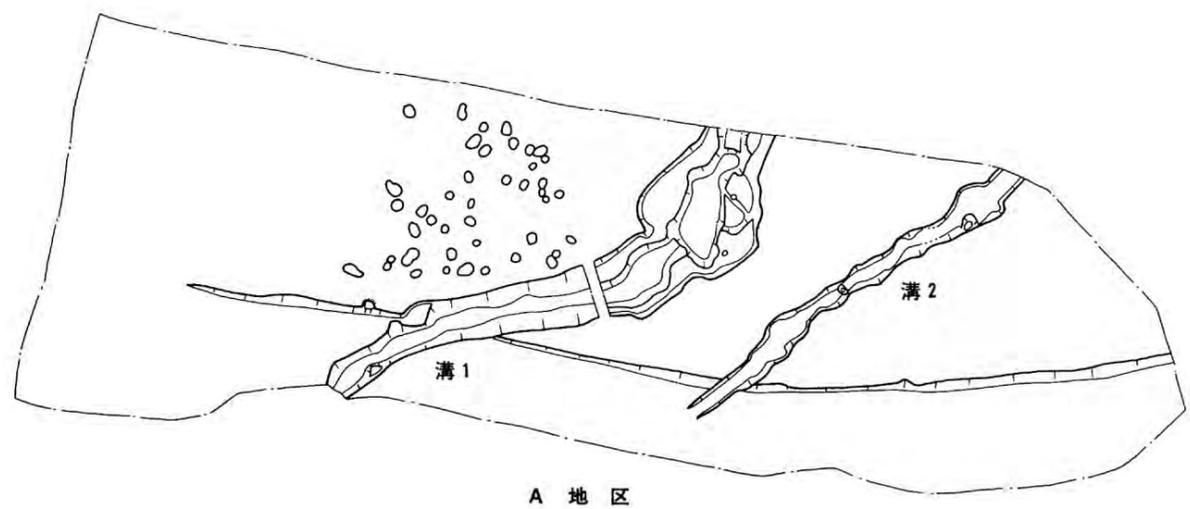
(1) 弥生時代の溝状遺構（図版13、第60図）

発掘区南端で検出された東から西の方向に走る溝 1 で、西端部は田圃の開削で消失していた。溝幅は広い所で 1.2m、狭い所で 0.45m、深さ 22～36cm を測る断面 U 字状を呈す溝である。常時水が流れていたようで下層には細かい砂が堆積していた。遺物はその砂層中から出土したもので、中期の壺・甕等の破片多数が検出された。時期は中期前半に比定されよう。

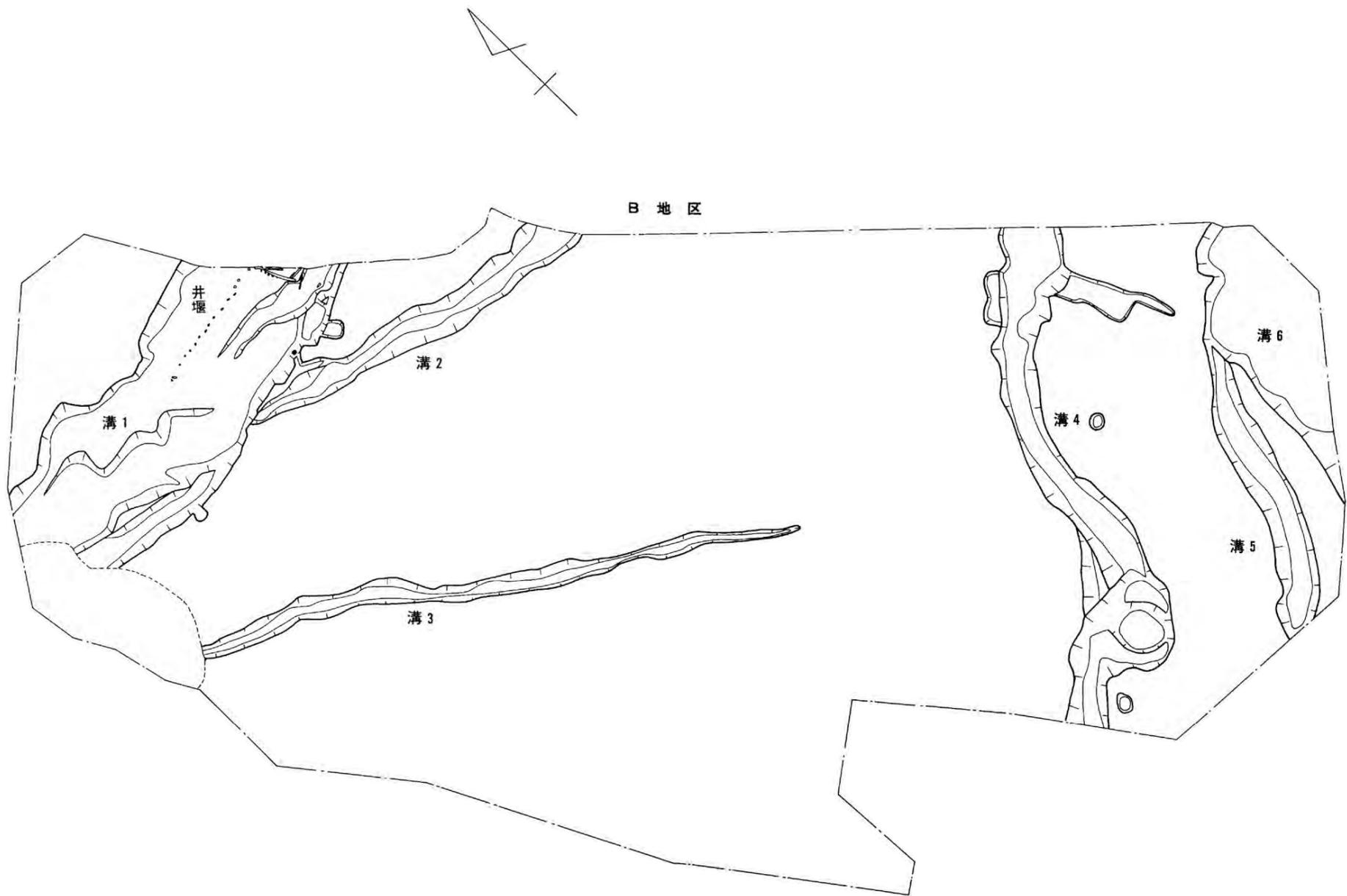
出土遺物（第61図）

壺（1・2） 1 は口縁下に 1 条の三角凸帯を付した丹塗り磨研の長頸の小形壺で、復原口径 11.2cm をはかる。胎土には多くの砂粒を含むが焼成は良い。2 は肩の張った胴部に大きく開く口縁部がついた単口縁の壺で、復原口径 31.4cm を測る。器面は風化が著しく調整は不明。色調は外面茶褐色、内面淡黄褐色を呈す。胎土には多くの砂粒を含み、焼成は良好である。

甕（3～10） 3～6 は胴部上半、7～10 は底部付近の破片資料である。3～5 は口縁下に三角凸帯、6 はコ字状凸帯をめぐらした甕である。その中でも 4～6 は胴部の張りが強いタイプで、大き目の甕である。口径 3 が 25.3cm、4 が 31.1cm、5 が 38.6cm、6 が 40.9cm を測る。調整は胴部内外ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は 3 が茶褐色の他は黄褐色で、いずれも焼成良好な土器である。7・8 は肉厚の平底で、9・10 は凹み底で肉薄の底部である。7 は底径 10.5cm と大きく、他は 5.9～6.7cm を測る。調整は 7 が外面刷毛、内面ナデで、他は内外ともナデで仕上げている。色調は茶褐色を呈し、胎土には多くの砂粒を含む。焼成は良好である。

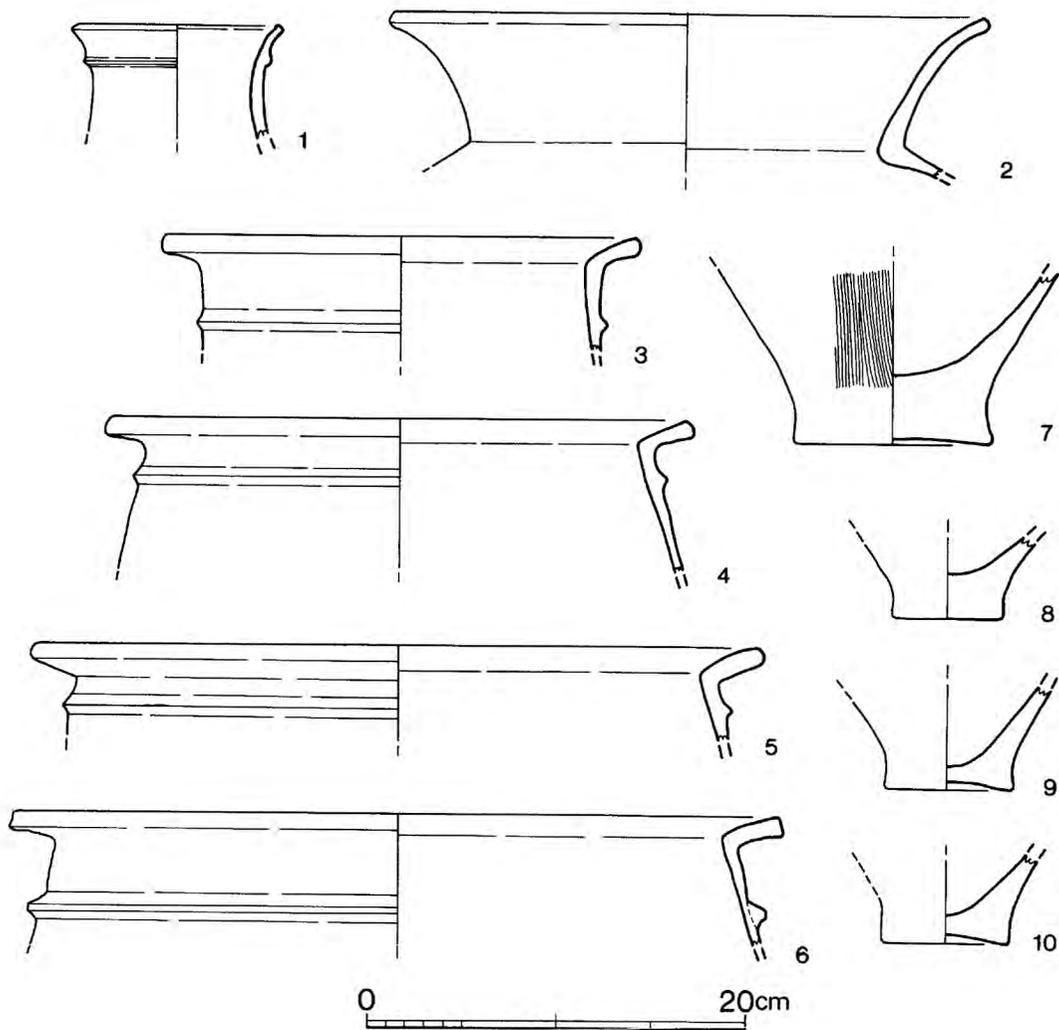


A 地区



B 地区

第 60 図 柿木遺跡遺構配置図 (1/200)



第 61 図 溝 1 出土土器実測図 (1/4)

(2) 奈良時代の溝状遺構 (図版13、第60図)

A地区のほぼ中央から検出された西から東の方向に湾曲して走る溝である。溝幅は東端部で3.6mと広く溜りを形成し、削平の著しい西端部で0.75mと狭くなる。深さは42~65cmを測り、溝底は東から西に傾斜している。溝内埋土からは奈良時代の須恵器等の破片が若干出土した。

2. 柿木B地区の遺構と遺物

(1) 溝状遺構 (図版13、第60図)

全部で6条の溝が検出されただけで他の遺構は発見されなかった。2～5号溝は小溝であるが、1・6号溝は大溝で、井堰状遺構や杭列が検出された。

1号溝 (図版13、第60図) 発掘区北端で発見されたほぼ東西に走る大溝である。溝幅は広い所で6.2m、深さ約65cmを測り、断面逆台形状を呈している。溝底は東から西に緩やかに傾斜している。溝底東側からは東西に走る杭列と溝を遮ぎる状態で井堰状遺構が検出された。溝内の堆積土は腐植土と砂層が互層に堆積し、溝底中央付近には厚い砂層の堆積がみられた。遺物の取り上げはこれを下層とし、腐植土層を挟み上の土層を上層として扱った。出土遺物は、上層から古墳時代後期の須恵器が少量出土した他は、奈良時代の須恵器がその大半を占めている。それら出土須恵器の中に、文字を記した墨書土器1点が検出された。時期は下層出土の須恵器が示す8世紀初頭から中頃である。

出土遺物 (図版18、第62図)

須恵器壺 (17) 復原口径12.3cmを測る口頸部の破片資料である。頸部外面カキ目、頸部内面から口縁部はヨコナデで仕上げた灰色を呈す焼成良好な土器である。おそらく提瓶の口頸部破片と思われる。下層出土。

須恵器碗 (18) 円孔は遺存していないものの脛の胴部破片である。胴中に二条の沈線をめぐらし、その上端に櫛により刺突文を施している。胴部最大径9.4cmを測る。色調は外面暗灰色、内面灰色を呈し、胎土には多くの砂粒を含むものの焼成は良好である。上層出土。

須恵器甕 (19・20) 胴部上半の破片資料である。肩の張った胴部に大きく外反したく字状口縁がつく甕で、端部をつまみ上げ気味に仕上げている。調整は胴部外面19がカキ目、20が平行タタキ、内面19が刻みの細かい青海波タタキのあとナデ、20が青海波タタキのあと格子目タタキ、口縁部内外はいずれもヨコナデで仕上げている。色調は暗灰色で、焼成も良好である。上層出土。

須恵器皿 (21) 復原口径16.3cm、器高2.2cmを測る。外底部回転ヘラ削り、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は灰色で焼成良好。上層出土。

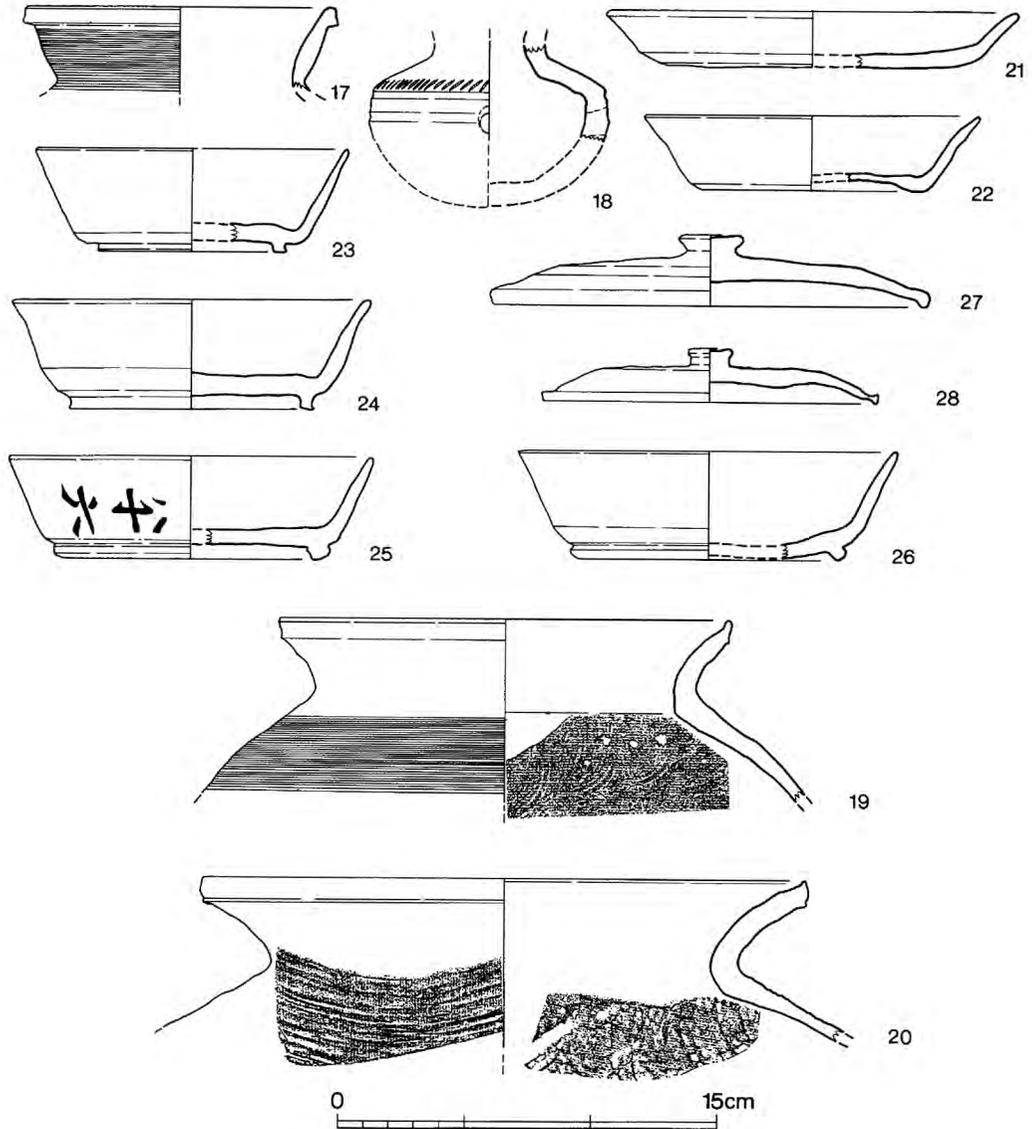
須恵器杯 (22) 外底部静止ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径13.3cm、器高2.9cm、底径8.9cmを測る。

須恵器椀 (23～26) いずれも高台付椀で、23が復原口径12.3cmと小さい他は、14～15cmと大きいタイプである。23・25・26の高台は外方に開く低い高台であるが、24の高台は直立し畳付は水平である。調整は底部内外ナデ、体部内外はヨコナデで仕上げている。25の体部外面に

は、一字が不明瞭ながら「字六」の文字が読める。前字を何とするかは判らないが三字とすれば「八十六」と読むことができるかもしれない。23～25が上層、26が下層出土。

須恵器杯蓋 (27・28) 低平な宝珠形の鈕がつく杯蓋である。口縁部と体部の境界は明瞭で、口縁端部は嘴状につくり出している。27は復原口径17.1cmの大形品、28は13.2cmを測る小形品である。

2号溝 (図版13、第60図) 1号溝の南側から検出された東から北西の方向に走る溝で、西



第62図 1号溝出土土器実測図 (1/3)

端は1号溝に合流している。溝幅は0.8～1.8m、深さ40～50cmを測る断面U字状を呈す溝で、溝底は東から西に傾斜し、1号溝に注いでいる。遺物は何等出土しなかった。

3号溝（図版13、第60図） 発掘区中央から検出された南東から北西方向に走る幅0.25～1m、深さ約20cmを測る細い溝である。全長約24mを測る。遺物は何等出土しなかった。

4号溝（図版13、第60図） 発掘区南側から検出された溝で、北東から南西方向に蛇行しながら走る。南西端付近で溜りを形成している。溝幅は1.1～3.5m、深さ12～68cmを測り、溝底は東から西に傾斜している。遺物は何等出土しなかった。

5号溝（図版13、第60図） 発掘区南端の6号溝から枝分かれした溝で、北東から南西に走る。溝幅は0.9～1.7m、深さ5～20cmを測り、断面逆台形状を呈す。溝底は東から西側に緩やかに傾斜している。遺物は何等出土しなかった。

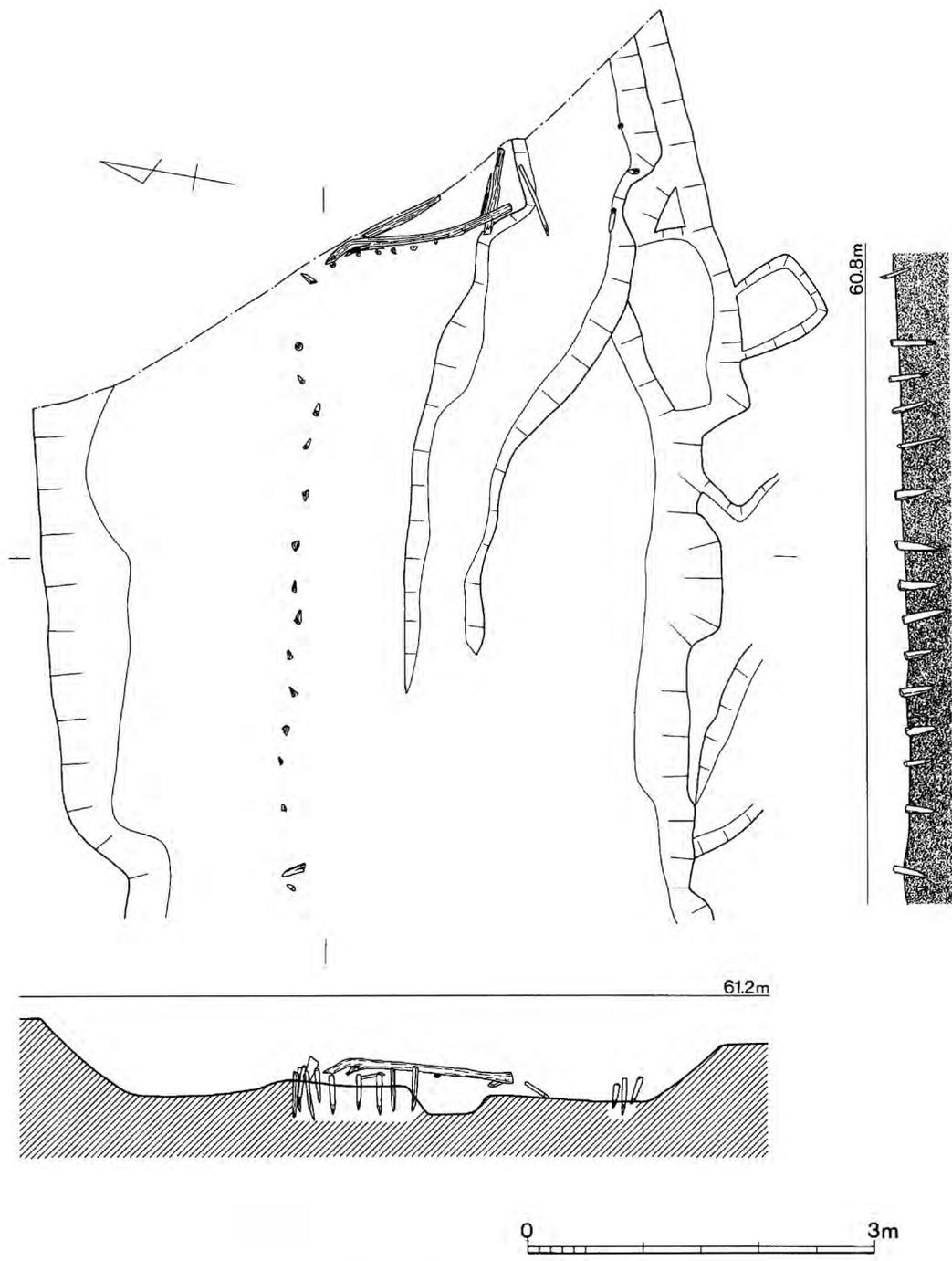
6号溝（図版13、第60図） 南端部で検出されたほぼ南北に走る大溝である。東側は未掘のため溝幅は不明である。西壁側底面から9本の杭列が検出された。遺物としては奈良時代と思われる須恵器片数点が出土した。時期は1号溝と同じ世紀半に比定されるもので、北東側は未掘のため不明であるが、同じ溝になる可能性もあろう。

(2) 井堰状遺構（図版14、第63・64）

1号溝内の中央東側から検出されたL字状に打ち込まれた杭列である。北壁側に沿って直線的に16本の杭が30～50cm前後の間隔で並び、東端で直角に屈折する8本の杭が溝を遮るように15～20cm間隔と狭く打ち込まれ井堰状をなしていた。また、そこには堰に使用されたと思われる横木2本が検出された。24本の木杭は、径7cm前後の自然木、割材の2種類を用いている。この井堰状遺構の性格については、東側が未掘のため明らかにしえない。時期は出土須恵器の示す8世紀初頭から中頃の所産である。



第63図 井堰状遺構全景(1/60)



第 64 図 井堰状遺構実測図 (1/60)

V 乙井手地区の調査

柿木遺跡の北側の標高 60.95mを測る低位な段丘上に位置している。調査の結果、溝状遺構不整形な竪穴、多数のピットが検出されたものの時期の明らかなものは殆どなく、性格不明のものが多かった。多数検出されたピット群についても遺構としてのまとまりをなさない。しかし、遺物としては弥生土器・土師器・須恵器・白磁等の破片が少量ではあるが出土していることは、かつて何等かの遺構が存在していたのが削平され消失した遺跡の可能性がある。性格は不明だが北西端部から検出された円形竪穴内から弥生中期の甕破片が出土していることから理解できることである。

円形竪穴（第66図）

発掘区北西端部から検出された円形プランの竪穴で、径64cm、深さ37cmを測る。南壁側は若干オーバーハングし、袋状をなす竪穴であるが、調査時に湧水がはげしく難行したことを考えると貯蔵穴としての機能は考えられない。遺物としては弥生中期前葉の土器破片が数点出土したのみである。性格は不明だが中期前葉の遺構といえる。



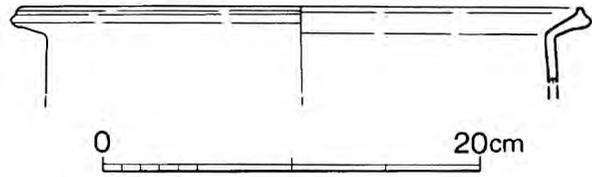
第 65 図 乙井手地区全景



第 66 図 乙井手地区遺構配置図 (1/ 200)

出土遺物（第67図）

甕 復原口径29.9cmを測る跳上げ口縁の甕である。胴部内外ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げた淡黄褐色を呈す焼成良好な土器である。胎土には多くの砂粒や雲母が含まれている。



第 67 図 豎 穴 1 出 土 土 器 実 測 図 (1/4)

VI おわりに

1. 調査の成果と問題点

今回、調査した3地点の遺跡は、いずれも著しく削平されていた。にもかかわらず穴江・塚田遺跡では、弥生時代中期・後期から古墳時代前期にわたる36軒もの豎穴住居跡をはじめ、弥生時代中期前葉の貯蔵穴24基、防禦的機能を有すと思われる集落を囲む方形の環濠状遺構、また、2間×5間といった大規模な掘立柱建物をはじめとする5棟の奈良時代の建物や、奈良～平安時代にわたる井戸状遺構、さらに平安時代末の土墳墓など多数の遺構・遺物が発見された。その結果・削平により多くの遺構・遺物が消失しているとはいえ、濃密な大複合遺跡であることが判明した。

今回の調査地点は、穴江・塚田遺跡の西端の一部を明らかにしえたのみで、その範囲・内容は広大かつ濃密なものであったと思われる。従って、遺跡の全貌は今後の調査に残すところが多いといえるだろう。

柿木遺跡については、弥生時代中期の溝状遺構1条と奈良時代のものと思われる溝状遺構5条が検出されたのみで、集落遺跡といえる穴江・塚田遺跡とはその性格を異にしている。遺跡としては、穴江・塚田遺跡と区別したものの、本来は穴江・塚田集落の外延を構成する同一の遺跡と捉えるべきであろう。

乙井手地区については、溝状遺構・豎穴遺構・ピットなどかなりの遺構が検出されたものの時期不明のものが多く遺跡としての評価は与えにくい。しかし、上面の削平が著しいことを考慮すれば、その内容は希薄とはいえ弥生時代中期の小規模な遺跡が存在した可能性は高いだろう。

遺構は発見されていないが穴江・塚田遺跡から縄文時代後期の土器及び石器なども出土し、その内容は豊富であった。従って縄文時代から平安時代末にもわたる穴江・塚田遺跡の調査成果は多大のものがある。ここではそれら成果と問題点について若干触れまとめたい。

(1) 縄文土器

遺構の存在は不明であるが、縄文時代後期の土器・石器が出土したことは、当該期の遺跡が極めて少ないこの地方にあって貴重な発見といえるだろう。今後の調査の進展によってはこの時期の集落跡等の発見が期待されよう。

(2) 弥生中期の集落

弥生時代中期の遺構としては、竪穴住居跡8軒・袋状竪穴24基、土壌5基が検出された。住居跡には円形のものと同方形のものがあり、方形のものが北東半部に、円形のは南半部に分布している。しかし、遺存したものでの結果かもしれない。とりわけ、柱穴のみを確認した南半部の円形住居跡については、削平が著しくその実態は不明である。従って、時期の確定も出来ない。

一方、方形の住居跡については、出土土器から中期前半に属し、6軒検出されている。13号22号住居跡がひとまわり大形の他は、小形の住居跡である。

一般に、穀物等の貯蔵穴とされる袋状竪穴は削平のため浅いものが多いが、24基発見されている。その分布も西端部に形成され、大きく3群に分かれる。時期は不明なものもあるが、中期前葉に属し、方形住居とは明らかに時期を異にしている。その意味では確定はしえないものの円形住居に付随する貯蔵穴と考えることもできるであろう。しかし、1号土壌は袋状竪穴と同じ中期前葉に比定できる遺構であり、29号住居跡に付随しない施設ならば、この時期の住居は今回の調査区域には存在しないことになる。

(3) 弥生後期～古墳初期の集落

弥生時代後期後半から古墳時代前期にわたる住居跡群が16軒と多く、穴江・塚田遺跡が最も栄えた時期といえるだろう。しかし、削平が著しく、また遺物の遺存が悪いこともあって、時期的に弥生時代末から古墳時代初期の間が断絶する集落のようにもみえる。残りの良い11号住居跡でさえ、壁高20cmと浅いことを考えれば、多数の住居が後世の削平により消失した可能性は高い。それは穴江地区の中央部から検出された夥しいピット群がそれを物語っているとみえる。

とりわけ、古墳時代初期の集落を囲む大規模な方形の環濠内からは、1軒の住居跡が検出されただけで、壁高も12cmと浅く、当初は多数の住居が群在していたものと思われる。従って、本来は継続した集落であったかもしれない。集落はまだ東側に拡大するので、今後の調査によりその間をうめる住居群が発見される可能性はあろう。

この時期の住居跡は、長方形プランのものが通有であるが、8・10号住居跡は胴張の方形

ランを呈し、また、幅広の周溝を有すなど他と異った住居跡である。切り合い関係や出土土器からしても一時期古い後期後半のものと思われ、支柱穴も4本柱で、2本柱が通有の長方形プランのベッドを有す住居跡とは構造的にも異っている。

また、後期末の住居跡と思われる10軒のうち、7軒（1・3・6・15・20・24・27号）が火災を受け、後続する住居が検出されていないことは、集落の断絶を示すかのようである。その火災の原因がなんであったかは知るよしもないが、古墳時代初期の時期まで集落は形成されなかったのかも知れない。だが、穴江・塚田遺跡の一部を調査しえた現段階で、それを想定することは困難といわざるをえない。

しかし、古墳時代初期の集落を囲む環濠内からは多量の古式土師器が検出され、その土師器が後述するごとく、異常なまでも多量の外来系土器が出土した事実は、単に、地域間交流の中で搬入された土器量ではなく、そこには人間の移住をも考えさせるものがある。また、在地の土器の混在もほとんどなく、畿内及びその周辺の土器群がその中心をなし、一部に山陰・山陽地方の影響を有すという特異な土器群を構成している。

それは、あたかもそれまで住んでいた地元民の集落が外来人によって駆逐されたかのような小説まがいの感を受ける。また、防禦的機能を有す方形環濠を集落のまわりにめぐらすという意味も、地元民との緊張関係にあった外来人にとって重要なことであったともいえ、一層我々の想像をたくましくさせてくれる。

このような想定はさておくとしても、大和朝廷が地方支配をしていく過程で、外来人の流入移住がかなりあったことは想像にかたくなく、今後、これら外来系遺物を具体的に比較・検討する中で検証されるべき問題であろう。近年、注目されている庄内系土器などの外来系土器群の出自の問題も含め、胎土分析等の作業が今後必要となろう。

(4) 古墳時代後期の集落

古墳時代後期6世紀後半の住居跡が3軒発見されている。一般に、この時期の住居跡には竈が付設されるが、いずれも存在しない住居跡で14号住居跡には炉を設けていて通有のものとなっている。この時期の集落規模についても、未調査地区を多く残すことと、削平が著しいため不明な点が多い。

(5) 奈良時代の掘立柱建物と馬見郷

奈良時代8世紀前半頃になると再び集落が形成されるようで、現在、掘立柱建物跡5棟、井戸状遺構1基、竪穴遺構1基、土塙2基が検出されている。とりわけ、1号建物は2間×5間と大形のもので、掘り方も大きくしっかりした建物である。また、1号に直交する建物である5号建物も2間×3間の大形のものである。2・3号建物は1間×2間の小形建物で、4号建

物は、2間×2間の中形の建物である。これら建物が同時に存在したとは思われず、主軸方位の異なる2・4号建物は時期を異にする可能性がある。これら建物に付随する施設としては1号井戸状遺構と2号竪穴遺構、4・10号土壙などがある。他に、塚田地区から検出された大溝と思われる溝状遺構や、柿木遺跡から検出された6条の溝状遺構も関連する遺構である。

出土遺物としては若干の破片資料のみであるが、10号土壙内から出土した焼塩壺といえる破片資料と、柿木遺跡B地区の1号溝内から出土した墨書文字の記された須恵器片の出土は、大形建物である1号建物をはじめとする掘立柱建物群の性格を知る上で貴重な資料であろう。

製塩土器であると同時に運搬容器でもあったとされる焼塩壺は、官衙跡や大寺院跡から出土する例が多く特に大宰府跡では観世音寺・学校院東辺部・日吉地区官衙・不丁地区官衙・右郭七坊・右郭十一条六坊・左郭十三条二坊・市の上遺跡など最も多い地域といわれている（註3）。他の出土地についても官道沿の「駅家」等の公的施設の推定地に主に分布するという限定される点が注目される。従って、古代の公的施設（官衙）や寺院跡などの分析に有効な力を発揮するようだとはいわれている（註4）。

今回、出土した2点の焼塩壺片についても、その背景を直に確定できないにしても、2間×5間の大形建物跡の存在や、柿木遺跡B地区の1号溝内から出土した墨書須恵器（第62図）と全く無関係とは思われない。

かって、嘉穂町大字椎木の上椎遺跡（註5）でも掘立柱建物跡と付随する土壙内から焼塩壺が出土していることを考えると、この地域に何等かの公的施設や寺院跡の存在もあながち否定できないであろう。

「和名抄」巻九によれば、筑前国嘉麻郡に、草壁・三緒・大村・綱分・馬見・碓井の六郷が置かれたとされ、刊本にはみえないが高山寺本には山田郷の名もみられる。まさに、上椎遺跡や穴江・塚田遺跡は、その馬見郷に属していたといえよう。とりわけ、穴江・塚田遺跡から発見された2間×5間の掘立柱建物は、床面積40.5㎡と大規模な建物である。並存したと思われる5号掘立柱建物も2間×3間のもので、床面積36.7㎡と大きい建物であり、小規模な3号建物も含めL字型に配置されているともいえる。このような掘立柱建物群は、一般集落とは考え難く、公的施設の観を強く抱かせるものである。墨書土器や池渠ともいえる大溝の存在、官衙・寺院・駅家等の公的施設等で主に出土するという焼塩壺の存在も、これら建物群の性格を暗示しているようである。

2間×5間の掘立柱建物については、滋賀県引川遺跡の報告で田中勝弘氏は倉庫の役割りを持つ可能性が強く、和泉監正税帳にみる「屋」を想定されている（註6）。本遺跡を即座にそれに比定しえないまでも、延喜式にみる「佐尉駅家」と推定される糸島郡二丈町竹戸遺跡（註7）や前原町波多江遺跡（註8）でも、主屋と思われる廂付の大規模な掘立柱建物に付随して2間×5間の建物が検出されている。これらの事例をみると、その位置・配置等からも倉庫的機能を有す建

物と理解できるようである。

これら建物群を公的機能を有す施設と考えるならば、馬見郷に係わる施設である可能性が高い。郷とは、律令制の地方行政単位の末端組織で、大化改新によって施行された国・郡・里制の里がのちに改称され郷となったものである。さらに、その下に2～3の里を置くという「郷里制」が施行されたのである。

五十戸をもって一郷とし、その長として郷長（官人）が置かれた。郷長の職掌は、戸令為里条により「掌檢校戸口、課殖農桑、禁察非違、催駟賦役」の4つの任務が定められていたという。その職責は極めて重いものであったようで、調庸雜徭等の諸負担の賦課など厳重な任務を課せられていた。

このような郷里制の実態については不分明な点が多く、それが自然村落を実態とするのか、或いは法的人為的編成を有すものかは議論の分かれるところともいわれている。しかし、郷長の職掌からいっても、また、後の弘仁十三年壬九月二十日太政官符（818）に記された徴税丁（郷別二人）・調長（二人）・服長（郷別一人）・庸米長（郷別一人）などの郷雜任の存在など、その実態はかなり役所的機能を有す公的施設を備えていた可能性は高いと思われる。また出雲風土記には8世紀前半にすでに正倉別院が郷に分置されていた記録がある。この風土記にみられる出雲国意宇郡山代郷正倉が、松江市団原遺跡にあたりと考えられている（註9）。一方越中国官倉納穀交替帳の意斐村項にみる不動倉にも、8世紀の中頃の納穀を記した例があり、意斐郷に分置された正倉別院の一部にあたりとみられている（註10）。まさに、本遺跡の2間×5間の建物が倉庫であるとするれば、正倉別院の可能性もあろう。

本遺跡が正倉別院であるのか、延暦十四年（795）閏七月十五日と同年九月十七日の二度にわたる太政官符に見る郷倉であるのかは別問題としても、郷長の4つの厳重な職掌を司る場所である施設は、一般集落とは明らかに異なるものであったろう。正倉別院がかなり実在していたゆえに郷倉設置の政策がとられた大きな要因であろうという山中敏史氏の指摘は重要である（註11）。また、正倉別院の成立が、「郡衙正倉の移築・分散によるのではなく、地理的・政治的条件により当初から別に設けられていたもの、収奪の強化・円滑化をはかって郷に新設されたもの、借屋・借倉の恒常的施設への転化・拡充によるもの」などの事情が想定されるという指摘も興味深い。

このような郷の実態を、即座に本遺跡の建物群に比定するのは、その内容において希薄かもしれないが、2間×5間で大規模な建物の存在、倉院の条件ともいえる防火及び排水を目的とした池渠と思われる大溝の存在、墨書土器、官衙・寺院・駅家等の公的施設等で主に出土するという焼塩壺の存在など、明らかに一般集落とは異なる。従って、馬見郷に係わる郷長の公的施設の可能性もあながち否定はできないだろう。また、今回調査した地区は遺跡の西端の一部を明らかにしえたのみであり、全容は未調査地区にあり、今後の調査の進展によりさらに多数

の建物群の存在が明らかにされる可能性が高い。

本遺跡の建物群の存続時期については、出土遺物から8世紀初頭から中頃と考えられるが、これとても未調査地区を多く残す現在、不明といわざるをえない。しかし、建物跡として確認していないものの、井戸状遺構には12世紀に下るものあり、存続した可能性はあるかもしれない。仮に、これら建物群の終焉が8世紀中頃だとすれば、その要因は延暦十四年の二度にわたる太政官符（795）に基く、相接した数郷ごとに設置するよう定められた郷倉の出現とかかわる問題かもしれない。また、郷司制による郷の支配体制が確立するといわれる11世紀頃には、嘉麻南郷司と長和三年（1014）尊勝院文書にみられ、嘉麻郡が南郷と北郷に分かれ、かつての六郷が統合されていることが推測される。その境界が碓井郷にあたり、現在稲築地方に比定されている大村郷と、馬見・宮吉付近に比定される馬見郷の3郷が嘉麻南郷となるようである。

だが、その間の8世紀末から10世紀後半までの間が、いわゆる律令制の崩壊過程にあたり、徴税領域が郷単位に細分化され、郷に対する支配体制がより厳しくなる時期でもある。その間の郷の変質過程を明らかにしていく上で、郷の実態把握が今後必要となる課題であろう。郷に係わる施設の可能性を考えたこの仮定も、全く直接的根拠のないものであるが、これら考古学事象の一評価として位置付け今後の課題としていきたい。また、過大評価という批判を受けるかもしれないが、郷の実態把握への一試論となれば幸いである。

一方、本遺跡の実態は、いまだ多くの未調査地区を残すため、今後の調査の進展によってはこれらの問題も解決される日は近いように思われる。

（6）平安時代の墓地

12世紀前半から12世紀後半になるとこの地区は墓地となるようで、3基の土壌墓が検出されている。1号土壌墓内からは土師器皿3、杯1と青磁碗1が出土した。青磁碗は内面に片切彫りの草花文を配した完形の逸品で、中国龍泉窯系の青磁である。

以上が穴江・塚田遺跡及び柿木遺跡の調査の成果と問題点である。その結果は、今後の調査の進展に期す点が多いものの多くの成果を得たといえよう。次に、弥生時代後期から古墳時代前期の土器群の変遷について触れ、これまで不分明であった嘉穂地方の土器編年及びその背景について若干述べてみたい。

2. 嘉穂地方における弥生後期から古墳前期の土器群について

嘉穂地方におけるこの時期の土器群については、これまで良好な一括資料もなく編年研究はなされてこなかった。しかし、ここ数年の嘉穂町における圃場整備事業に伴う発掘調査で、その間の良好な一括資料を得たことは大きな成果である。一部、資料的に不足する時期はあるものの、周辺の断片的な資料も加え、この地域の土器群の変遷について一応の整理をしておきた

い。なお、変遷の資料として嘉穂郡穂波町スタレ遺跡（註12）と飯塚市赤坂古墳（註13）の資料を使用した。スタレ遺跡の資料は県文化課浜田信也氏、赤坂古墳の資料は飯塚市歴史資料館嶋田光一氏より提供を得た。また、佐々木隆彦氏からも有益な助言を得た。記して謝意を表したい。

I 期 上椎遺跡第2地点5号住居跡出土の資料(註14)がそれにあたり、ほとんどの器種が揃っている。壺には大中小がありバラエティーに富んでいる。複合口縁のもの(1)、単口縁のもの(2・3・⑩)、単口縁で端部を上下に拡張した大形壺(5)、球形の胴部にく字状口縁がつく甕タイプの壺(7~10)、広口の小形壺(44・45・47)などがある。複合口縁の壺は、いわゆる袋状口縁の伝統を引くもので、複合部の外方への張り出しが強く外反気味に立ち上るタイプである。単口縁の壺には、立ち気味に外反する細頸のものと広頸のものがあり、頸部下に三角凸帯を付すものがある。頸部下と胴部に凸帯を有す大形壺は、これまで類例もなくこの地方独得の壺かもしれない。一見甕とみまがう壺がある。扁球形の胴部に強くしまった頸部がつくもので、口縁部はく字状に強く外反するタイプである。胴部内面刷毛、外面上半ナデ、下半をヘラ削りした作りの良い壺で、出自は不明だが胎土・焼成とも他と異なり外来系土器を思わせる。いわゆる広口の小形壺は、47のような丸底のものもあるが、丸味を持ちつつも平底で、他の壺や甕も同様な傾向を有している(第68図)。

甕には大中小があり、40・42・43のような脚台付の甕もある。甕はいわゆるく字状口縁の長胴のもので、胴部内外を刷毛で仕上げたものが最も多く、内面刷毛のあとナデたもの、刷毛とナデを併用したもの、胴部外面下半をヘラ削りしたもの、内外ともナデで仕上げたものなどがある。若干丸味を有し小さいものもあるが、底部は明瞭な平底である。

鉢にはく字状に大きく外反するもの(48)と、内弯気味に立ち上がる単口縁のものがあるが資料的には少く不明である。

甑は単口縁の漏斗状のもので小さい平底に一孔を有すものである。

椀は底部が若干丸味を有す小さいものもあるが、他の器種と同様明らかに平底をなしている。内外ともナデで仕上げたものと、外面タタキと刷毛、内面刷毛とナデのものがある。

高杯には3種あり、口縁部の立ち上がりはまだ短かく外反するタイプ(57・58)、外来系と思われる内弯気味に立ち上がるもの(65)と内弯する椀形の高杯がある。III期の比し、短かく立ち気味の口縁が特色である。

器台には2つのタイプがあり、いわゆる通有の筒状器台(67~80)と東九州からの外来系と思われる器受部に逆台形状の切り込みをもつ器台(71)がある。調整は刷毛のあとナデで仕上げている。

支脚は上面が傾斜する杓形状を呈すもので、上面中央に1つの円孔があくものとあかないものがある。調整は内外ともナデ仕上げ、一部にタタキ痕を残すものがある。

II 期 この時期の土器群は資料が少なく不明であるが、穴江・塚田遺跡3号・20号・27

号住居跡出土の一括土器がその中心をなす土器群である。

壺には袋状口縁の系譜と思われる複合口縁の壺（⑮・⑳）と、短頸の直口壺（㉑・㉒・㉓）があり、大小がある。㉑の底部は平底であるものの丸味を増して、㉓は明瞭な丸底を呈している。

甕は、いわゆる長胴のく字状口縁のもの（㉔・㉕・㉖）と脚台付のもの（㉗）がある。また長胴になるか不明だが（㉘）のような肩の張った甕もあり、I期の⑮と同系のタイプかもしれない。調査は外面刷毛のものと粗いタタキのものがあり、下半はナデで仕上げている。内面はナデのものと刷毛とナデを併用しているものがある。I期の甕に比し、底部は平底のもの、丸味が増し、レンズ状を呈すものが多く、口縁部の外反も立ち気味になる特色を持っている。

鉢はく字状口縁の広口の鉢で、調整は底部付近を刷毛、他はナデで仕上げている。

高杯には2種ある。図示していないが57・58と同系の高杯片が3号住居跡にあり、口縁部の外反と長さはI期とII期の中間ともいえるもので、他に㉙のような特異な椀形の杯部を有す高杯もある。

III 期 上椎遺跡第3地点12号住居跡出土の一括資料（註15）がそれにあたる。

壺には袋状口縁の系譜に属す複合口縁のもの（1）、直口する短頸壺と広口の台付壺がある。

甕には大中小があり、長胴のく字状口縁のもの（4～8）と、いわゆる伝統的のV様式ともいえるような甕がある。I・II期の甕に比べ、底部は丸味を増し、尖底ともいえる6のようなもの、明らかに丸底といえる5のようなものもある。しかし、7のような小さな底部であるものの、明らかに平底のものもあり、図示していないが他に7より底径の大きい平底の破片が5～6点ある。4のような一見丸底とも思える小さい平底気味のものもある。3は小さい平底を有し、卵形の胴部に強く短かいく字状口縁がつく甕である。外面粗いタタキを施し、胴中位を一部刷毛調整している。内面は内底部付近をナデ、他は刷毛で仕上げ、口縁部内外はヨコナデしている。長胴の甕はI・II期のものより、より尖底化・丸底化が進行し、平底でも小さいものが多くなる時期といえよう。

鉢には大きく外反する広口のもの（10・12）と内弯するもの（13）があり、13は明瞭な平底で、12は丸味を有す平底である。

高杯はI期の58・59の系譜を引くタイプで、それに比べより口縁部の外反が強くなり長くなったものである。調整は杯外底部と脚部内面刷毛の他は、ヘラ磨きで仕上げた作りの良い土器である。

IV 期 方形の環濠状遺構内から出土した土器群がその主体をなし、ほとんどの器種が揃っている。すでに前記したように、この土器群には在地系土器が全くといえるほど含まれない外来系土器で構成された特異な土器群ともいえる。従って、III期とIV期の変遷には奇異な感じさえする。しかし、他地域の在地系土器と外来系土器との組み合わせや変遷を考えると継続する土器群と把

えることが出来るであろう。

壺には大中小があり、いわゆる袋状口縁のもの(45)、袋状口縁の系譜をひく複合口縁の壺で、肩部に櫛描き波状文を有すもの(46)、いわゆる複合口縁のもの(33・47~50・52)、直口気味に外反する長目の単口縁の壺(51・56・58)、短頸で口縁部の外反が大きく強いもの(57)、いわゆる小形丸底壺ともいえるもの(55・59~62)、広口の小形壺(63・4)などがある。①のような頸部に円形の貼付文を配し、頸部下に三角凸帯を付し端部に刻目を施したものや、竹管文を施したもの(48・49)、③のような櫛描き波状文と竹管文で飾った作りのよい畿内系の土器がある。また、⑤②のような口縁部外面に凹線文を施した山陰系とも思われる土器、⑤⑦のような瀬戸内系を思わせるものもある。

甕には、IV期の3のような畿内の伝統的Ⅴ様式ともいえる系譜をひく甕(64)と布留式の範疇で把握すべきもの(16・65~68・71・72)がある。

⑥4は胴部外面粗いタタキ、内面刷毛、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。図示してないが同一個体と思われる胴部下半の資料があり、それによれば、胴部はかなり球形を呈し、底部は丸底か平底でも丸底に近い小さいものようである。また、畿内Ⅴ様式の甕の普遍的な成形技法ともいえる分割成形技法(註16)の接ぎ目の痕跡を明瞭に残している。

布留式の範疇で把握される甕は、肩の張った倒卵形の胴部に、内弯気味に強く外反したく字状口縁のもので、端部をつまみ上げ気味に仕上げたもの(68)、端部を外方につまみ出し気味に仕上げたもの(71・72)、細く仕上げたもの(16・65・66)がある。調整は器面の風化が著しく不明な点を残すが、胴部外面刷毛、内面へら削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。また、布留式甕の特色ともいえる肩部外面の横刷毛がみられ、内面のへら削りも頸部より一段下った所から行われている。地域は異なるが、次の時期の土器群と考える那珂川町地余遺跡3号・5号住居跡出土土器群(註17)にみられる内弯度の強いつまみ出し気味(内傾)に仕上げた甕(第4図1)に比べ、直線的ともいえる甕である。

この種の土器は、口縁端部の形状に小差は存在するものの、志摩町御床松原遺跡(註18)・前原町三雲遺跡(註19)・福岡市西新町遺跡(註20)で庄内式系土器と共伴する最古の布留式土器といえるもので、両者が共存する一時期を構成するものとして位置付けられるようである。このような事象は北部九州一帯に少なからず存在する傾向のようで、畿内地方でも一部ですでに触れられていることである。(註21)

鉢は1点と少ないが複合口縁状ともいえる大形のもの(74)である。

高杯には、杯部・裾部とも有段状をなす柱状部が充実のもの(88~90)、柱状部が極めて短かく裾部が大きく低平に開くもの(94)、柱状部が短かく充実で、ラッパ状に開くもの(82・83)、杯部が深く柱状部がスマートでラッパ状に開くもの(79・80)、杯部から直接内弯気味に開くもの(91・92)、脚部が低く脚台付杯ともいえるもの(95~97)がある。99のような台

付杯ともいえる山陰系を思わせる土器もある。いずれも庄内系土器とされる一群の高杯の特色を有している。

器台は㊸のような小形のもので、器受部端部をつまみ上げ気味にしている。脚部は八の字状に大きく開くタイプである。

以上、上椎遺跡、穴江・塚田遺跡出土土器群を中心として、この地方の弥生後期後半から古墳時代初期の土器群の変遷過程を整理してきた。しかし、その間の変遷にはいまだ欠落した器種も多く、今後の資料の増加により多くの補足・改変が必要となる。

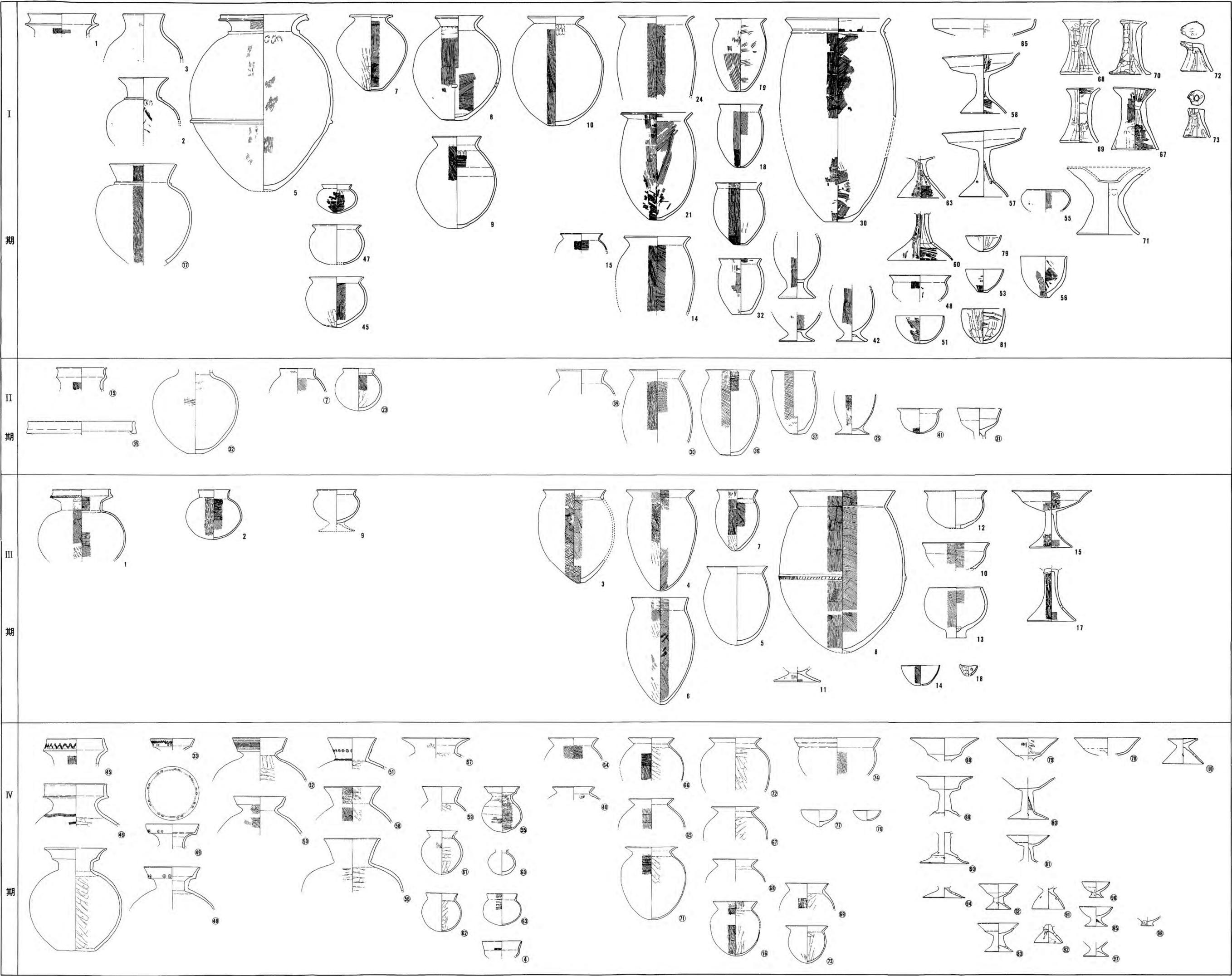
II期とした土器群は、弥生時代後期終末と考えるもので、かつて筆著が行った弥生後期の土器群変遷の後期IV期(註22)に比定できる。

III期とした土器群は、II期の土器群に比し、より丸底化・尖底化が進行した土器群といえるもので、高杯⑮にみられるような杯部の外反と長さがより拡大する時期である。しかし、丸底尖底といえども、小さいながらもまだ平底のものが残存する土器群の特色をもっている。また外来系土器と思われる伝統的のV様式(畿内系)的な甕の出現も注目すべき点である。現在、古式といえる庄内式系土器がこれら在地系土器と共存する良好な一括土器はないが春日市柏田遺跡8号住居跡出土土器及び1・2号長方形土壇出土土器(註23)がほぼこの時期に比定でき、古式の庄内式系土器が共存する時期と思われる。また、前原町サキノ1号住居跡出土土器群(註24)については、一部この時期に属す土器を含みつつも、明らかに布留式土器といえる甕(第9図7・8)を有するなどすでに後出するIV期の土器群の内容を持っている。高杯においてもIII期のものに比し、口縁部の外反が強く長いことも新しい様相である。伴出する庄内式系甕(第9図6)については、形態的には古式の様相を残すが、内面のヘラ削りが頸部よりやや下った所から行われるなど後出的な手法を用いている。この土器群については、一部III期に属しつつも、その主体はIV期に属す土器群ということができよう。

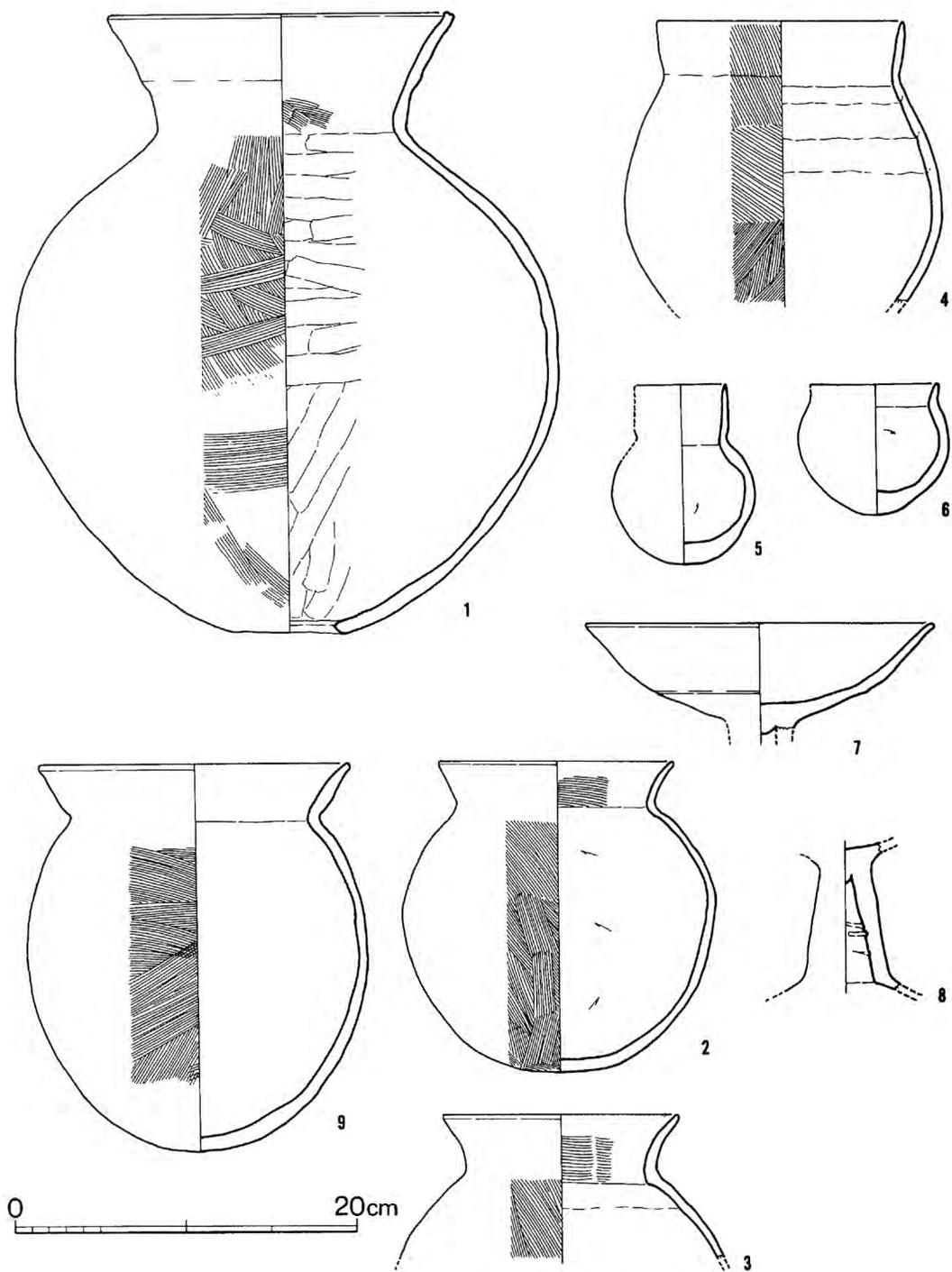
他に比較するとすれば、甘木市小田道遺跡28号・49号住居跡、土器溜出土土器群(註25)、福岡市西新町遺跡A11号・D3号・D4号・G1号住居跡出土土器群(註26)などがほぼ比定できるであろう。

IV期とした土器群は、穴江・塚田遺跡環濠内出土の土器群が中心をなし、前記したように特異ともいえる外来系土器で構成されたものである。従って、III期とIV期の変遷は奇異な観を与えてしまう。しかし、他地域の外来系土器と在地系土器の共伴関係を検討するとほぼ連続する土器群と位置付けることが可能である。

IV期の土器群は、壺・高杯・器台等に庄内式系土器群の様相をもつものの、甕には明らかに布留式土器の古式の様相をもっている。かつて指摘(註27)したように、北部九州で出土する庄内式系甕の大半が布留古式の甕と共伴することは北部九州各地でみられる事象のようである。



第68図 嘉穂地方における弥生後期後半から古墳前期の土器群変遷図(土器1/8)



第 69 図 赤坂古墳(1) スダレ遺跡 (2~8) 出土土器実測図 (1/4)

これまでこのような事象を北部九州という地理位置からの時間的偏差と考えていたが、最近の近畿地方の調査でも、同時共存する事象が各所で指摘され、一時期の設定が必要な時期に来ているといえる。その意味では畿内と北部九州の土器群の構成及び時間的差異はほとんどないともいえるだろう。従って、これら土器群の出自の問題を含めて、胎土分析等の作業が今後重要な課題である。

まさに、IV期の土器群は出自の異なる土器が共存する時期といえ、庄内式系土器と布留古式の甕とが共存する時期である。その典型が志摩町御床松原遺跡38号住居跡出土土器、福岡市西新町遺跡D 8号・F 1号住居跡出土土器である。一部III期のもをもつ三雲遺跡サキゾノ I - 1・1号住居跡出土土器もこの時期の古い時期に比定できるであろう。

ここでいう布留古式の甕と呼ぶのは御床松原38号住居跡出土の甕（第56図 272）であり、後続するV期の甕に比べ、内彎度の弱い口縁部を有す土器である。その典型は甘木市神蔵古墳出土土器（註28）（第20図）、吉井町塚堂遺跡E地区6号住居跡出土土器（註29）（第16・17図）といえるだろう。

従って、出自の異なる外来系土器の流入は、地域的にも、各遺跡でもそれぞれ異なった構成をもつ可能性があり、穴江・塚田遺跡のような庄内系甕が相伴しない同時期の遺跡が今後かなり発見されるであろう。

他に、この時期に比定できる他地域の遺跡を上げるとすれば、小田道遺跡30号・43号住居跡、西新町遺跡A 1号・D 1号・D11号住居跡出土土器群などがある。

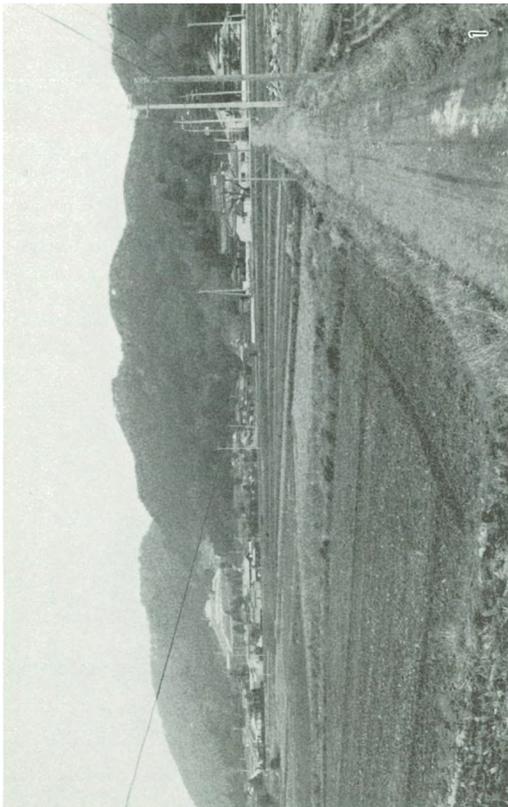
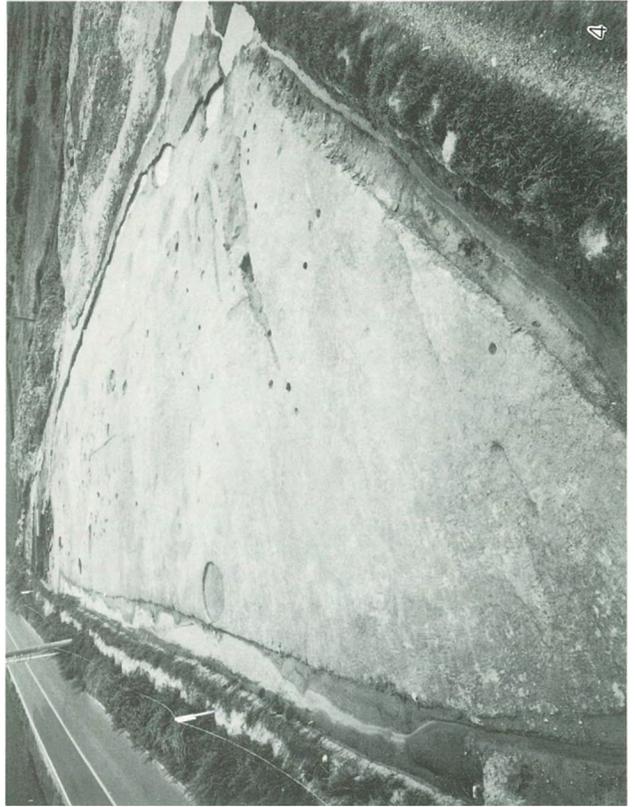
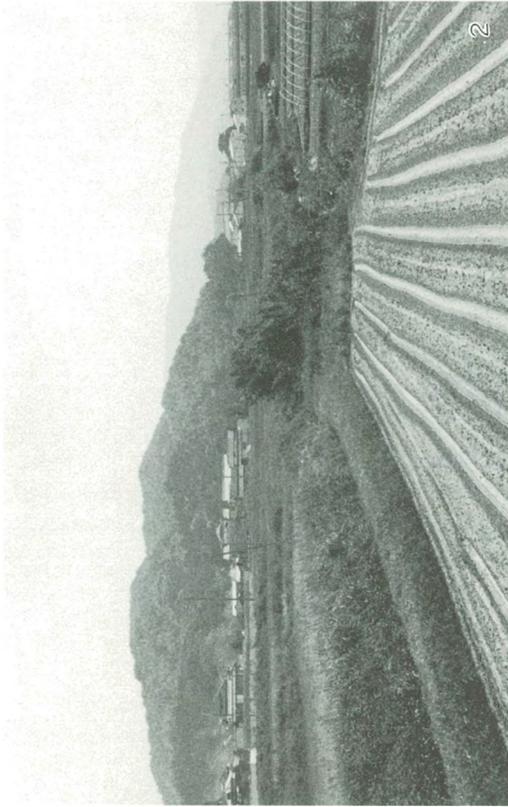
一方、IV期に後続する土器群については資料的に不足するため不明な点は多いが、飯塚市赤坂古墳出土土器（第68図1）をV期～VI期に、穂波町スダレ遺跡出土土器はVII期にほぼ比定できるであろう。

- 註1 橋口達也・川述昭人「野間窯跡群」『岡垣バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集 福岡県教育委員会 1982
- 2 森田勉「焼塩壺考」『大宰府古文化論叢』下巻 吉川弘文館 1983
- 3 註2に同じ
- 4 註2に同じ
- 5 井上裕弘「上椎遺跡」『嘉穂町文化財報告書』第3集 嘉穂町教育委員会 1982
- 6 田中勝弘「弘川遺跡発掘調査報告書—古代郷倉跡—」滋賀県教育委員会 1979
- 7 佐々木隆彦他「竹戸遺跡」『二丈町文化財調査報告書』第1集 二丈町教育委員会 1979
馬田弘稔「竹戸遺跡」『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会 1980
- 8 橋口達也・馬田弘稔他「波多江遺跡」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第6集 福岡県教育委員会 1982
- 9 島根県教育委員会「団原遺跡発掘調査概報 I・II」 1979・1980

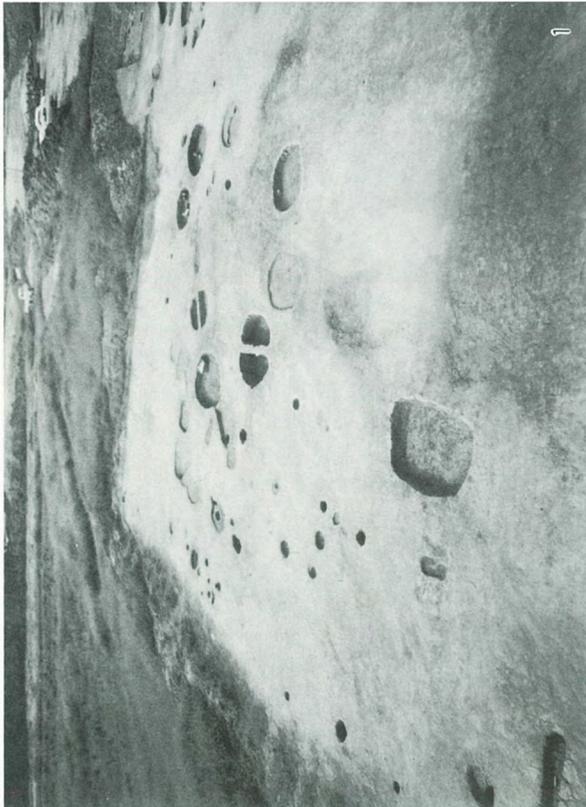
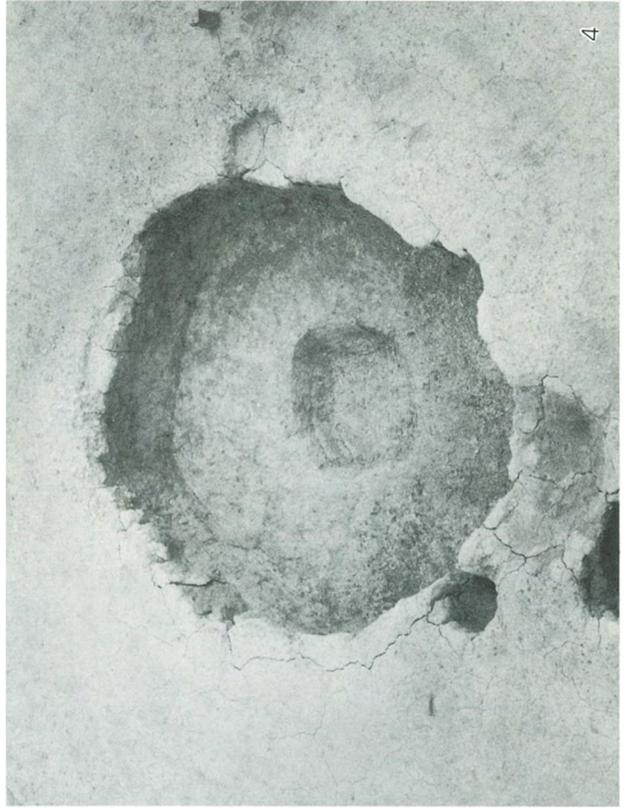
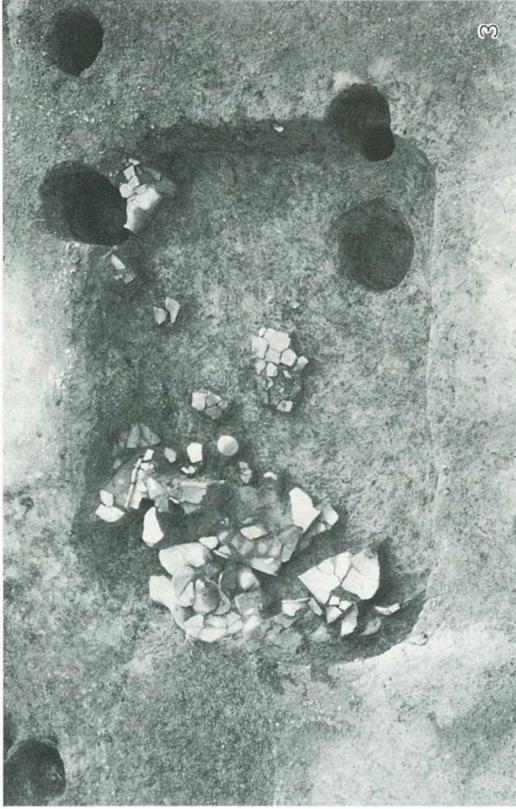
- 10 山中敏史「遺跡からみた郡衙の構造」『日本古代の都城と国家』 塙書房 1984
- 11 註10に同じ
- 12 浜田信也「スダレ遺跡」『八木山バイパス関係埋蔵文化財調査報告』 福岡県教育委員会 1983
- 13 嶋田光一「赤坂遺跡」『立岩周辺遺跡発掘調査報告書』第5集 飯塚市教育委員会 1984
- 14 註5に同じ
- 15 註5に同じ
- 16 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻4号 考古学研究会 1974
- 17 田平徳栄「地余遺跡」『今光遺跡・地余遺跡』 東急不動産 1980
- 18 井上裕弘・洞龍二郎他「御床松原遺跡」『志摩町文化財調査報告書』第3集 志摩町教育委員会 1983
- 19 柳田康雄他「三雲遺跡Ⅲ」『福岡県文化財調査報告書』第63集 福岡県教育委員会 1982
- 20 折尾学他「西新町遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第79集 1982
- 21 森田克行・橋本久和「安満遺跡発掘調査報告書—9地区の調査—」『高槻市文化財調査報告書』第10冊 高槻市教育委員会 1977
米田敏幸「八尾市中田1丁目39出土土器の胎土について」『埋蔵文化財研究会第15回研究集会発表要旨』1984
- 22 井上裕弘「金山遺跡」『夜須町文化財調査報告書』第4集 夜須町教育委員会 1981
- 23 井上裕弘「柏田遺跡」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第4集下巻 福岡県教育委員会 1977
- 24 註19に同じ
- 25 副島邦弘「小田道遺跡」『甘木市文化財調査報告書』第8集 甘木市教育委員会 1981
- 26 註20に同じ
- 27 註18に同じ
- 28 木下修他「神蔵古墳」『甘木市文化財調査報告』第3集 甘木市教育委員会 1978
- 29 副島邦弘・佐々木隆彦「塚堂遺跡Ⅲ—E地区—」『浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第3集 福岡県教育委員会 1984

図

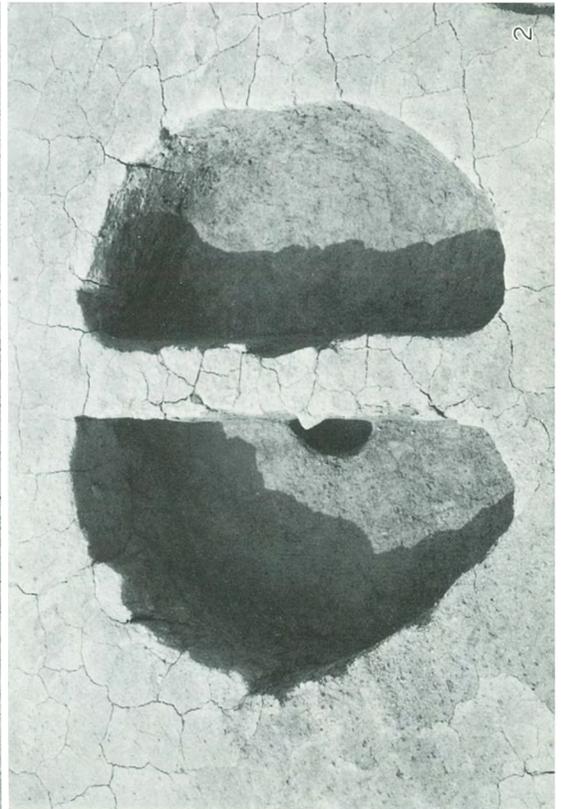
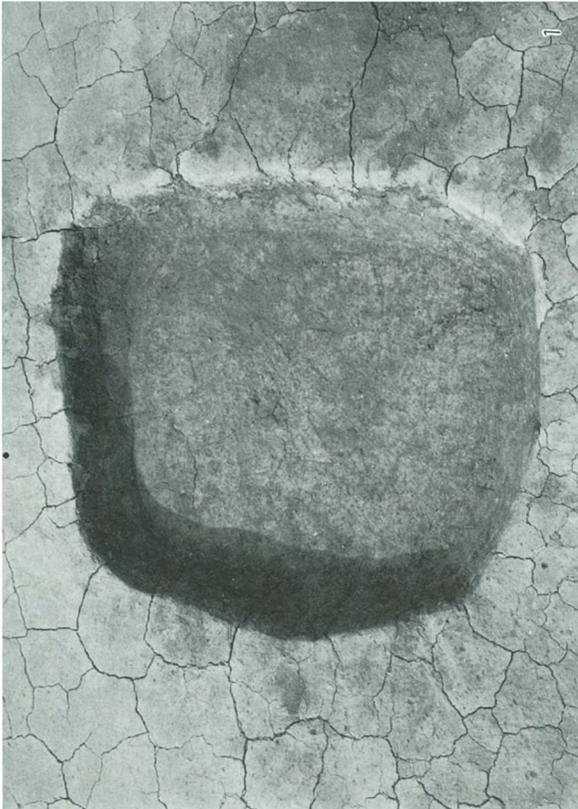
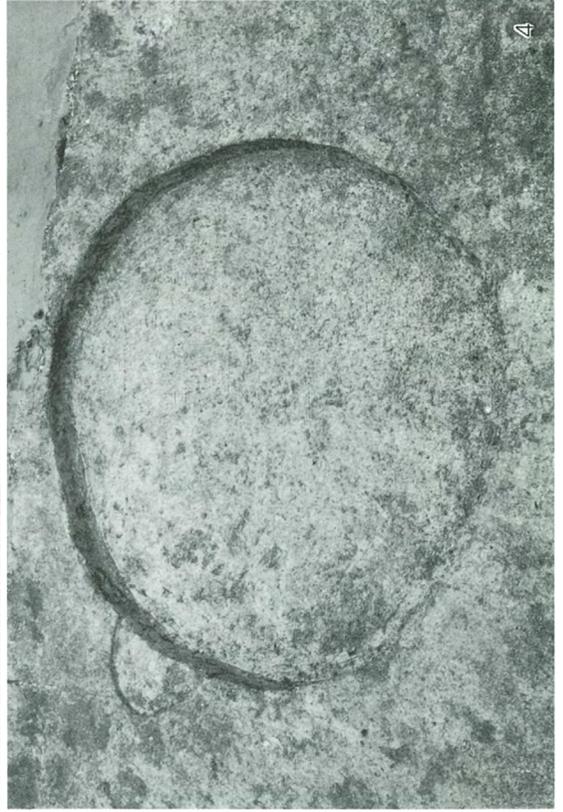
版



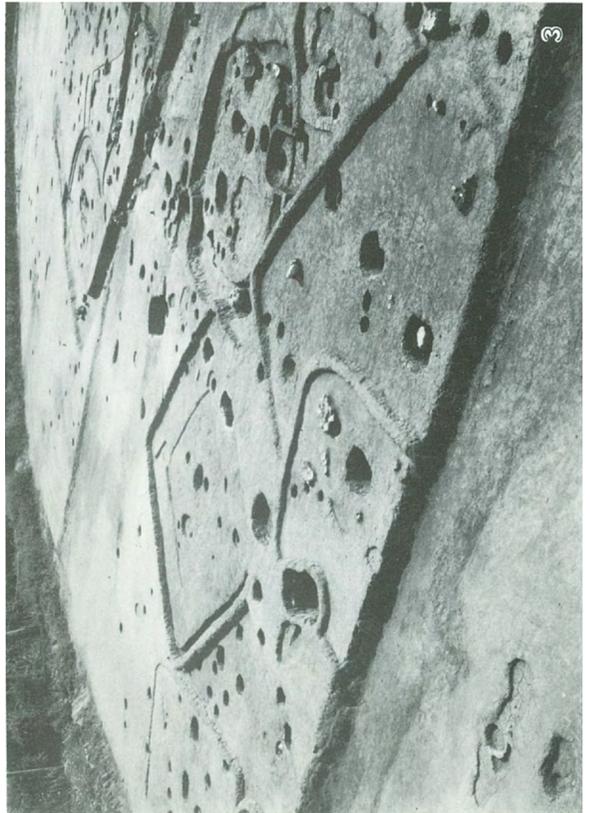
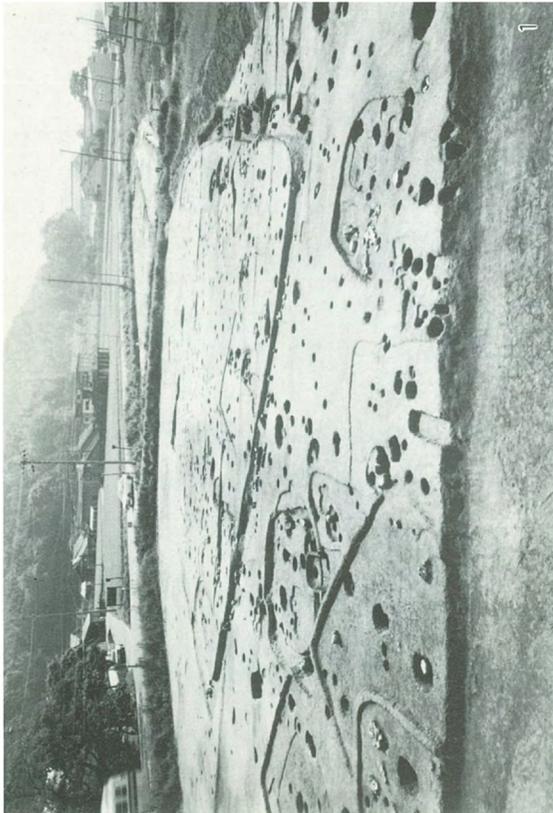
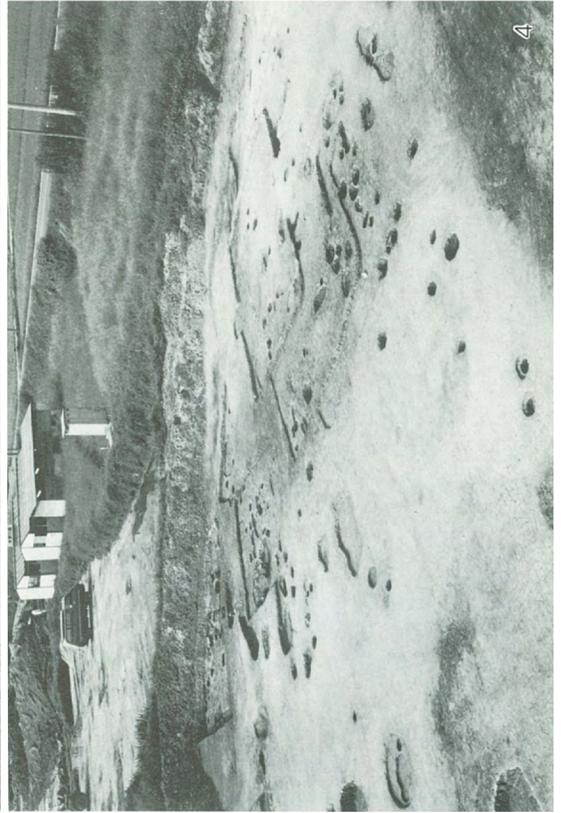
1. 穴江・塚田、柿木遺跡群遠景（西から） 2. 穴江・塚田遺跡、柿木遺跡群発掘前（北から）
3. 穴江・塚田遺跡発掘区北半（南から） 4. 穴江・塚田遺跡発掘区南半（北から）



1. 袋状竖穴群 2. 12·13·14号袋状竖穴 3. 8号袋状竖穴 4. 10号袋状竖穴



1. 11号袋状竖穴 2. 12号袋状竖穴 3. 14号袋状竖穴 4. 23号袋状竖穴

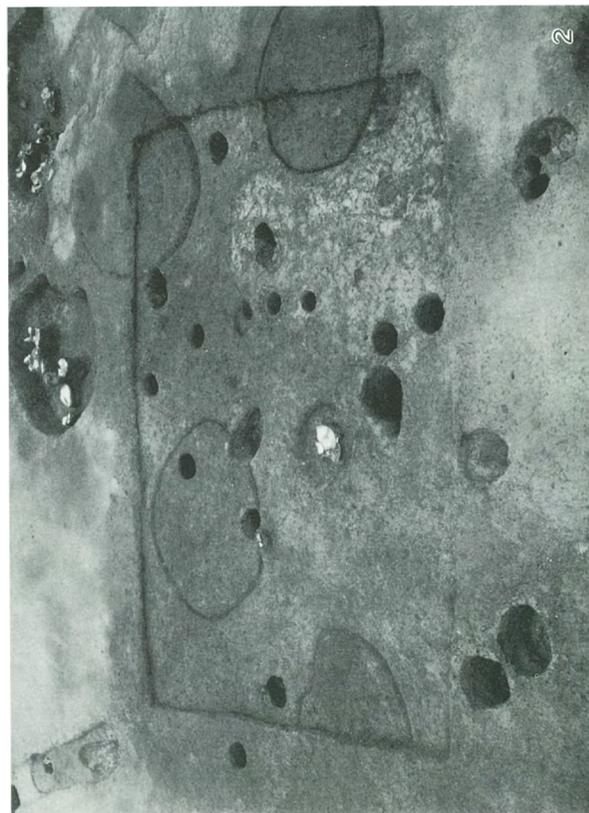
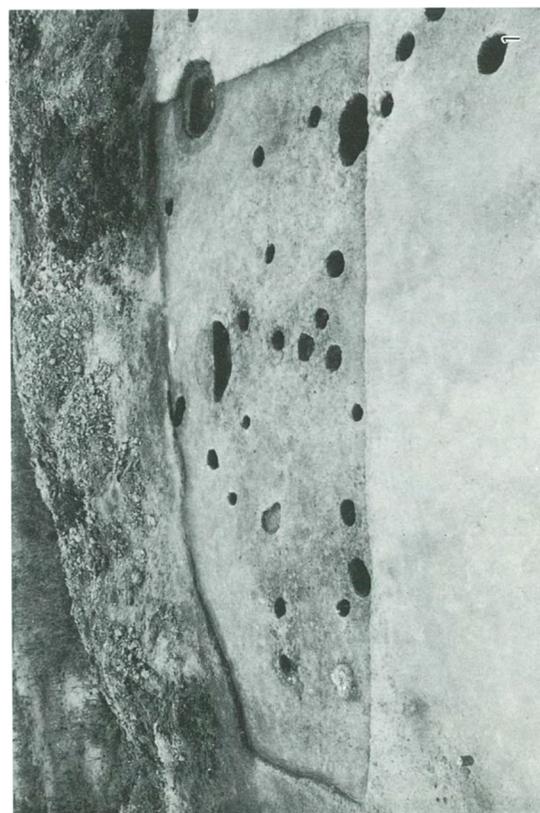
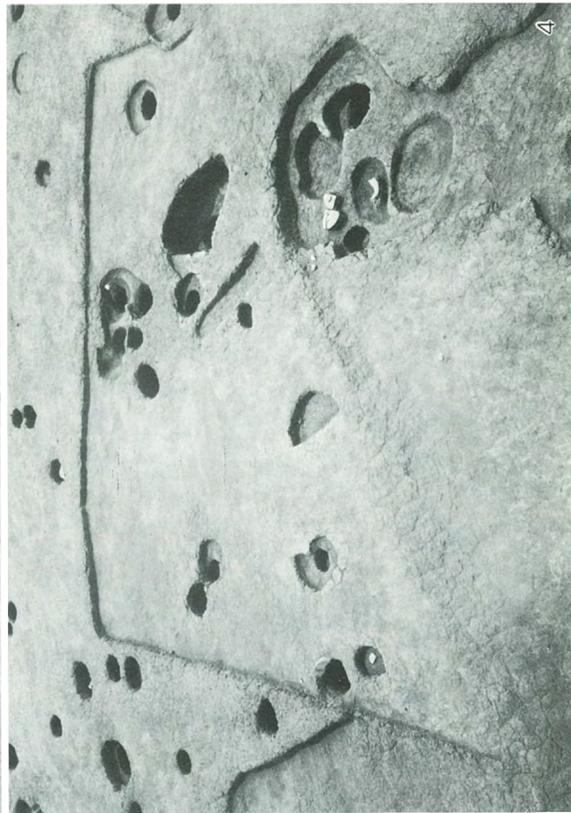


1. 方形環濠と住居跡群

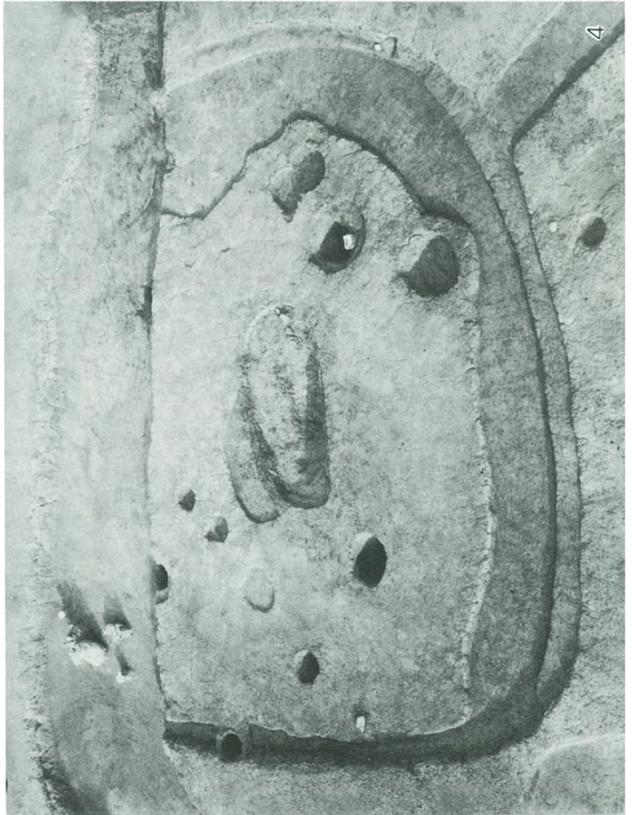
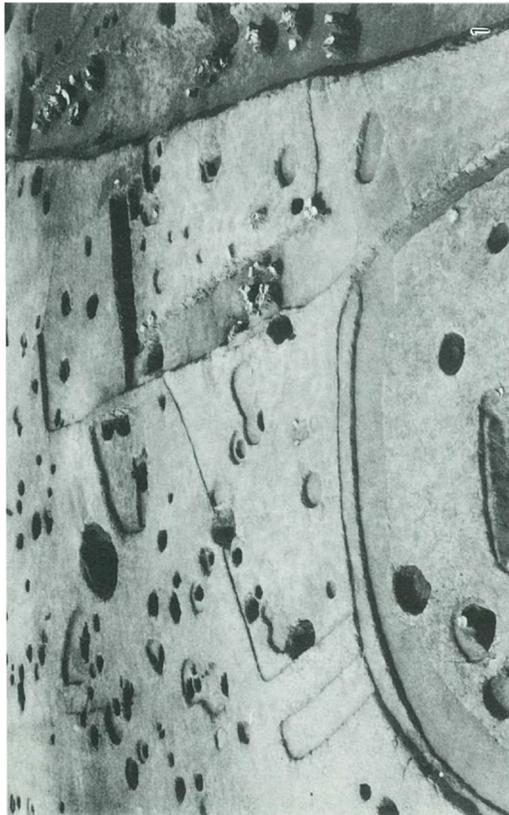
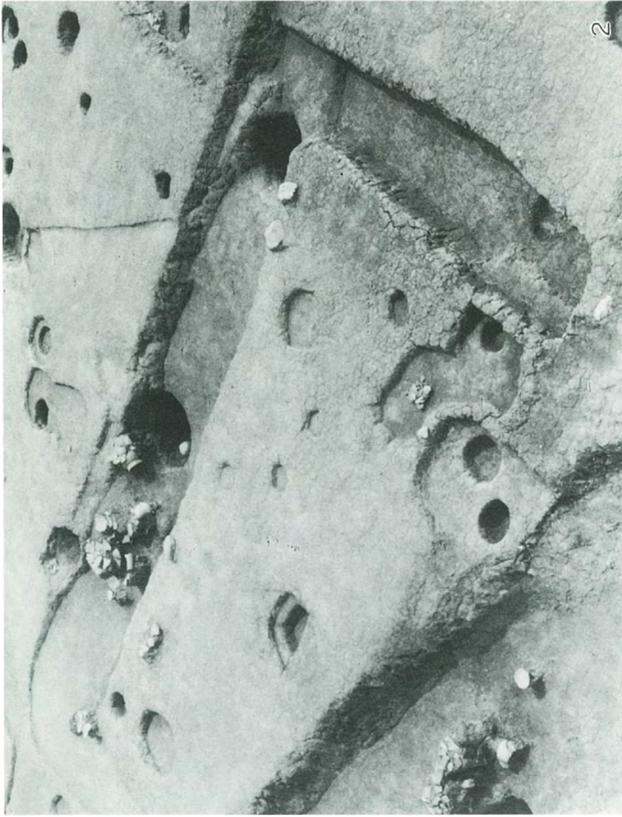
2. 10・15～18号住居跡群

3. 10～15号住居跡群

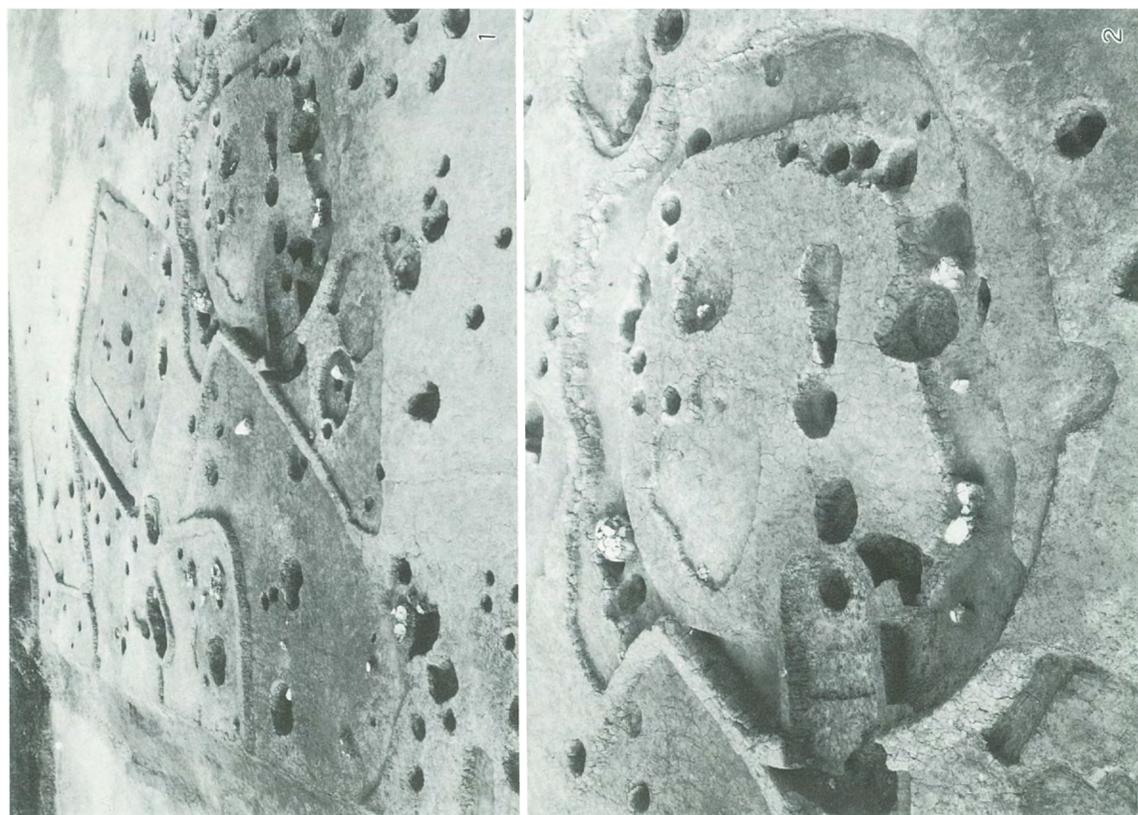
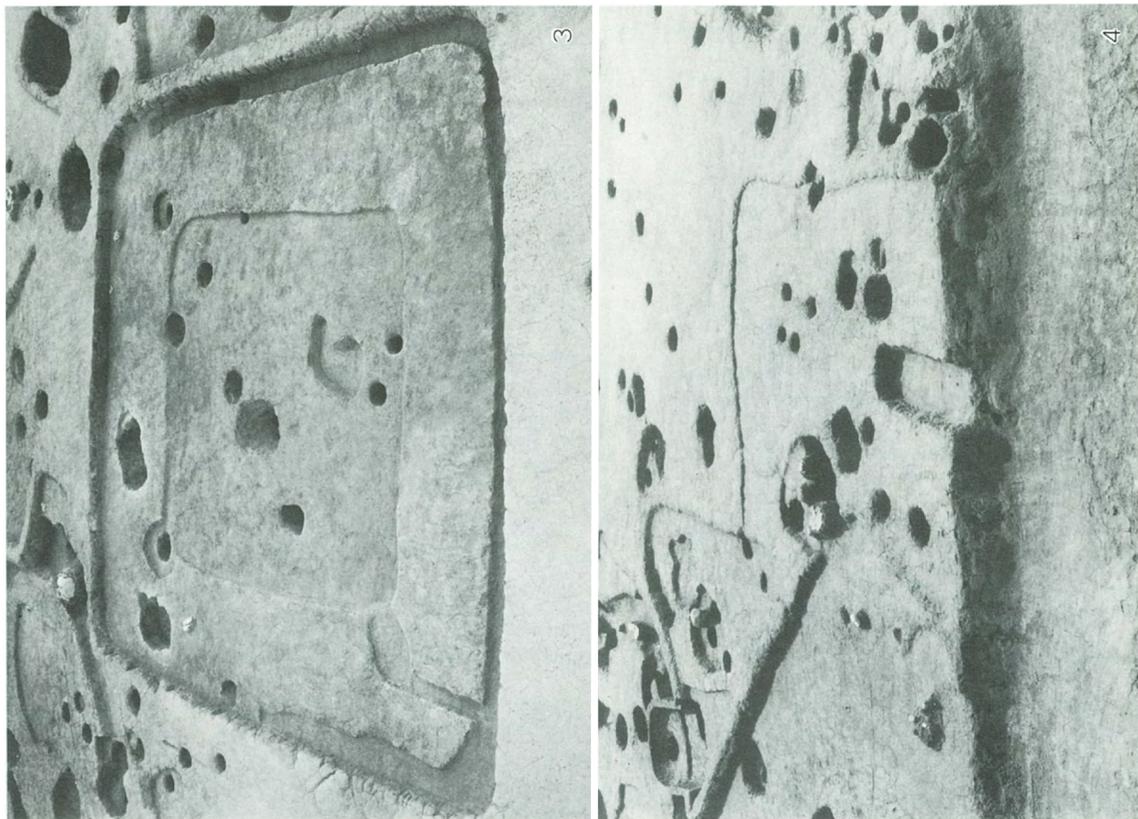
4. 22～27号住居跡群



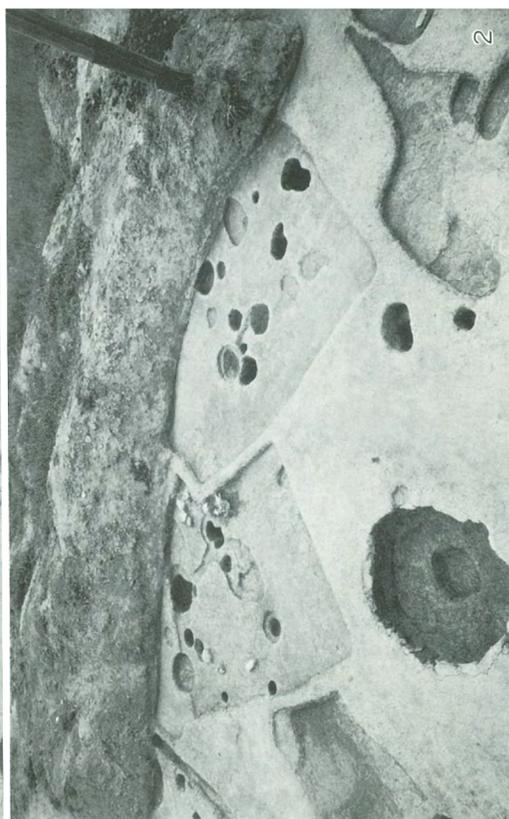
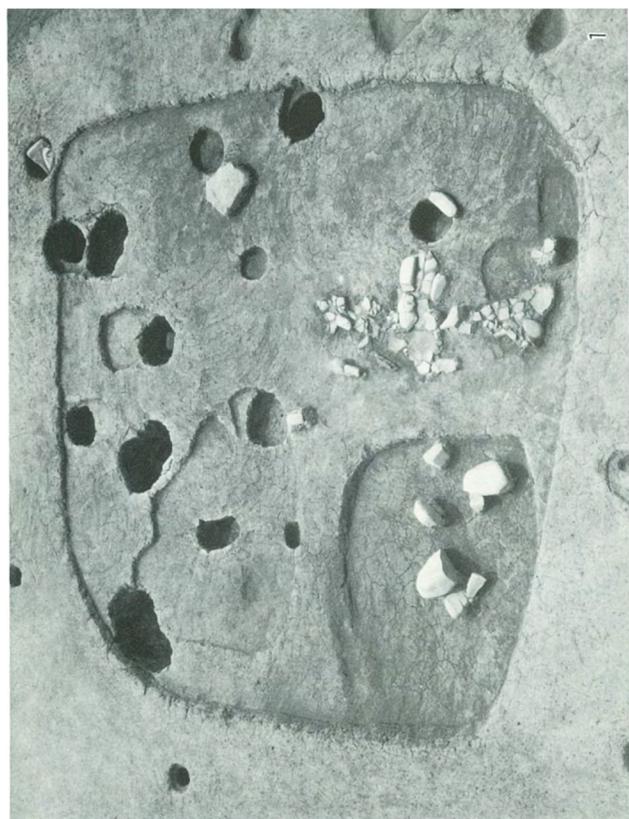
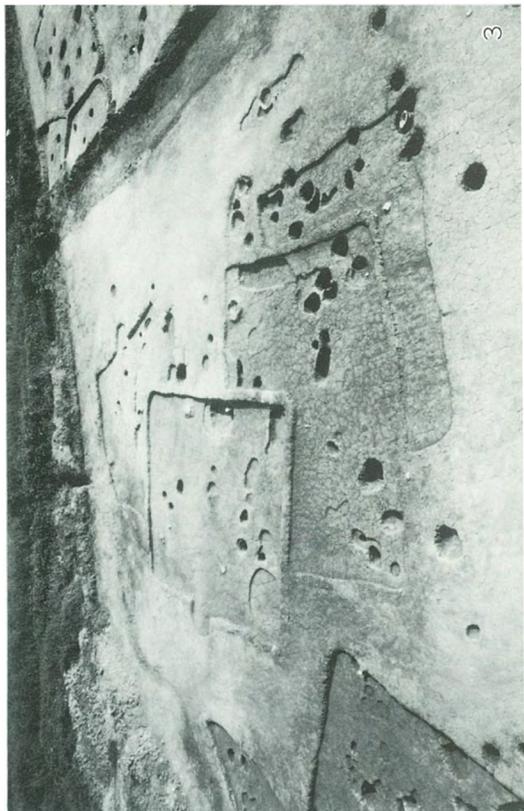
1. 1号住居跡 2. 2号住居跡 3. 3号住居跡 4. 4号住居跡



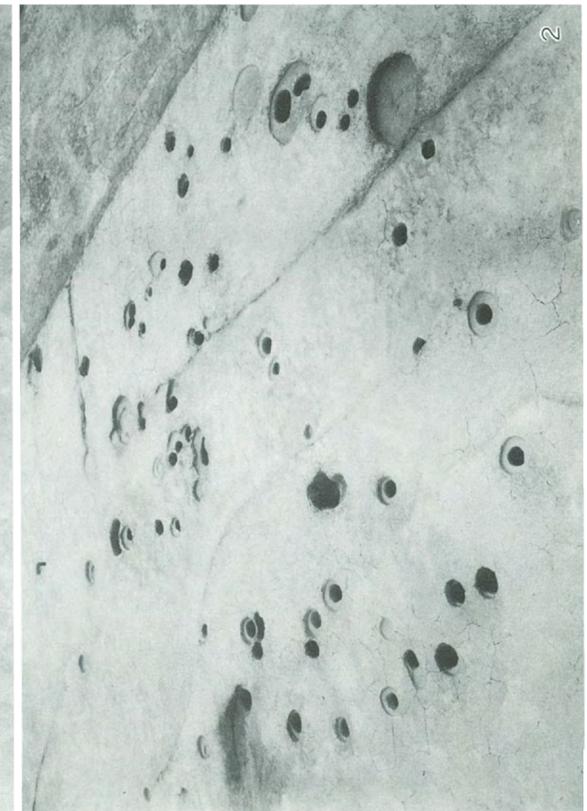
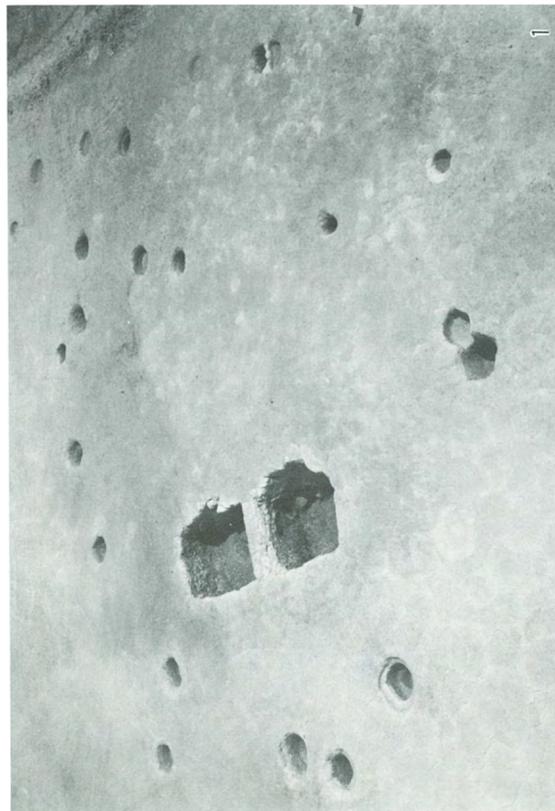
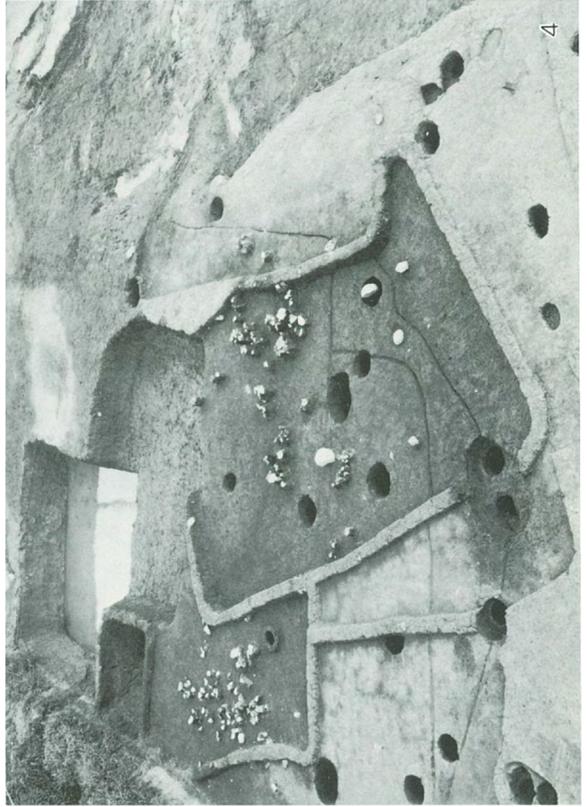
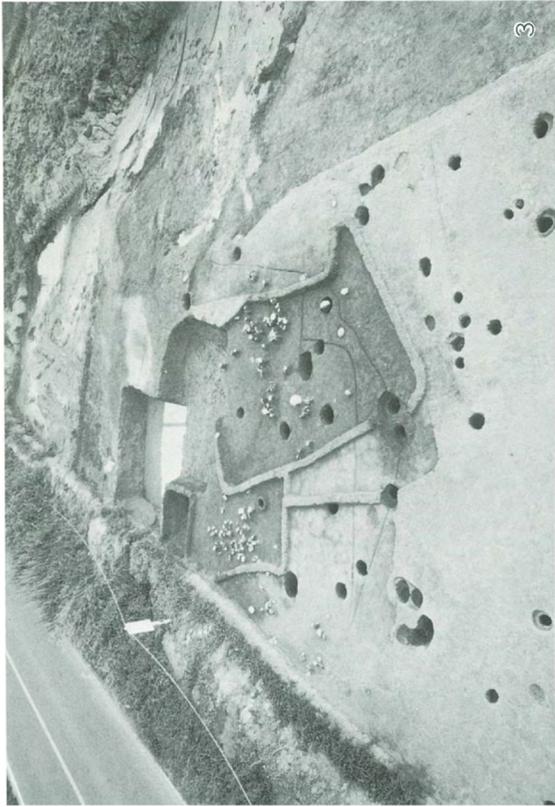
1. 5~7号住居跡群 2. 6号住居跡 3. 6号住居跡内土器出土状態 4. 8号住居跡



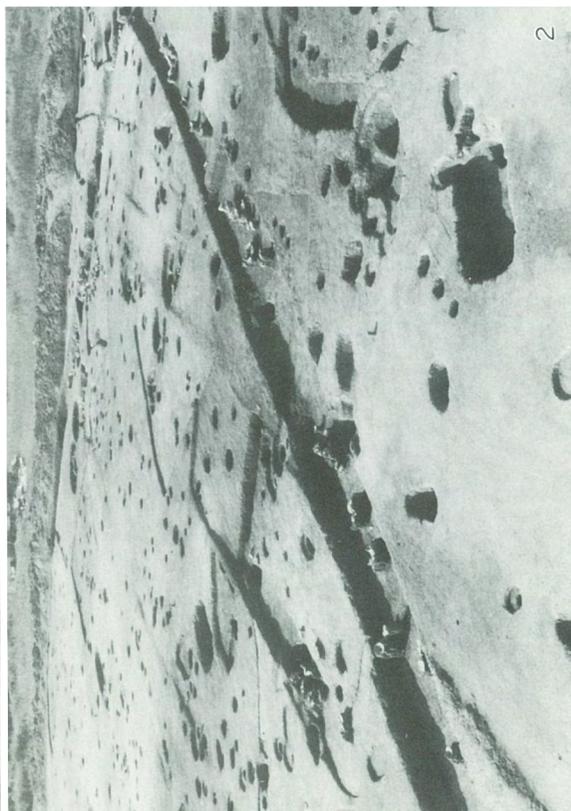
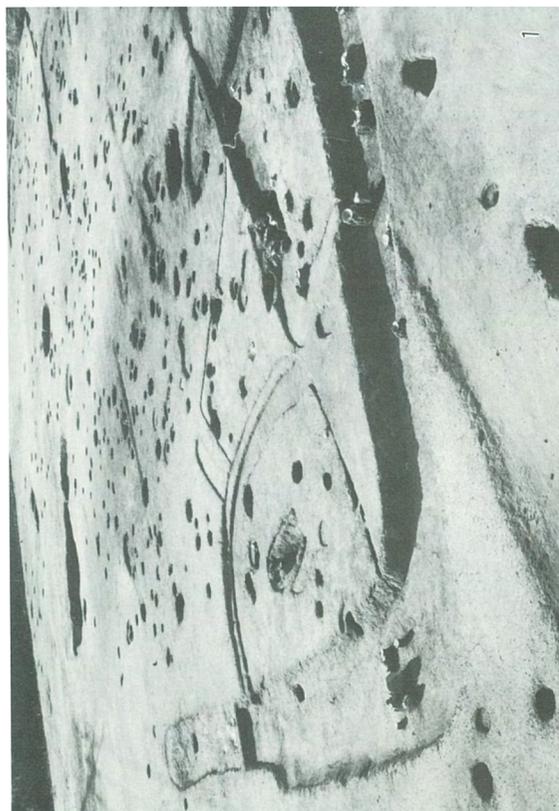
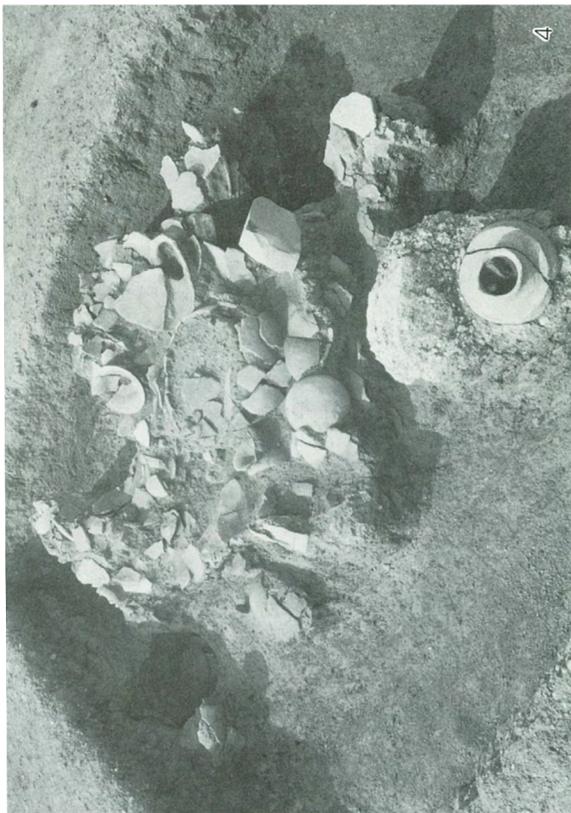
1. 10~15号住居跡群 2. 10号住居跡 3. 11号住居跡 4. 16・17号住居跡



1. 18号住居跡 2. 19・20号住居跡 3. 22~25号住居跡 4. 26・27号住居跡



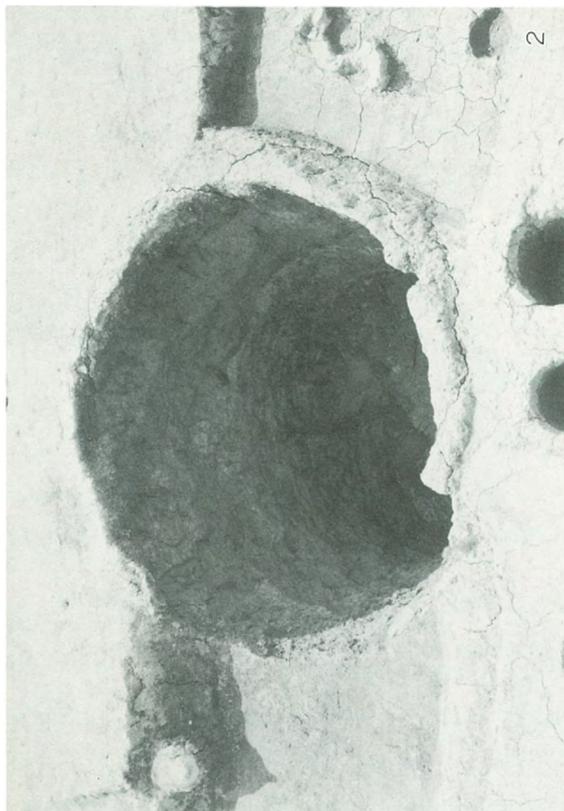
1. 29号住居跡 2. 30号住居跡 3. 31~36号住居跡 4. 31・32・34・36号住居跡



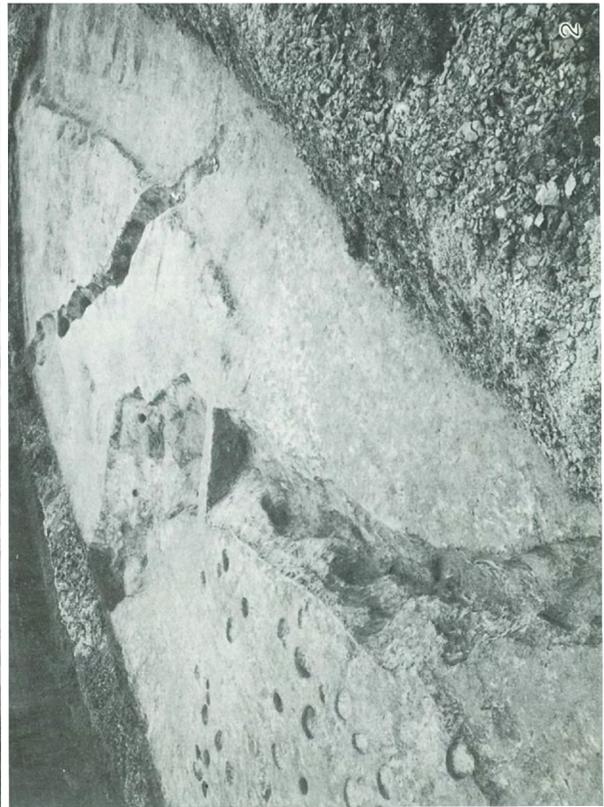
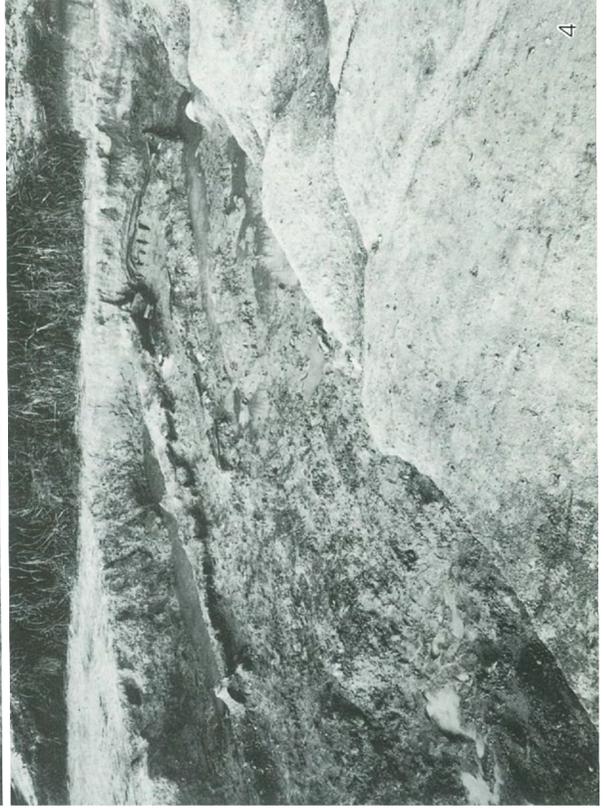
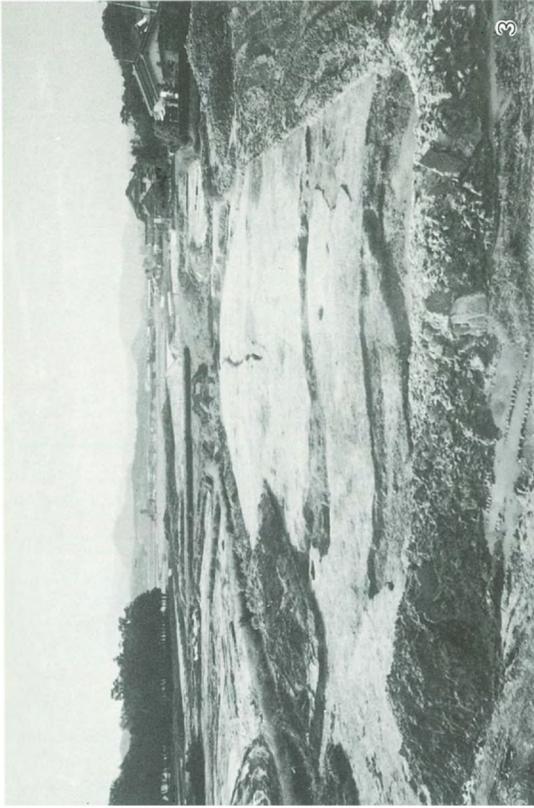
1. 環濠北東隅 2. 環濠北·西側 3. 環濠北西隅 4. 環濠西溝內土器出土狀態



1. 1号掘立柱建物跡 2. 4号掘立柱建物跡 3. 1号土坑墓 4. 墓坑内土器出土状态



1. 2号土墳墓 2. 1号井戸状遺構 3. 1号井戸内出土編物 4. 2号井戸状遺構

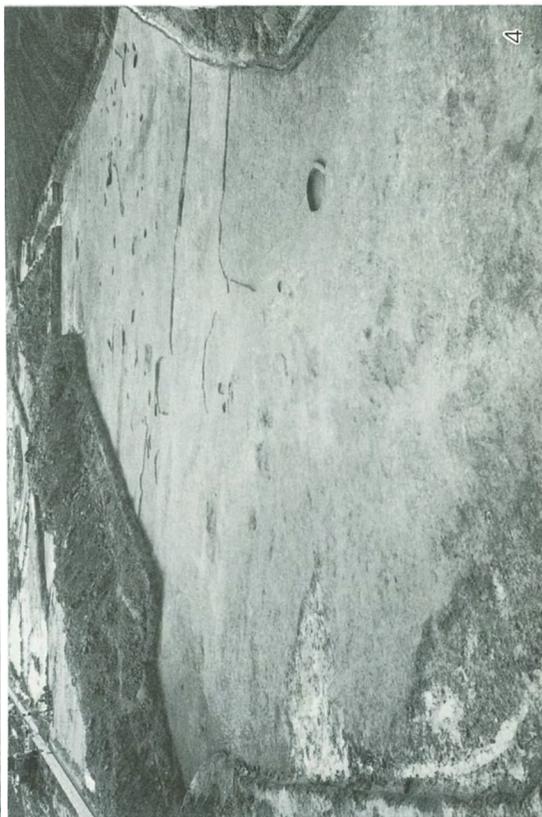
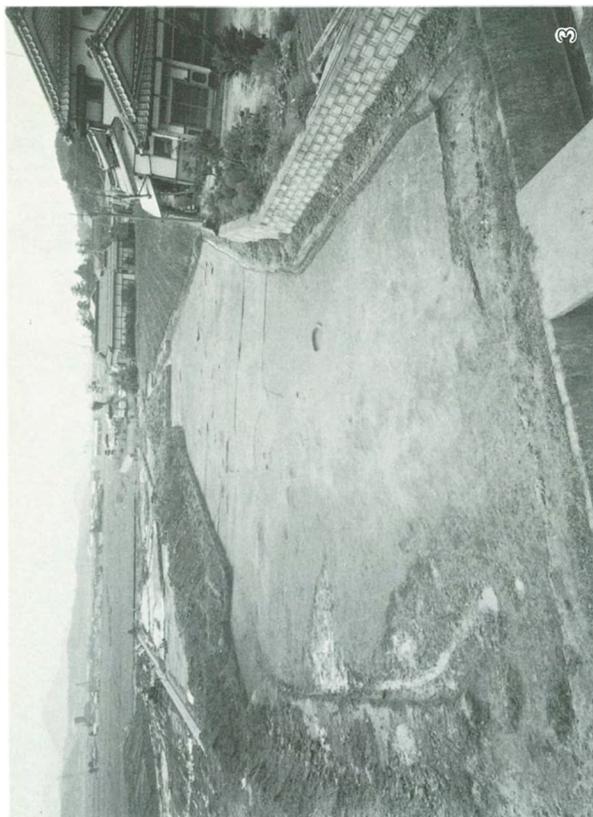


1. 柿木遺跡 A 地区全景

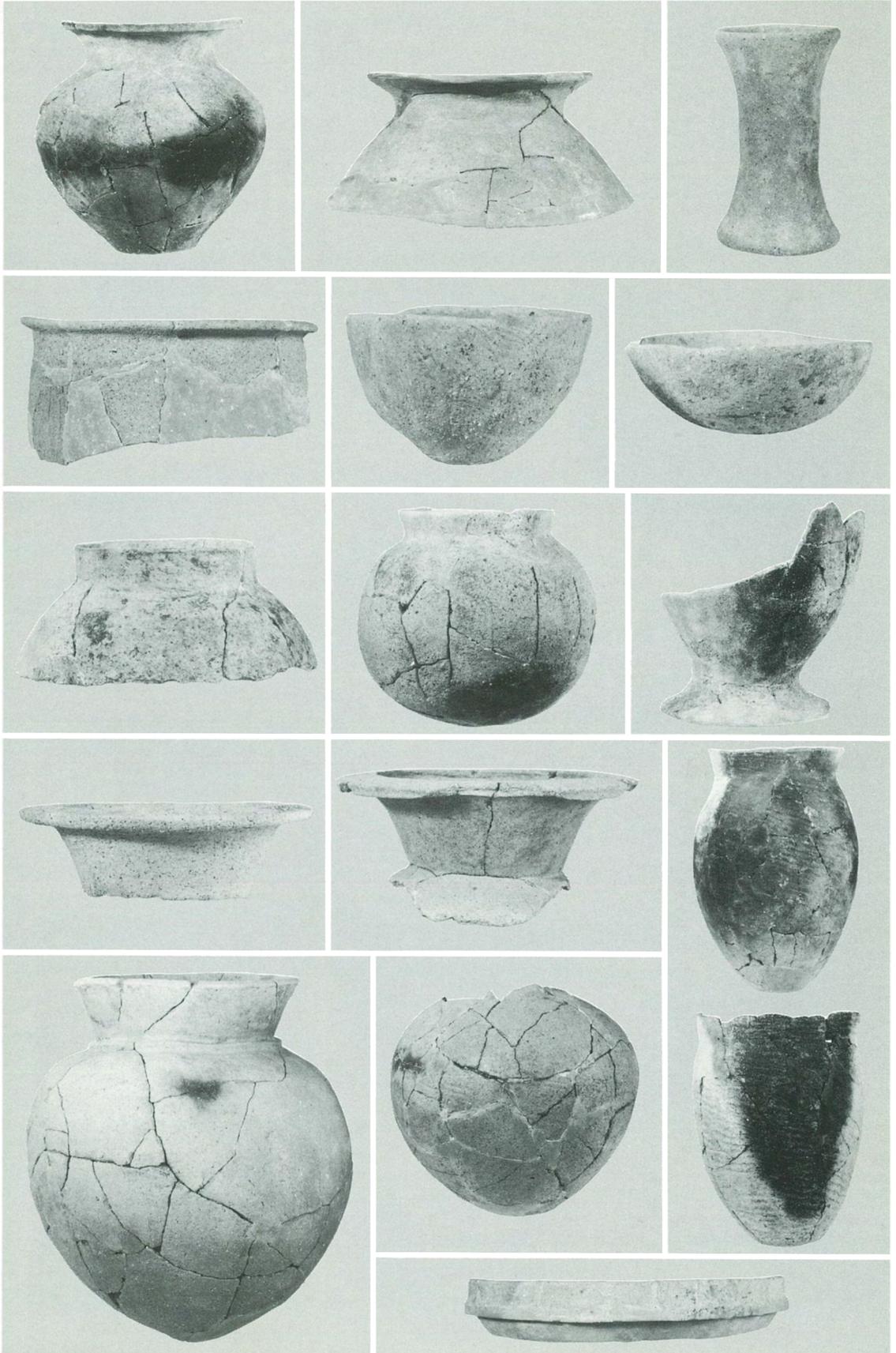
2. A 地区 1・2号溝

3. 柿木遺跡 B 地区全景

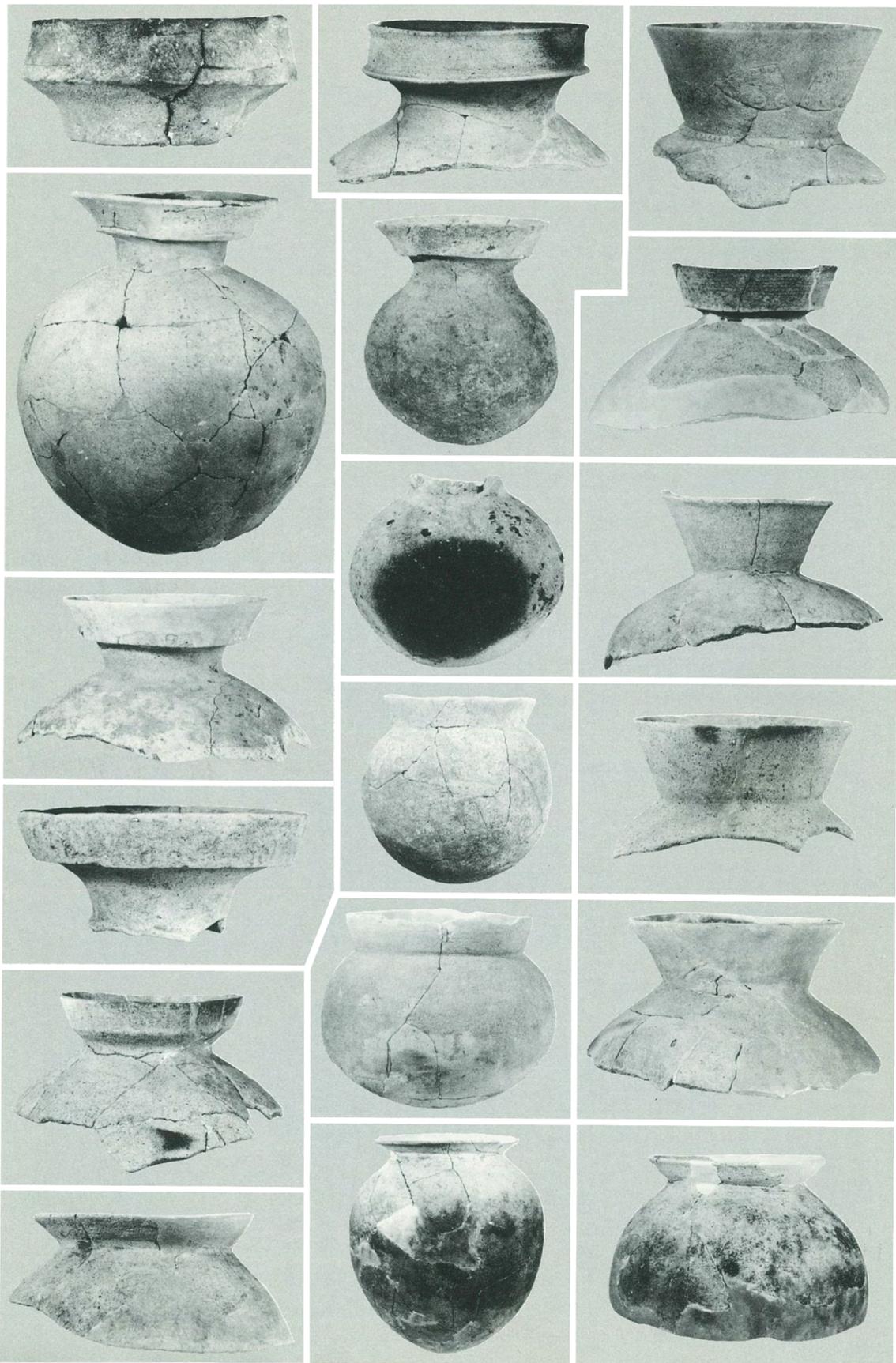
4. B 地区 1号溝と井堰状遺構



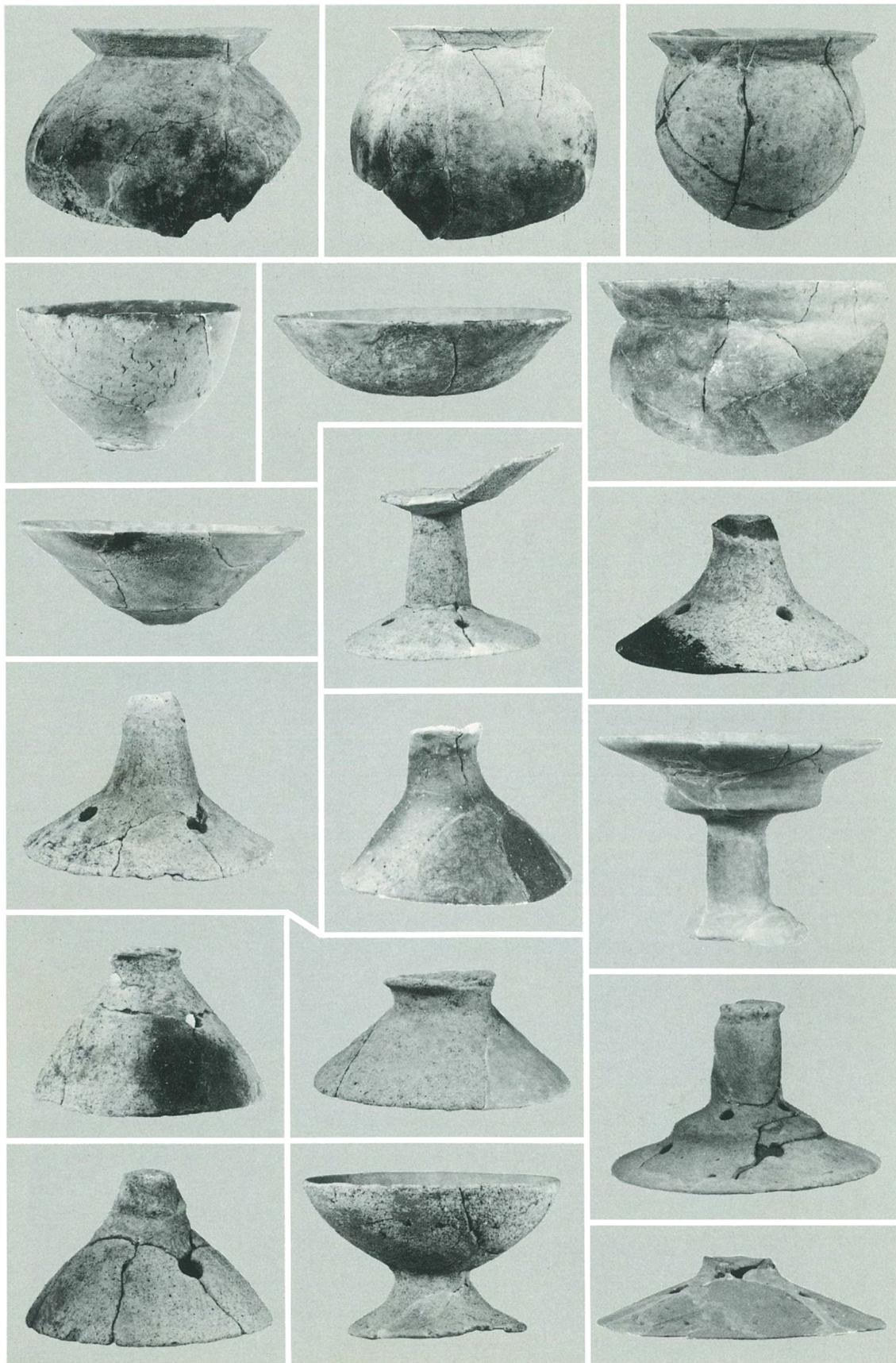
1. · 2. 井堰状遺構近景 3. 乙井手地区発掘区全景 4. 乙井手地区近景



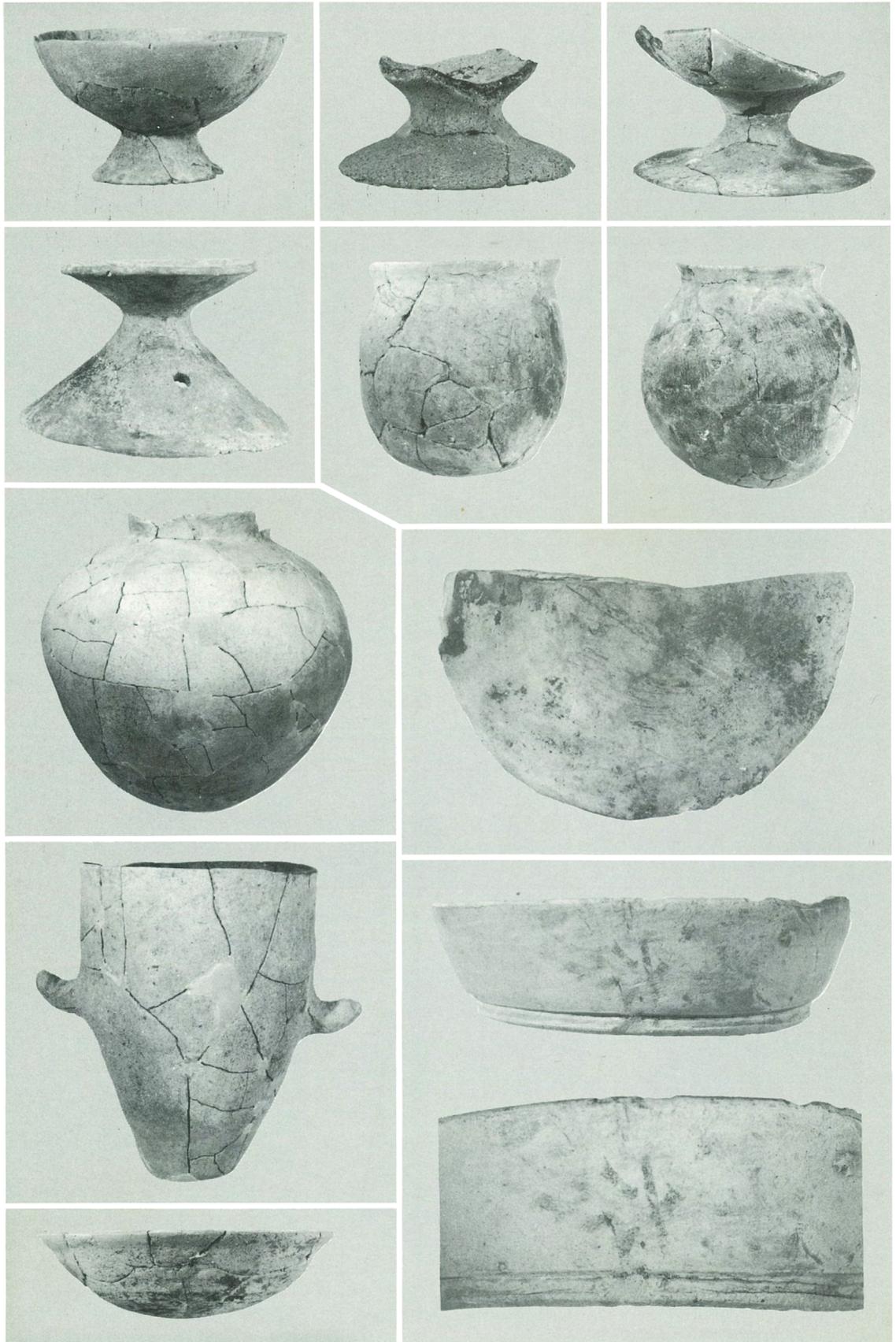
住居跡出土土器



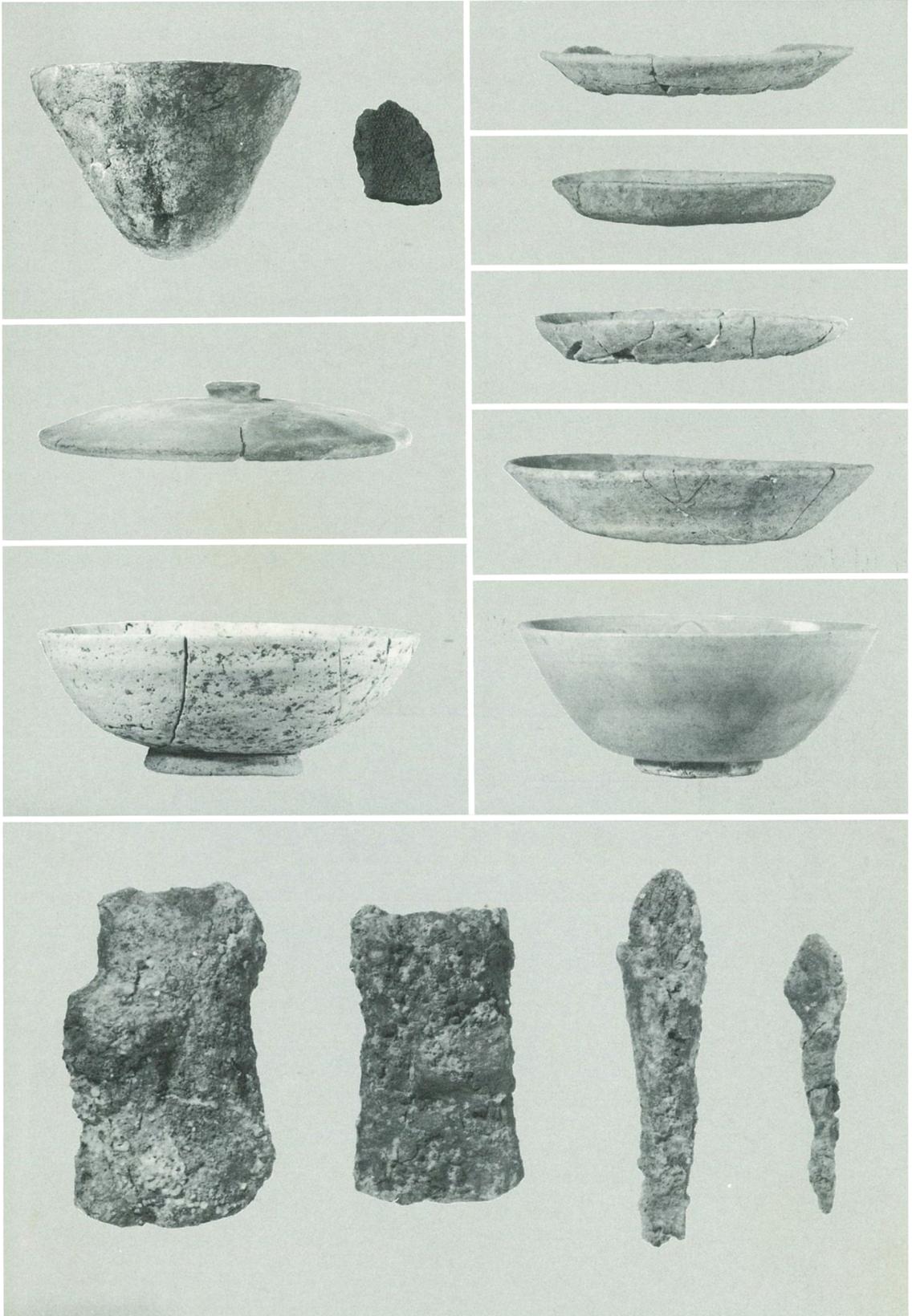
環濠出土土器



環濠出土土器



環濠・住居跡・井戸状遺構・溝出土土器



土壙・土壙墓出土土器・鉄器

穴江・塚田遺跡
嘉穂町文化財調査報告書
第 4 集

昭和 59 年 3 月 31 日

発行 嘉穂町教育委員会
嘉穂郡嘉穂町大字牛隈 201

印刷 青柳工業株式会社
福岡市中央区渡辺通 2 丁目 9-31